ようこそ魔界（クリフォト）へ！！

アンデルセン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ようこそ魔界（クリフォト）へ！！

【Ｎコード】
Ｎ９２２８Ｒ

【作者名】
アンデルセン

【あらすじ】
人生を全うし、子供たちに見送られ死去した筈の彼。それがどういう訳か、気づけば見知らぬ場所で、“人ならざる者”として一人草原で立っていた。
良く分からない内に、気づけば異世界で“スライム（ただし海外系）”となっていた彼が、この世界で諦めた夢を再び追いつつ、新たな家族を得て成長していく物語。

第一話（加筆版）（前書き）

この物語は、作者の他の執筆の休憩や憂さ晴らし時に書こうと用意したものです。
特に何も考えていない作品なので、色々おかしな点もあるかと思います。
更新は不定期、もしかしたら日に数度。あるいは週一、なんて場合もあるかもしれません。
また、合間などに基本書くため、文字数は多くありません。
基本的には二千程度だと思って下さい。

よくある内容ですが、付き合ってやって下さると嬉しいです。
それでは“ようこそ魔界（クリフォト）へ！！”をお楽しみ下さい！

第一話（加筆版）

魔界と言う言葉を知っているだろうか、あるいは異世界などと置き換えてみてもいい。御伽噺やゲームなんかで良く見かけるあの言葉だ。

ファンタジーではお馴染みな言葉であり、多くの様々な作品で取り入れられた題材。

魔界と言っても色々な世界がある。瘴気と呼ばれる人には有害な物が立ち込める世界、地上ではなく地下に広がり光の無い世界なんてのもあるだろう。

あるいは魔界は惑星そのものであり、幾つも存在している、と言う設定もあっただろうか。

そんなのは妄想の産物だ。人が生み出した夢幻に過ぎない。

と言うのも、実際その世界に行って帰ってきた者も居なければ、そんな世界が見つかったわけでもないのだ。

科学の世界では例えそれが存在していようと、証明もなにも出来ないのであればそれは無いのと同然である。

理論上は……なんて言葉すら当て嵌まらない産物なのだ、魔界と言う言葉は。それでも愚かな者たちは夢を見る。その最たる例が“小説”かもしれない。

人の妄想を形とした一つの完成系。一時、その小説と言う分野において“転生モノ”と呼ばれる話しが一大旋風を巻き起こした。

転生と言う内容が一つの巨大ジャンルにカテゴリ出来るくらい、あっと言う間に広がり汚染し、他の領域を食い荒らしていったのだ。

どうしてそこまで急激に勢力を拡大していったのだろうか。

よく聞くのは時代の流れだとか、社会的風潮だとか、そんな言葉であるが、それに付け加えるのであれば“死と理想”なのかもしれ

ない。

人は遅かれ早かれ死に行く運命にある。それはどうしても覆せない真理だ。

それは途轍もない恐怖である。死は恐ろしい、時代が進むにつれ、死後の世界と言う言葉はその効力を失っていった。

同時に縋るよすがを無くし、死と言う概念がより強く人々に降りかかっていく。それらを回避すべく一部の人は不老不死と言う甘い幻想に縋り、人生を無為に振っていった。

歴史を少し紐解けば不老不死の夢にとりつかれた者を見て取れることだろう。それだけ人は死に抗おうと必死だったのだ。

時代が進むにつれ、それが夢まやかしと気づき、不老不死と言う願いは形を変えていく。

それこそ“転生”だ。死は逃れられない、ならば……生まれ変わって記憶を引き継げばいい。

そう行った方向へと思考が曲がった結果、転生と言うモノは急激な勢力拡大に至ったのではないか。

死は逃れられないと言う思考は確固なものとなったが、それを受け入れるのは辛い。

受け入れることは出来ても希望は捨てられない。終わりは確実に訪れる。だからこそ一縷の希望を望む。

それらを文にし転生と言う形にした結果、時代に見事マッチングし一大旋風を巻き起こした。

無論、そこには上記以外の理由も多々に含まれるだろう。例えば純粋に別世界で異なる知識を用いることで得られる富だとか、あるいは純粋に力であったり作者の願望であったり。

上記の理屈だって決して正解ではないだろうが、一因である可能

性も零ではないのではないだろうか。
そしてそんなどうでもいい考察を思考した彼も、別段転生なんて言葉は信じていない。人は死んだら無となる。二度と目覚める事の無い零へと還る。それが彼の自論であった。

更に言えば魂なんてものも信じてはいない。そんなものがあれば、世はどれだけ魂であふれ満員電車状態であるのか。
そう考えると無限に増えていく魂と土地がつりあう筈が無いと、勝手に思考してしまうのだ。
もしかしたら魂とやらの数は一定数なのかもしれないし、宇宙の膨張のように天国や地獄も規模を拡大しているのかもしれない。
それでも所詮想像は想像に過ぎない。が、別にそういった類のものが嫌いと言う訳でもなかった。逆に一般的な考えに基づくのであれば、彼はＦＴ小説なんかは大好きな部類と言えよう。

特に吸血鬼が好きであった、もしかしたらそれもその長寿、あるいは不死性に無意識で憧れていたのかもしれないが、それはとても些細なことだ。
いわゆる転生ものと呼ばれる小説も多く目にしたし、暇があれば自分で書いてもみた。若人の時には様々なゲームだってプレイした。
ネットなんて便利なものがあるお陰で、誰でも気軽に人の目に触れる場所で小説は書ける。
それでもやはり、転生なんて言葉も、魔界なんて言葉も信じてはいなかった。そんな彼の人生約百年間、全てをぶち壊す事態が起きている。

孫や曾孫息子達に看取られ、一般的に言えば至極幸せな最後を迎えた筈の自身。

それがどういう訳か、暗い意識のシャットダウンから目覚めれば、見知らぬ場所にぽつんと一人っきりではないか。

彼が転生やらと考えてしまった理由の一つだが、それだけではない。ふいっと“腕”を掲げる。が、腕の代わりに視界に移ったのはいわゆる触手であった。

それも俗に言うスライムとかと呼ばれるタイプ。某ゲームのトンガリ頭のような可愛らしいモノではなく、粘液質で半透明の一見透き通った水色の触手。

不定形の肉体は流動しており、その触手を見ただけで自分の姿がかなりのキワモノとなっているのは想像に難くなかった。

そう、気づけば見知らぬ場所に一人っきりであるばかりか、どうやら人では無くなってしまったらしい。

そこで現実逃避に状況整理もかねて考えていたのが先程の思考と言う訳であった。

もしかしたら自分は死んでおらず、どこかの秘密機関に肉体を改造された……

なんて言う可能性も考えたのだが、一般人と呼んでは少しだけ特異な人生を歩んだ彼だが、最終的にはそう呼んでなんら語弊のないだろう彼を拉致して肉体改造を施す意味は無い。

ましてこうやって野に放つ理由も不明であった。野、今彼が居るのは地平線すら見渡せる立派な草原である。

自然が減少して久しい二ＸＸＸ年からすれば、驚くくらい青々とした葉が地面より突き出していた。そんな立派な草原を見渡しつつ、不思議と凪いだ心に彼は驚かない。

これが未練ある生の半ばであれば、何か思うところもあったのかもしれないが、彼は死ぬ寸前満足していた。

やれることをやったし、幸せと言える人生を真っ当した。彼はちょっとした一事より家族と言う言葉と繋がりを大切にしていたのだ

が、結果的にそれは巡り廻って彼に返ってくる。
先に旅立った妻は居なかったが、その子孫は誰一人欠ける事無く彼が息を引き取る瞬間まで涙を堪え見送ってくれた。
当時では稀有な程の最後。小さいがとても意味のある終わりに彼は満足していた。ゆえに今の彼は人生を終えた後、思いがけず新たな生を得たに等しい。

前世と呼んでいいのか不明だが、彼が人であった頃の人生は既に完結しているのだ。それに百に近い年に老衰で死亡した彼は、滅多な事では驚かない胆力と精神を獲得していた。
それは年だけではなく、若かりし頃にアメリカで培った経験から来るものでもある。更に言えば、逆に人でないからこそ容易く踏ん切りもつこうと言うものだ。
人ならざる者だからこそ、人としての拘りも捨て去る踏ん切りが付こうと言う意味である。
そんな思考ももしかしたら人ならざる身になった影響かもしれないが、考えても仕方のないことだろう。
思考の海から一度脱却し、この先どうすべきかを悩む。取り敢えず未練は無いので、元の場所に戻ると言う選択肢を取る必要は無かった。

そうなるとこのどこかも分からない場所、あるいは地球なのか異世界なのか判然としない世界で生きていくしかないと言う訳だが……
ふと何となしに腕を意識して前方に意識を向ける、すると数を制限しなかった為か、ゆらゆらとクラゲの触手のように、無数の半透明状のぬるぬるした触腕が視界で揺れる。
かなり奇妙な光景なのだが、不思議と違和感を覚えない。まるでそれこそが自分の肉体であると錯覚してしまうくらいである。

どういう訳か、今の肉体の使い方が意識せずとも分かるのだ。この肉体がどう言うものかは流石に分からないし、ここがどこかも不明。

今の境遇に恐慌することはなくとも、どうすればいいのかで彼は悩んだ。苦悩する彼を尻目に、無数の触手だけがゆらゆら、ゆらゆらと不気味にたゆたっていた……

第二話（加筆版）

取り敢えず悩んでも仕方がないと、数時間程この草原をうろついた結果幾つか判明した事がある。

例えば移動速度。現状ではまるで這いずるような移動しか出来ず、その速度は非常に遅い。どんなに頑張っても生前、それもまだ若かりし頃の歩きよりやや遅いくらいが限界であった。

これではもし何か脅威に曝された場合、満足な回避行動を取ることが出来ない。それは流石に不味い、折角得た新たな生を無駄に捨てるのは忍びなかった。

それならばと触腕のように、足も生やせるのでは……と試してもみたが、残念ながら自重を支えることは出来ないようだ。

その後も色々試行錯誤してみたが、よくあるスライムなら変形！も試すも残念ながらそれも無理であった。

そこで取り敢えずは彼としても遺憾ではあったが、一先ず移動速度に関しては放置することにする。

現在の肉体がどんな姿なのかも気になったので、触腕を伸ばし前に掲げ、その液体を鏡として見たところ、どうやら不定形な円のような形状でゲルが伸びており、その中心が盛り上がるような形をしているらしいことが判明。

そこから必要に応じて触腕を伸ばしているようである。触手の腕と書いて触腕（しょくわん）と読むのだが、数に決まりはないが、多すぎると肉体の面積がその分減りバランスを崩してしまう。

不思議な事に視覚を得る器官が見当たらなかった。一体どのような原理で視覚的情報を得ているのか不思議であったが、これまた考えてもしょうがないと早々に思考を破棄。

そもそもそれを考えれば同じようなことがいくらでも沸いてくる。

例えば最大の疑問点は脳もないのに、どうやって今もこうして思考しているか、などなどだろうか。

他にもやはりと言うか、この草原がかなり広大であると言う事実が判明した。

歩きに劣る速度とは言え、それでも数時間。そこそこの距離を移動したと言うのに、あいも変わらず視界に広がるのは原っぱであり、他に見える物と言えば時折広葉樹がまばらに群生しているくらいだろうか。

そんな風景が飽きもせず三百六十度広がっていた。疲れと言うのが無いのか、それとも体力値が高いのか、少なくとも肉体的な疲労は現時点では感じていない。

この草原で小動物のような生き物に遭遇する事二回、そして今、ある意味でここが地球ではないと思えるような場面に彼は遭遇している。

目測でおよそ百メートル程前方で“ソレ”は移動していた。半透明の水色のゲル状の不定形な肉体。どう見ても“同類”である。

（つまり私は何かこの世界の生態系に属する生物、その一つに憑依なり生まれたなりしたと言う事だろうか）

もしかしたら同じ改造を施された仲間であるとか、そういう路線も現状では零ではないが、可能性は低いと見ていいだろう。

どちらにせよこのまま移動していけばいずれそのあたりも判明するのだ、焦る必要もない。現状問題なのは、今現在進行形で巻き起こっている“衝動”であろうか。

仮の名称として自身を含めた対象種族を“ブルースライム”と名

づけたとして、彼は前方で這いずる同胞を見つけた瞬間、何とも許容し難い衝動に襲われたのだ。
それはあえて妥当な言葉を当て嵌めるとすれば、“食欲”、あるいは“餓え”や“渇望”などに近い感情であった。
何とか理性を総動員して耐えているが、その衝動は凄まじいものがある。そう長い時間耐えるのは難しいと言わざるをえなかった。

何とか視界からブルースライムを追い出し、背を向けるように移動すること十数分。
ようやく凶悪かつ凶暴な衝動は形を潜めた。呼吸器官があれば荒い息を吐いていたかもしれない。
まるで長い距離を全力疾走したかのような消耗感。移動で疲れたのではない、衝動に抗うのにそれだけのエネルギーを要した結果だ。
次同じような衝動に襲われた場合、彼には先と同じく再び耐え切る自信はなかった。もしかしたら何れ慣れる事もあるのかもしれないが、少なくとも一回二回では到底無理だろう。
この衝動が生来のものであるのか、それともこの肉体となった事による為か、あるいはこの肉体に対して“彼”と言うイレギュラーが重なったのが原因なのか。
それは全く持って不明であったが、肉体の扱いが見知らぬ知識で分かったように、恐らくは“この肉体となった”ことが原因であると彼は感じていた。

まるで彼と言う存在に、この生物の情報を上乗せしたような状態と言えるかもしれない。
それが消耗した体力と疲弊した精神を癒すために一時間程移動せず、その場で立ち止まっていた間に出た結論であった。
知らない知識や情報が脳裏に浮かぶ、と言う事自体はそれなりに

気持ちが悪い事であったが、この訳の分からない場所で生きていくと言う点で言えば有用であるのも事実。

この世界を異世界と仮定した場合、どんな危険があるのかはおろか、既知の生態系や環境とは大いに違う可能性も高いのだから――――

さて、再び移動を開始しようとしたところで気づく。再び衝動が己を蝕んだのだ。ただし、それは生物として有り触れた衝動、“食欲”であった。

失ったエネルギーを求めた肉体が、空腹と言う形で彼にエネルギー摂取を求めてくる。

こんな肉体でも空腹を感じるのかと思いつつ、腹を満たしたいのは彼も山々であったのだが……

（食い物なんてここらにはないだろう。そもそも私は何を食べればいいのだ？）

そう、第一前提として何を食えばいいのか不明であった。約百年間人間として生きてきた彼に、こんな不定形生物の主食なんて知る訳がない。

この際美味しい料理は我慢するとして、最悪生ものを食するのも許容するとして。

その辺の植物、あるいは肉を食した結果それが猛毒であり、あっさり死亡――――と言う展開は流石に勘弁であった。

幸い生来の肉体ではなく、その身はこの世界のものである為、地球に存在しない菌でもある程度抵抗力を持っていると思われるのが救いだろうか。

と言っても空腹は中々に強力で、このままでは数日としない内に飢餓で狂ってしまうだろう。下手すればその飢餓感は人であった頃よりなお強力だ。

流石に地面に生えている草木を食する気にはなれない為、ここは小動物の類を捕食しようと決意する。

意識上とは言え、生き物を捕食――殺す――事になんら感慨が浮かばないのはやはり人生の経験値と言うよりは、肉体による影響かもしれない。

そんな事を考えつつ、どこを向いても草と木しかない広大な草原、その中から生き物を探し出す為にあちらこちらへと這いずりまわっていく。

結局彼が獲物を仕留める事に成功したのは、実にそれから丸一日以上経過した後であった……

今彼の目の前には一匹の小動物が転がっている。あえてその見た目を描写するとすれば、ウサギに近いだろうか。

全長はざっと四十センチ程。色合いは草原に擬態する為か緑に近い色であり、最大の相違点は額に十センチ程の“角”があることだろう。

他は彼の知る地球のウサギと驚く程近い姿である。そのふさふさの毛も、つぶらな瞳も、長い耳も同様だ。

そんなウサギだが、もしかしたら草食性ではなく、その角で獲物を仕留める凶悪な肉食性なのかもしれない。

と言うのも、この仮称“ホーンラビット”。いきなり彼に角を向けて飛び掛って来たのだ。

他の小動物はなにやら彼を恐れて逃げてしまい、決して早くはない歩みでは追いつく事が出来なかった。

それが今回は向こうから襲い掛かってきたのである。一体どういう訳か興味深いことではあったが、それより問題なのは“衝動”であった。

あの飢餓や餓えにも似た衝動。それをこのホーンラビットからも感じていた。幸い、同胞らしき姿を見た時よりは控えめだがそれでも空腹にある今の状態ではかなり辛い。

やはり幸いと言うべきか、この不定形な肉体は存外に戦闘向きであった。不定形生物と言うのは存外に汎用性が高いのだ。

まず恐らくだが中心で浮いている球体――恐らくは核――を傷つけられない限り、肉体的損傷はあってないようなものらしい。

角で貫かれても痛みはなく、一部切り飛ばされても極短い時間の間であれば肉体に吸収して再生出来るのも確認出来た。

高熱に弱いだとか、極度の冷却に弱いだとか色々あるかもしれないが、少なくとも物理的な攻撃にはそれなりの耐性を保持していると言えるだろう。

他にも大気――酸素なのか窒素なのか、あるいは他なのか判明出来ない為――を取り込む事で、意識した部分の肉体をそれなりに強力なアルカリ性に変化させる事が出来るのも判明している。

それを利用した触腕をムチのように振るい、相手を打ちすえることと高濃度のアルカリで肉体を侵食していったお陰で、ホーンラビットを撃退することに成功した。

ｐＨ値は案外役に立たない場合も多いので、正確なアルカリの強さは不明だが、少なくとも液そのものではないゲル表面だけで毛皮を溶かすだけの威力はある。

もしかしたら酸性にも変えられるかもしれないが、今のところアルカリが一番簡単に上手くいくようであった。

とりあえず襲い掛かってきたとはいえ、生き物を殺す事に躊躇いのない自身に安堵の息を吐く。

彼は生前、若かりし頃それなりに精神的鍛錬をちょっとした事から積んでいるが、それでも最盛期から言えばそれも随分衰えている。

もしここが本当に地球ではなく、どこか別の世界であるのならば、下手な罪悪感などは死を呼び込みかねない。

ゆえに、例え地球基準で異常だとしても今の精神状態は有り難かった。原因不明で得た新たな生だが、無残にそれを捨てるつもりはない。

生前に未練は無いが。生そのものへの未練ならたっぷりとあるのだから。生き足掻く。それは彼がアメリカで“教官”と呼び、世話となった人から叩き込まれた最早本能だ。

――さて、そろそろこれを“食べる”としよう。

そう思考して触腕をするするとホーンラビットに伸ばし、そのままひょいっと持ち上げたかと思うと、とぷりっ――と音をたてて肉体で包み込んでしまう。

本能のように理解出来た食事方法。これが今の己の捕食であると何となく彼は理解していた。

今の肉体は生前百九十近い日本人としてはかなりの背を誇った肉体とは比べるべくもない程小さいが、それでも円形のゲルは一メートル近く広がっており、中心の盛り上がりも同じくらいである。

小動物の一匹や二匹は容易く取り込む事が可能だ。ホーンラビットは瀕死ではあったが、完全に息絶えた訳ではなかったらしい。

取り込んだ途端、最後の足掻きとばかりにもがくように暴れだしたのだ。窒息からなる苦しみのせいかもしれない。

核を傷つけられては堪らないと、大気を軽く取り込み、ホーンラビットの辺りのゲルを強いアルカリに変化させていく。

瞬間、あっと言う間にドロドロに溶かされていくホーンラビット。それだけでも相当に強力な塩基だと窺い知る事が出来た。

スライムと言えば、彼の世界では雑魚に等しい扱いが多かったが、こうして実際に扱ってみれば中々に厄介ではないか。

危機に反応したのか、あるいは最初からこの濃度なのか、そう時間も掛からずホーンラビットは動かなくなりそのまま形を失っていく。

瞬間――ドクンッ――と、心臓の代わりとも言える核が震える。飢えにも似た衝動が満たされ、何とも不思議な高揚感が肉体を包み込む。

酩酊感にも似た感覚はまるで快楽のように駆け巡り、暫しの余韻を残して消えていく。

（今のは一体……？）

ホーンラビットを溶かしたからなのか、それともトドメをさしたからなのか。

どちらでもあるタイミングであったため判然とはしないが、ただ食欲を満たしたのとは明らかに違うと言うことは彼にも理解出来た。

ほんの僅かだが、それこそパーセンテージにすれば一パーセントに満たないレベル。

しかし、確実にこの肉体の“性能”が向上したのを感じ取れる。

まるでパズルのピースが嵌め込まれたように理解する。

（理由は不明だが、あの飢えとも渇望とも言える衝動を感じる相手。

それを取り込むなり、息の根を止めるなりすると、より肉体の性能が上がっていく？）

もしかしたら違うかもしれない。たまたま偶然と言うこともある。それでもこの思考が少なからず間違いではないと、本能のようなところで理解していた。

そして同時に感じる疑問。それはつまり、自分もあの衝動を感じたように、襲い掛かってきたホーンラビットも衝動に襲われたのではないか。

他の小動物が逃げていったのに対し、逆に襲い掛かってきたのもそれなら説明がつく。

対象により、あるいはランダムなのかは不明だが、衝動の強さに差はあれど、それは少なくとも確固な自我をもってすら耐えがたい程である。

理性のない獣があれに抗えるとは到底彼には思えなかった。

もしかしたら何らかの抜け道はあるのかもしれないが――そうでないと、生態系があっと言う間に崩壊しかねない――現状取れる選択肢はそう多くはない。

ふと、完全にホーンラビットが原型をとどめないくらいに溶かされ、肉体に循環され始めたのを感じる。

今自分を見たら、赤色やら肉色やらが混じっている精神衛生上よくない姿が見られるだろう。

生前、死体や肉片はそれなりに見てきたが、それでも流石に自分からそんなグロい姿を見たいとも思わないので、とりあえずの行動指標を決定する。

まず、食料に関してはこの肉体が毒物にそれなりに耐性があると信じ、今回のように獲物を仕留めていく事とする。

同類、もしくは明らかに己より強力な固体を発見したら出来るだけ身を隠す。例え満腹であろうと衝動は感じる可能性が高い、無駄な戦闘で命を落とさない為にも重要なことだ。
敵わないのであれば逃げる。敵対勢力との戦力差を把握するのは基本的なことである。

そう決定すると、取り敢えず見つかりやすい草原は悪条件だろうと、再び移動を始めた……

彼がこの世界に来て数日が経過した。つい先日ようやく草原を抜け、今度はその先に広がっていた大森林へと来ている。
いや、大森林と言うのはやや語弊があるだろうか。何故なら奥に行くほど群生している植物は奇怪なものとなり、木々の樹齢も増していくのだ。原生林や樹海と言った方がいいかもしれない。
この樹海を発見したのは偶然だが、見晴らしのよい草原は敵対生命体の発見も早いが、見つかる可能性も高い。
そして現状の肉体での移動速度は、遺憾ながらも非常に遅い。それを考慮すれば森が生存には最適であった為幸運と言えよう。

ここ三日四日で、幾つか判明した事もある。まるで先人がそうしたように、樹海のようなこの場所で生っている実を幾つか取り込んでみたのだ。
先に小動物を捕まえ、その動物の口に果実を突っ込んで反応を見てから勿論体内に入れている。小動物の反応が不定形たる身と同じとは限らないが、少なくとも同じ星の生命体。
極端な違いはないだろうとの判断である。分かったのは基本的に

派手なのは毒性を持っていること。
そして比較的毒性の弱い果実で肉体の耐毒能力を調べると、案外平気であることから、最低限以上に耐毒性能を保有していると分かった。
流石に猛毒だと思われるものは試していないが、それでも十分な成果である。

どうしそんな実験紛いの事をしたのかと言うと。味覚らしきものはあるらしく、流石に肉ばかりは飽きてきたのだ。
感じる美味の基準も変わっているので、生肉が不味いと感じる事は無いのだが、それでも他の物を口にしたくなる。
そうして試行錯誤の末に手に入れた果実は、何とも瑞々しく、そして美味であった。味は何とも表現のし辛いものから、リンゴや梨に似たものもあって懐かしい思いにも駆られたものだ。
おかげで食料に関してと、水分に関しても解決でき、ようやく行動にも余裕が出てきたところである。
そして今、彼はちょっとした新たな実験を行っていた。人生約百年間、男として生をまっとうした彼だが、憧れのようなものを終生抱えていた。
“絶対強者”、その四文字。一度くらい誰でも憧れたことはあるのではないだろうか。

何人にも勝る力。それは頭脳でも、純粋な膂力でも、あるいは闘争における戦闘能力とでも、はたまた政治や商業的手腕でもいいだろう。
一口強者と言っても様々な分類が可能だが、その中でもとりわけ彼は戦闘と言う分野においての絶対強者に憧れを持っていた。
始まりの原点はなんであったか。あまりに古い記憶の為彼自身定

かではないが、恐らくはまだ幼い頃見たテレビの格闘番組が切っ掛けであったと彼自身は認識している。

若い頃には独自に友人らと格闘訓練のモノマネをしてみたり、古武術に手を出してみたりもしていた。

幸い才能も頭一つ分抜けており、努力した分だけ肉体はそれに応えてくれる。それが嬉しく、勉学もそこそこに武道の道へと彼は足を進めていく。

周りから見れば酷く変わった人物に見られていた事だろうと、今では彼ですら思う。それくらい、まだ学生の頃の彼は熱い思いを胸に秘めていた。

誇れる程の学歴ではないものの、そこそこの高校を卒業し。更に成人した後、自由に扱える金が出来れば友人の伝を頼って単身アメリカに渡り、そこの“教官”から直々に様々なことを学びもした。

そこで彼は望んだ事以外にも学び取るのだが、一番心に響いたのは“家族”と言う言葉である。

家族に碌な相談もせずアメリカに渡って来たと知った教官からは「馬鹿者がっ！　例え誰が敵に回ろうが、お前の味方をしてくるのが家族だッ！　それを蔑ろにするクズは私の下には要らんッ！！」と、そうはったおされては強制的に日本に帰されたものだ。

そこでようやく今までの道程を振り返る余裕を経た彼は、今までの己がどれだけ親不孝であり、そして両親が自身を自由にさせてくれていたのかを知る。

無論、教官の言葉も理想論ではあるのかもしれないが、それでも彼に衝撃を与えるだけの力強さがあった。

彼は良い意味でも、悪い意味でも、どこか子供のような人間だった。そうして両親に頭を地に下げ賢明に謝り通した結果、「好きにしろ。お前の人生だ。時折俺達の顔を思い出し、帰ってくればそれでいいささ」と父に言われ、彼は再びアメリカに渡る。

そこで待っていたかのように教官が「ようこそ私の元へ。今日から君は私の教え子であり、そして子であるのならば家族だ。血が繋がらなくとも、家族とは素晴らしいものだと教えてやろう」と口にした。

それからの日々は彼の人生でも一等輝いていたと言ってもよいだろう。学んでいる場所柄、紛争地域へと駆り出されたり、直接人を殺める機会にも出会ったが、それでもその日々は彼にとって宝石よりなお輝かしいものだ。

そんな少し当初の望む結果とは変わりつつも、何時までも冷めない熱を抱えながら進んだ結果。銃器の取り扱いは無論、ナイフ捌きや素手による格闘術だって教官からお墨付きを貰っている。

教官曰く「そう遠くない内に私と並ぶだろうさ」と言われ日には、彼は嬉し涙を零したものだ。

順風万端、見える道は輝かしく、少々血生臭いものの確実に望む力を得つつある。そう、彼は思っていた。

――――そこまでいって気づいてしまった。自分には絶対強者へと至るだけの才はないと。精々が一流止まり。天才と言われる者へは届かない。勉学で言えば秀才が彼の限界であった。

確かに、そのまま行けば教官に並ぶ実力を有せるだろう。その先には超える道だってあるかもしれない。

だがそれまで。その先は無い。なまじ人より一歩二歩優れていた分、それを理解してしまった時の絶望感は大きかった。

二十代も半ば、絶対強者への道は途絶える。それからは精々腕が錆付かない程度に自己鍛錬をし、それから一年足らずでアメリカで出会った女性と婚姻を結ぶ。

今でも腑抜けたような彼に対し別れ際に口にした教官の言葉は覚

えていた。「お前の夢は、熱はその程度だったのか――――」と。
そこからの人生は特に語る程の価値も意味もないだろう。
息子や娘に遊びがてら自身が培った技術を教え、一般的には幸せと呼ばれる生活を送り、気づけば孫が出来ていた。
ついこの間まではパパと呼んでくれた子が、何時の間にか子を成していた時には、なんと時というのは短いのかと思う程。
気づけば孫も大きくなり、己の肉体は皺くちゃの爺と成り果てている。夢は潰えたが、家族と言う絆は彼を癒してくれた。夢を忘れさせてくれた――――筈であった。

死ぬ間際に未練はなかった。人生に満足していた。それに嘘はない。妻はアメリカ人であったが、日本語を賢明に学びつつ、大和撫子を目指す努力家であったし、子は三人も恵まれ金銭的にも過不足はなかった。
子供のような憧れは所詮憧れだったのだと。諦めてしまう程度の熱意なのだと“思っていた”。
それがこの世界へと来て再び彼を苛む。燻っていた種火は“あの衝動”の先にある可能性、それを糧に轟々と燃え上がった。
そう、可能性だ。それは絶対強者への途絶えた筈の道。それが砂漠の蜃気楼かもしれないとしても、確かに目の前に存在していた。
だからこそ、今も実験を行うべく彼は“獲物”へと静かに忍び寄っている。

（――距離目測六十メートル。“擬態”の効力順調。対象目標“フォレストドッグ”こちらに気付かず）

全長八十センチ程もある、やはり森に擬態するためか、深緑色の

毛を持った仮称ネームフォレストドッグは彼に気付かない。
幾度かの“狩”により、取り込んだ色素を増やし、肉体の色を変化させることが出来るようになっていた。
更には自然物を取り込み、匂いを擬態させることで相手の嗅覚を誤魔化す。こちらは元から可能であった能力だ。
風下から近寄るのも忘れない。肉体は可能な限り薄く延ばし、必殺の一撃を叩き込むまで気配を限界まで殺して忍び寄っていく。
我を殺し、単調な作業を淡々と繰り返すのは慣れている。それは嫌と言うほど教官ら教え込まれた基礎の一つである。
密林の中、擬態装備と葉で肉体を覆い、観測としてひたすら待機していた経験も積んでいたのだ、成果が確実に見えるこの過程はそれに比べれば酷く易しい難度と言えた。

（――目測二十メートル……有効射程範囲まで残り十五メートル。対象、いまだこちらに気付かず。これより全神経を接近へと傾ける）

今まで以上に細心の注意を払い、音すら立てないように進んでいく。対象は気持ちよさそうに、木々の切れ目より差し込む木漏れ日でお昼寝中である。
それでも野生動物に接近するのは生半可の方法では無理だ。少なくとも、生前の彼では無理だろう。今の肉体だからこそ可能な芸当と言えた。
観察により、驚異度はそう高くないと判明しているが、それでも何か隠し玉がないとは限らない。この世界に対してあまりに彼は無知なのだから。
この肉体だって、この世界におけるヒエラルキーでどの辺りに位置するのか不明なのだ。
暫くは石橋を叩いて渡るように、それでも時には大胆に歩いてい

く必要があるだろう。そしてとうとうフォレストドッグとの距離が十メートルにまで縮まる。

相手を視界に移さず、焦点をぼかしながら残りの距離を今まで以上の鈍足で詰めていく。生物によっては、視線すら察知するタイプも居るのだ。

俗に言う“視線を感じる”と言う状態を防ぐ為の術である。一メートル縮める為に数分を掛けるが、出来るだけ速度も上げなければいけない。

対象が何時起きて、その場を離れるか分からないからだ。相手の様子を窺いつつ近づくこの行動は、酷く体力的にも精神的にも疲労する。

それでもここまでの努力が泡沫の泡と消えるのと比べればどうと言う事もない。

遂に触腕の射程範囲一メートル前まで接近する事に成功。が、同時にこれ以上近づくとバレると言うのも、肉体の性能のお陰か理解できた。

呼吸器官は無いが、イメージの中で深呼吸をし、するすると何割かの息を吐き停止。

確実に仕留めるという意思の下――――まるで伸び上がるように地面から肉体を持ち上げ、現状取りえる最高速度で残り一メートルを詰める！

草木を掻き分ける音にフォレストドッグが目覚め、威嚇の声を響かせる。その判断は失敗だ。とるべき選択肢は“逃げ”の一手であった。

その僅かな時間で鈍足と言えど、一メートルの距離を詰めるのは訳もないっ！　ずるずるる肉体を滑らせるように動かし、　瞬く間

に詰め寄ると即座に無数の触腕を放つ！
まるでムチのように飛来する一撃をイヌ科特有の身のこなしでフォレストドッグは回避し、ようやく事態を察し逃げようとするが、どうやら衝動が邪魔をするのか動きは鈍い。
それ以前にここまで詰め寄って逃がすつもりは彼にはなかった。
最初の一撃を囮に迂回するように忍び寄っていた触腕がその足に絡みつく。

『ギャッ！？　キャンキャン！！』

ジュワッ、と毛皮が溶け、そのまま肉まで溶かし始める。
生きたまま溶かされるという苦痛に哀れな悲鳴を上げるが、それを無視してずるずるとその肉体は引き寄せられ、あっという間に彼の肉体に呑み込まれていく。
同時に大気を摂取し、強力なアルカリとなったゲルが抵抗すら許さずにその肉体を溶かす。
ものの数十秒も掛からず、抵抗むなしくフォレストドッグは息絶えた。この塩基を発せさせる力も、当初からすればより強力なものへと変化していた。
核がまるで勝利に打ち震えるかのように脈動。肉体が快楽に等しい高揚に包まれる。
既に十回近く味わう感覚だが、何度味わっても慣れない程強い感覚だ。
まるで麻薬のようだと紛争地域で試した時の事をチラリと思考し、そして都合十度目の“強化”が終わるのと同時、やはりと確信に至る。

（限界があるのかは現状不明だが。特定の生物、衝動を感じる対象を殺す事で己を強化する事が出来る……）

衝動を感じない生物と、そうでない生物の差は不明だが、そんなことは些細なことであった。

どこまで強化出来るのかは不明であったが。人間が成長するように、この肉体も原始的な闘争を経て“強者”へと近づく事が可能なのだ。

ただその一事だけで彼には十分であった。ここにきて、彼の目標は完全に定まる。

思い出すのは教官の別れ際の言葉。今なら言える、そう――――

（どうやら、人で無くなった後でも夢を見るくらいには、私の思いは熱かったらしい教官）

生前一度は諦めた夢路。それをもう一度追う。誰をも圧倒する“力”を手に入れる道。

それを進む事をこの瞬間、彼は決意した。

第三話（加筆版）

彼の硬質化した触腕の一撃により、核を刺し貫かれた“同胞”がそのゲル状の肉体を震わせ、まるで痛みにのた打ち回るように奇妙な踊りを披露し、そのまま地面に溶けるように消滅。

瞬間もう何十と繰り返された“強化の洗礼”が肉体を包み込む。アメリカで様々な技術を学んだ時、実際に戦場へと行く機会が何度もあった。

と言っても本格的な国家同士の戦争ではなく、地域紛争のようなものであるのだが。それでも殺し殺されの場には違いない。

その時に恐怖心を忘れるため摂取した麻薬。まさにこの今も肉体を駆け抜ける快楽はそれに近い。

ああ言う地だからこそ出回っていたものであったが、元は日本人に過ぎない彼は戦場の空気に耐えられず思わず手を出してしまったのだ。

まだまだ未熟な時であるとは言え、今でも思い出せるその出来事は中々に彼にとって忘れられない汚点である。

その時の麻薬と違いがあるとすれば、依存性はともかく、この強化による祝福――便宜上そう彼が命名――での快楽には肉体を蝕むような効果がない。

麻薬の場合、何か軽微ながらも必ず精神や肉体への悪影響を有していたが、この祝福にはないのだ。

純粋な“力”とは別に、この快楽のみを求めて殺戮を繰り返す存在が居ても不思議はないかもしれない。

（それにしても、私はずっとこの肉体のままなのだろうか）

この恐らくは地球ではないだろう世界に来てはや一ヶ月程。夜と朝を数えただけなので、微妙にずれはあるだろうが、既にそれだけの日にちが経過している。

数にすれば優に三桁近い数の小型生物、あるいはフォレストドッグのような中型生物、同じ同胞のスライムを殺め、己が糧としてきた。

肉体は膨れ上がり、今では当初の二倍近い質量を誇っている。伸び上がれば生前の彼を超える身長かもしれない。

それだけではない。アルカリを操る以外にも酸性の方向にもゲルを変化させる事が可能だ。それこそ王水すら目ではない威力を誇る。

他にも一部分だけだが、一時的に岩並の硬度までゲルを硬化させ、即席の槍として扱う事も出来るようになった。

肉体の形も徐々に変化させることが出来るようになっており、移動時は蛇を模すことで移動速度の上昇に成功している。

今はまだ無理だが、その内四足の獣などの姿を模す事も出来るだろう。形を模すのと同時、簡易ながらその構造をすら模すが出来るのだ。

それでもスライムはスライムであった。今の肉体も便利ではあったが、折角ならもっと別の生物になりたいとも最近では思う。

例えば有名どころで言えば西洋竜（ドラゴン）。ファンタジーではお馴染みの最高クラスの魔物だろう。

力強い巨躯に翼、それらは人ならざる身となった今では中々に魅力的である。あるいは亡霊（ファントム）に連なる死者の王リッチ。

魂があるのは今なら信じられそうであった為、それなら亡霊のような種も居るのではないかと思ってしまう。

様々な強力な種は物語上であれば存在するが、特に一番憧憬が強いのはやはり“吸血鬼（ヴァンパイア）だろうか”。

この世界に存在するかは別として、折角ならそんな存在でありたかったと思うのは、この世界の生活にも慣れ始めた彼の心が生む余裕なのか愚痴なのか。

それとも少しずつだが成長していく肉体を見て、叶わぬ可能性を考慮してもなお見る夢路か。

どちらにせよ、今も彼は確かに生き残っている。原初の力がモノを言うこの地で、時に格上より身を隠し。

時に失敗で身を傷つけながらも、やってきた初日とは比べるまでもない“力”を身に着けて、今日も彼は夢路を邁進する。

それでも流石に意思疎通の出来る者が誰一人居ないと言う事実は、精神的に屈強な彼でも中々に堪える事実ではあるのだが……

深い樹海。苔むした巨木が連なる緑の海。二週間程前から森の入り口周辺から奥へ奥へと進み、今ではかなり深部で生活していた。

ここらまで来ると、彼の居た世界との相違点も数々に見られる。

深い霧が立ち込め、明かりを放つ苔が数十メートルの高さを誇る木々を覆い、倒れた巨木に新たな苗が芽生える。

見かける昆虫は見たことも無い姿をしていた。色も原色をマーブルに混ぜたようなものから、景色と完全に同化しているものまで様々と。

その大きさも数センチ規模から、時には一メートルを優に超す化け物クラスまで生息している。

最早それらは怪獣と呼んで差し支えないレベルだ。あるいは魔物と呼称してもいいかもしれない。

百足（むかで）のような肉体に、蜻蛉（とんぼ）のような羽を何対も生やし木々を泳ぐように飛行する生物。

しかも大きさが大きなもので三メートルクラスときた。その強力

な顎や、堅牢な甲殻もあいまって彼では今のところ太刀打ち出来ない。

酸や塩基も、どうやらこの世界では元から耐性を差はあれど持つ生物が多く、確実性に欠けた。

他にも巨大な蟻（あり）のような生物や、蠍（さそり）を巨大化した生物。こちらの尾っぽの毒性は凄まじく、木々などに垂れるだけでその部分が瞬く間に腐食していく。

中でも一等厄介なのが、蜘蛛のようなタイプで、目に見えないくらい細い糸でありながら粘着力、および強度に優れた全長数十メートルの巨大な巣は一度捕らわれると、後はその毒牙を待つだけとなる。

今は正直一割も対抗出来る生物が居るか怪しいだろう。それでも仕留められた時の祝福は強く、魅力的であった。

植生も色々と混沌としており、ラフレシアを更に巨大化し、色も派手にしたようなものが何か巨大な生物の死骸に取り付き、その中心から胞子を撒き散らしていく。

ツタのような植物は近づく獲物を絡めとり、そのまま種を植え付け生きたまま苗床とする。

一見美味そうな果実。毒もないように見え、その実種は生半可な方法では消化出来ず、僅かな時間で発芽、体内より肉体を侵食していく。

カラフルな茸達。猛毒は勿論、気付かないうちに胞子で幻影を見せられる。そんな生と死が隣り合わせの世界に、なぜ彼が来たのか。

今も可能な限りの隠密行動を取り、地べたを這うように獲物を探し、逆に気取られないよう移動して行く。

理由は幾つかあった。一つは雑魚ではあまり成長を見込めなくな

ってきたのだ。
感じる衝動も弱くなってきており、より衝動を感じる種を探していった結果、辿り着いたのが今の秘境。
他にも自分は現在どの程度の力のヒエラルキーに存在するのか。それには己より更に強い存在を見るのが早いと、そう言う意味合いもあった。
この樹海の生き物達が基準になるので、世界基準でどうなのかは不明だが、それでもないよりはマシだろう。
結果的に言えばまだまだ最底辺にも近い。それがここ一週間で理解した現実である。
時折空に翳るシルエットは優に数十メートル規模の生物だし、最奥より現れる生物は今の己が何十と居ても歯が立たないものばかりだ。
この身の寿命がどれほどあるのか不明だが、特殊性を考えれば短くはないと彼は踏んでいる。細胞の増殖が自己で調整出来るのだ、少なくとも老化での死亡はそう心配しなくていいだろう。

人間としての精神は流石にこんな秘境での生活に疲弊し始めているが、芽生えた化け物としての自己は嬉々としているのも事実。
何年でも、何十年でも時間を掛けるつもりであった。黙って淡々と作業をこなすのは慣れている。不満を押しつぶし、唯の歯車のように精神を律する術を知っている。
それらは実際に紛争地域でじっと黙って待機している時に、嫌と言う程に磨かれた。
彼の最大の武器とは、自我無き不定形生物（スライム）でありながら、異界の知識と確固たる“己”を持っていることだ。
残念ながら技術に関してはそう役に立たないと言わざるをえない。肉体が人型であれば少しは違ったのかもしれないが……
知識に不定形としての武器、それを利用して今は牙を研ぎ続けれ

ばいい。この世界を見て回るのも、最低限度以上の力は欲しい。
そう取るべき行動の大雑把な指標を思考していると、ふと珍しくこの大樹海。今己が居る深部の一部が騒々しい事に気付く。

行ってみるか悩むが、結局好奇心負けて行くことにする。この樹海では目立つ行いは即ち死に直結だ。
少なくともここ一週間程で彼はそれを学んだ。それがこんなに騒がしいのだ、明らかな異常である。
静かに生命の歯車が回るこの大樹海で、何か異常が起きたに違いない。
そう判断し、他の生物に見つからないよう、即座に肉体をヘビの形に形成し、更に色も保護色へと変化。
そのまま騒ぎの中心地だと思われる方向へと向かって行く。

全身けむくじゃらの二メートルはある人型の巨人。根を足のように動かし移動する木々。
自ら移動し、対象を捕食するアクティブな巨大食虫植物。トンボに近いが、身を守る甲殻を持ち、体長も三メートルはあろうかという昆虫。
フォレストドッグの群れ。その上位置換とも呼べそうな、体長二メートル級の単独行動型のオオカミのようなイヌ科生物。
様々な生き物が彼と同じ目的地を目指して続々集っていた。そんな中、十分程してまるで人垣のように、化け物達が円を作っている場所に到達する。
常ならば即座に殺し殺されの大乱闘に発展しそうな場面だが、どの生物もその兆候は無い。
衝動は感じている筈だ。まるでそれを上回る“何か”が中心にあるように、何か一種異様な雰囲気が立ち込めている。

円を組む生物達の居る場所。何故かそこには木々がなく、数十メートル規模の円形の空き地となり、空からは燦々と光が降り注いでいた。

後方からでは何があるのか見えないと。その流動体たる肉体を活かし、するすると群れを潜り抜けて行く。こんな時は素直にこの肉体の有用性に感謝したくもなる。

途中巨大な足のようなものに核を踏み潰されそうになり、一瞬ひやりとするもののなんとか最前列まで移動することに成功する。

出来るだけ周りに存在を気取られないように気をつけつつ、ゆっくりと騒ぎの元を探っていく。

一体何があるというのか。これだけ多く、ざっと見渡しただけでも百を超える生き物の関心を集める何が……

はやる核の鼓動を押さえつけ、端から探っていき、本命の中心を視界に映して何があるのか見据える。そして彼にも何がそこに“居る”のか理解した。

それは間違えようも無い――――

（……幼児だって？）

それは小さな、まだ数歳にもならない“人”の幼子（おさなご）であった。

思わず彼の思考が停止（フリーズ）してしまう。視界に見えるのは間違いなく“人”の子だ。

恐らく女の子だろう。年の頃は詳しくは不明だが、子を育ててき

た経験から考えると三歳になるかならないかだろうか。
樹齢幾千年、あるいはそれ以上の時を刻んだ巨木が並ぶ深い深い霧立ち込める魔境。原初の法則が全てを決定する、まさに食物連鎖の渦巻く坩堝の中。
その幼子は木々の切れ目たる広場で、柔らかな草に包まれ、暖かな光を受けて安らかに眠っていた。
誰が捨てたのか。あるいは生んだのか、そもそもこの樹海に人型の生物でここまで人の子そのもののタイプは存在しただろうかなど、グルグルと目まぐるしく思考が駆け巡る中、ドクンッと核が高鳴る。
一目みた瞬間“心奪われた”。それは一目惚れにも近い圧倒的な衝動。

――――欲しい……

そう無意識に考えてしまっている自身に気づき愕然としてしまう。
なぜこれ程の生物が集ったのか、彼は自然と身をもって体験し、理解してしまった。
目の前の幼子を“殺める”ことが出来れば、己が血肉とする事が出来れば、恐らくは今とは比べるまでもない遥か高みへと至る事が出来る。
それは理屈などが入り込む余地のない、圧倒的なまでの“本能”による叫びだった。極上の“餌”を目の前にし、化け物たる本能が激しい音なき声を叫び散らす。
目の前の幼子を捕食し、その血肉とせよと、煩いくらいに吼え猛る。今ならそれが出来ると、幼子であるうちならば、今の非力な彼でも容易くその存在を亡き者とすることが可能だと本能が囁く。

つまり、この場に居る生き物全て。“目の前の幼子”が欲しいのである。育てたい、愛でたいと言う意味ではなく、食料的な意味で

だが。

本能で生きるような者ばかりとは言え、それでも先に手を出せば周囲が黙ってはいないと、そう直感的に理解した結果、今の膠着状態となったのだろう。

激しい衝動に見舞われる中、それでもそこまでの“結論”を導き出し、彼は不意に衝動を“捻じ伏せた”。

屈強な、精強なる鋼の精神を持って己が本能を押しつぶす。そうせねばならない理由があった。

目の前の幼子は極上の餌であると同時に、幼児なのである。生まれてきた子は無条件で祝福されて然るべき。

ましてやこの世界には人は居ないのではないかと、そう思っていた矢先のことだ。もしかしたら違うのかもしれないが、少なくとも容姿は人そのものである。

彼が始めて“この世界で出会った人の子”なのだ。それを食らって血肉とするほど、彼は人としての心を捨てていないつもりである。

強者へと至るにはそれはもしかしたら大幅なショートカットなのかもしれない。この肉体の本能の囁きが事実であれば、それこそこの樹海でも最上位に瞬く間に躍り出るだろう。

しかし、何もそれだけが方法ではないのも事実。もとより時間などいくら掛かっても構わない心積もりであったのだ。

結論を出す。それは酷く無謀な行いだと知りながら、彼は幼子を助ける事に決めた。本能だけで生きる獣とは違い、確たる自我と知能を有している者だからこその答えだ。

一度決まれば次に考えるべきは、“どうすれば助けられる”かである。

周囲は大小様々な、それこそファンタジー世界に出る魔物のような生き物で壁が出来ている。これを一人で突破するのは不可能だ。少なくとも今の彼にそんな力はない。

無謀と勇気は別物と言うが、彼自身何も策がないと言う訳でもなかった。尤も、それを策と呼んでいいのかは疑問に残るところなのだが。

（力が無いのなら、周囲を最大限利用すればいい）

幸い場に居る生き物の知能は獣レベル。今は衝動と、先に動けばただではすまないと言う、本能的な警鐘で膠着しているだけだ。

それなら、あえて“場を乱して”しまえばいい。一度起こした波紋は瞬く間に広がり、即座に場は血で血を洗う大紛争地帯へと変貌を遂げるだろう。

ではどうやって最初の一石を投じるのか。それは考えるまでもなく簡単なことであった。過酷な環境下でも生き延びる為の思考、技術。それらは生前に“教官”から叩き込まれている。

教官の家族に対する思いは強く、教え子が死ぬ事を良しとしなかった。ゆえに最初に教えられたのは生き延びる為に必要なこと“全て”だ。

ないなら利用しろ。汚泥を啜ってでも生にしがみ付け。あるものを最大限活用し生き延びろ。それは何も自分の持ち物に限らない。

そしてこの場合利用すべきは――――

（こうすればいい！）

かなりの体力を消耗する為滅多に使わない移動方法。自身を水のように地面に溶かし、そのまま地中を移動していく。

ついでに保護色を纏い、更に匂いを偽装。完了した瞬間、幼児の

足元から染み出すように地面から姿を現す。
そのまま幼児を肉体に重ね、弾力性を強化しバネのように身を押し込める。そのままるで押し出すように一度上に放り投げ、落ちてきた所でやわらかく包み、しかし脅威的な弾力性でより遠くに弾き飛ばす。
出来るだけ魔物のような凶悪な生物達が少ない方向に、だ。一瞬でざわめきが広がり、我先にと化け物どもが幼児に群がっていく。
だが隙間の無いくらい集まっていたのに、急に動けるはずも無く、まるでドミノ倒しのように無様に地面に転がっていく。
怪我したものから血が溢れ、その匂いがギリギリの状態だった場を遂に瓦解させた。
幼児は確かに極上の獲物だが、この場に居る生物にとっては、周囲の生き物もまた全て“餌“なのだ。

血の匂いを皮切りに、一瞬で場は混沌（カオス）が司る混迷とした殺戮場へと変貌を遂げた。強力を誇る腕で周囲を薙ぎ倒す者、猛毒の液を撒き散らし死を振りまく食虫植物。
頑強な顎で肉を食い破る昆虫。鋭い牙で首元に食らい付くイヌ科の生物。幼児で極限に増殖された衝動により、苛烈な殺し合いがその場を満たす。
一体倒れれば、その血でまた他が興奮し場は加熱する。まるで蠱毒の壺のようだと彼は思わず思う。餌の入った空間でそれを得る為殺しあう。
だが、それを出し抜くのは無論――――
血風渦巻く混沌の坩堝の中、幼児を投げた瞬間、彼は脇目も振らずに再び地中に潜り、見事幼児の真下から這い出る事に成功する。
そのままゲルの弾力性を成長した能力により強化、クッションのように落ちてきた幼児を包み込み、そのまま“取り込んだ”。

既に酸素がアルカリなどを生み出すのではないと判明している、理由は不明だがアルゴンが必要なのである。

大気を取り込むのではなく、酸素と窒素を生成し、幼児を泡で包むように保護する。

その際、酸素を濃くし過ぎないように泡の面積に合わせて濃度を二対八くらいに調整しておく。

そのまま即座にその場から脱出していく。幼児ごと擬態に包まれているが、それでも見つからないとは限らない。早急な場の脱出が必要であった。

幸い幼児くらいの大きさなら蛇を模しても形は崩れない。肉体を変形させ、そのまま地面をするすると滑るように移動していく。

幼児を一時的にとは言え身に取り込んだせいか、先程より強い衝動が身を苛む。

しかも場は彼にとって見れば格上ばかりが居る戦場である。どの獲物からも大なり小なり衝動を感じてしまう。

それは欲深き者の目の前で、巨万の富が転がっていながら何一つ拾わずに立ち去るに等しい。あるいは幾日も食を奪われた後、大量に豪勢な食事がばらまかれるのと同じだろうか。

彼が生前“精神面”における訓練を積んでいなければ、もしかしたら我を忘れて自身も闘争渦巻く坩堝に飛び込んだかもしれない。

（集中しろ。雑念は追い払え。最大限の警戒を広げ、同時に“前”だけを見ろ。今必要なのは場を脱出することのみ、その他は何一つ必要ではない）

暗示のように己に言い聞かせつつ、彼はひたすらにその場から離れ続けた……

彼が幼児を身に取り込み移動し始めてから丸一日。既に十数キロもの距離を移動している。

血の匂いも濃い緑によりここまでは届かない。エネルギーを大きく消耗する地中移動。

それに長距離の移動に極度の精神集中、流石にこれ以上の移動は厳しいと彼が立ち止まる。

まだ深い樹海の中だが、それでも暫くは休憩も出来るだろうと、幼児を身に取り込みながら休憩を取り始める。

それでも周囲の警戒を怠らない。僅かな油断が死に直結することを知っているのだ。それは教官からも何度も言われた事だ。

それから一時間後、無事に追撃もなくしかし、失ったエネルギーの補給すらせずその場より移動を開始。

ここらはまだ彼を容易に上回る種族が出現する領域だ、油断は出来ない。必要なのは逸早い安全圏への離脱であり、それに必要であれば身を削るのも構わなかった。

失っていくエネルギー、磨耗する精神。磨り減った精神は幼児を食らえと引っ切り無しに彼を誘う。

それらを捻じ伏せ、ただひたすらに樹海の外へと移動していく。一度助けると決めた。ならばそれを全力で遂行する機械であれと自身に言い聞かせる。

そうして更に一日、ようやく彼は樹海の中部の比較的外側まで移動することが出来た。

この辺りであれば、彼の実力でも十分以上に渡り合っていけるだろう。酸素を生成するのもエネルギーを消耗する。

これ以上は流石に獲物を仕留めて補給しなければ“身が崩壊”する事になると、本能的に察知し、幼児を一時外に出す。

ドロリと粘液質なゲルから地面に転がされる。その肌は雪花石膏（アラバスター）の如き白さを誇り、幼児特有の肌は木目細かい。

頭髪は首元まで伸びており、その色は見事な“白”であった。瞳の色は窺い知れないが、幼いながらも将来が楽しみな顔の造形を眺めつつ彼は悩む。

（さて、助け出したはいいが、これからどうするべきか……）

彼には現状性別は無い。それは同時に幼児に必要な母乳を用意できない事も意味する。

もしかしたらそんなもの必要ない可能性もあるが、それ以外に咄嗟では思いつかない。

助け出したはいいが、育てるにも何をしようにも、幼児に“何を食べさせれば”いいのか、彼は途方に暮れる事となった。

第三話（加筆版）（後書き）

後書き

恐らく誤字脱字あります、よろしければ報告してくださると助かります。
拍手コメなどで報告してくださっても構いません。
また、拍手返事は明日になりそうです。
拍手のコメ末尾に返信不要などと入れてくだされば、返信は致しません。名が無いのも同じくです。

第四話（加筆版）

『ほら、飯だ。腹が空いただろう？』

そう言って先程仕留めた人型の生物を地面に転がす。見た目は彼の世界でよく出てきた亜人、“ゴブリン”に近いだろうか。

肌の色も緑で、同色の体毛に覆われている。顔も鉤鼻で、顔にはイボが多くあり、ギョロリとした大きな瞳は濁った黒色だ。

樹海に住む種族の中では比較的知能は高いが、それでも彼の世界で言うところのチンパンジー程度である。

小説なんかで出てきたゴブリンとは違い、衣服を身に着けている訳でもないし、ましては言葉などを口にすることもない。

精々が折れた木々などを振り回したり、群れで狩をする程度だろうか。この世界に言語を操る種族が居るのか、最近では少し心配になっている。

「……（こくこく）」

樹海で助けた幼子が嬉しそうに首を縦に振る。言葉を口にする事は出来ないようだが、こちらの言葉（テレパシー）の内容は理解出来るらしい。

そう、先程口にしたのは言葉ではなく、思念みたいなものである。この世界に言葉があるのかは彼には分からないが、この世界の生き物の多くは思念を相手に伝える事が出来る。

彼が今身を窶しているスライムも元からなのか、成長の結果なのかはさておき、その能力を有していた。

知能が低いと漠然とした思い、それも本能に根ざしたものくらいしか伝えられないし、伝わらないが、人並みの知能があれば言葉の

壁を越えて意思疎通が可能だ。
それを完璧ではないとは言え理解できるこの娘の知能は、恐らく人に比肩するレベルだろう。

『ああほら、穴を空けてやるから待っていろ。まだ“牙”は小さいんだ、折れてしまう』

ゴブリンの首筋にしがみ付き、懸命に“伸びている犬歯”を突き立てようとしているのを見て、慌てて触腕で引き寄せ、そのまま別の触腕の先端を針のように尖らせゴブリンの首筋に穿つ。
そのまま拘束を解いてやればちょっとぎこちない歩きで首元に向かい、そのままかぷりと吸い付く。
ちゅぱちゅぱと血を啜る幼児の背中には、デフォルメされたように小さな“翼”。
それも鳥のような翼ではなく、蝙蝠に何かと近いタイプのものだ、色も黒に近い赤茶で手触りはビロードのように滑らかだ。
犬の尻尾のようにぱたぱたと揺れるそれは、どうやら感情を表しているらしいと、幼児を助けてから今日までの一週間で彼は学んでいる。
そう、助けた幼児、彼女は人ではない。彼の推測、いや、希望的想像が正しいのならその正体は恐らく“吸血鬼（ヴァンパイア）”だ。

血を吸う鬼。その名の通り、生ける屍と言われる永劫の夜を渡る存在者。有名どころで言えば、それこそヴラド＝ツェペシュであるワラキア公やカーミラ、ストリゴイなどなど……
アベルとカインの冒険において、カインの末裔であると言われる祝福を受けし者達。創作でも数多く題材に取り上げられ、相当な知

名度を誇る存在である。
諸説様々であるが、その身は齢を刻むことにより更なる力を増し、多くの血液を力に昇華すると言う。
再生能力が高く、並大抵の傷は瞬く間に修復してしまうし、その身を蝙蝠などに変化させる事も出来る。
超能力にも似た力を扱い、血を媒介とした“魔術”を使用でき、またそのカリスマ性は非常に高い云々……
数ある伝承の生き物、あるいは魔物や魔族の中でも非常に強力なその種の特徴と助けた幼子は一致していた。
吸血鬼と言う種族に一種の憧れを抱く彼からすれば、この世界にそれらしい者達が居るかもしれないと分かっただけでも僥倖である。

彼女を助けた後、その身をどうすればいいかと悩み、取り敢えず自身のエネルギー補給の為にフォレストドッグを一体仕留めた時、丁度幼子が目を覚ます。
するとどう言う訳か、流れ出るフォレストドッグの真っ赤な鮮血を凝視するではないか。
その瞳は血のような赤であり、じわじわと白を侵食し眼球全てを赤に染めていく。
もしやと思わず好奇心にフォレストドッグをそっと差し出せば、傷口をぺろぺろと舐め始め、暫くすると満足したのか眠りについてしまった。
最初は驚きまさか好血症（ヴァンパイアフィリア）――血を好む病気――かと思ったのだが、それから数分すると更に不思議な事に背中から一対の翼が生え、彼女が人ならざる者であると知る。
ある意味で人外となってからは目標の一つである姿、それを図らずとも目にした彼の心境はなんとも複雑であった。

『もういいのか？』
「……（こくり）」

彼女が頷くのと同時、仮称ネームゴブリンを触腕で引き寄せ身で包み込む。
流石に溶かすのを見せるの精神的にありえないだろうと思い、肉体の色を黒に変えて誤魔化している。
血液が主な主食だと助け出して一日と経たずに分かり、おけげでこうしてこんな場所に来てまで“子育て”をすることとなったのだ。
元より助け出したからには、その身を預かる覚悟はしていたが、こうして満腹になり眠そうに目を擦る彼女を宥めつつ寝かしつけていると、どうも奇妙な感慨に陥ってしまう。
確かに彼は子育ての経験はある。なんせ孫も居たくらいなのだから、子育てそのものは問題はない。

が、それでも恐らく異世界に違いない世界で何の因果かまたもや子育てをする羽目になるとは、一体どんな天の采配なのか。
それが己が選んだ選択肢であるとはいえ、そう思わず彼が思ってしまうのも無理からぬことだろう。
それでも見捨てるつもりはない。一度決めたからにはそう、“家族”として認識したからには最大限の手を差し伸べるつもりである。
かつて教官から学び、子にもそれを伝えて来たように。家族に対して彼がすべき事は単純でありとても重要なことだ。

（眠ったか）

樹海のほんの入り口辺りの浅い場所、その一本の巨木の根に出来

た丁度小さな子供がギリギリ通れるくらいの入り口の奥にある、ちょっとしたスペースが現在の棲家であった。

すうすうと可愛らしい寝息をたて眠ってしまった幼児をその中に運び、敷き詰めた一メートル程もある大きな葉に横たわらせる。

下には枯れた葉を敷いてあり、空気の層が寒さを和らげてくれるだろう。今の季節は不明だが、彼の感覚は初夏くらいだろうと告げている。

気温にすれば三十度近い温度が続く中、この中は涼しく過ごし易い。と言っても、極端な温度差でもなければ、彼には関係ないのだが、幼児にとっては別だ。

人ではないとは言え、正しい対応が分からない以上は、人の子をベースにして考える必要があるだろう。

まだ幼いのもあるだろうが、彼女はよく睡眠を取る。それこそ一日に十五時間は眠っているだろうか。

彼と戯れている時でも、まるで電池が切れたかのように突如として眠りに入るなんてことも何度となくあった。

よく寝る子は育つと言うが、いささか眠り過ぎである。と言っても人ではないのだから、それが普通なのかもしれないし、そうではないのかもしれない。

彼には判断することはできず、それが何かよくない兆候でないことを祈るばかりである。それ以外では非常に賢く、しっかりとこの場で彼の帰り待っていたりと殆ど手が掛からない。

トイレも端に掘られた穴でしっかりと一人で出来るし、彼の言いたい事をぼんやりとだが察することもできる。

逆に怖いくらいだが、余裕が多い訳ではない彼には助かっているのも事実だ。この幼子を助けた事で強者へと至る道はまた遠回りとなってしまったのかもしれない。

それでも胸に今も煌々と燃え盛る熱い信念は健在だ。急ぐ必要も

ない。今の彼には本能的に寿命と言う楔が殆ど存在しないと理解しているのだから。

幼子が眠りに付いた後、何時もなら“狩”に出かけるのだが、今日は違う。彼女の名前を考えようと思っていた。

何時までも心の中で“幼子”などと呼称していては不憫だし不便だ。それに際して自分の名前を考えるつもりである。

生前と思われる人であった時の名は人であった自分の名だ、生まれ変わったのなら、別の名を名乗るのもいいだろうと考えていた。

名とはそのモノを指す記号であり、名が無いモノはその存在をあやふやと化してしまう。

幼子ですら、便宜上“幼子”と、名を仮とは言え与えられているのだ。物事を識別する上で、“言葉”と“名”は非常に大きな意味を持つ。

言葉を持つ者の世界と、それを持たない者の世界は全く別である。言うなれば、人と動物は異なる世界に身を置いているさえ言い換える事が出来るだろう。

それらは極論ではあるが、とにかく名は重要だと言うことだ。彼はさて、どんなものが良いだろうかと思案に暮れる。

（そうだ、な……ふむ）

念のために入り口を大きな枝で覆い隠しながら、先ずは自らの名を考える。幾つもの日本名が出てくるが、どうもファンタジーのような世界でそれは似合わない気もする。

と言っても外国人の名前はそう詳しくない。確かにアメリカにて暫く在住していたが、付き合いは専ら教官とその知り合いばかりで

あった。
ああでもない、こうでもないと色々悩みつつ気持ち良さそうにすやすやと眠る幼子を眺めていると、ふと器用に畳まれた翼に目がいく。
そこで閃く。彼は吸血鬼が好きだ。恐らくファンタジーで出てくる生き物や種族で一番何が好きですか、そう聞かれれば間違いなくヴァンパイアと答えるだろう。
この世界にはどうやら類似した存在はいる。それは彼女が証明している。
ならば――――
（よし、今日から私は“ヴラド＝ツェペシュ”を名乗ろう。どうせなら、身も吸血鬼へと至れるのであれば完璧だが、それは高望みに過ぎるだろうが。せめて名くらいは共にありたい）
同時に彼女の苗字もヴラドに決定である。既に家族であるのだから、その姓を共有するのは至極当然の事だ。
本来ならヴラドは姓ではないのだが、彼はヴラドを姓だと誤って覚えてしまっていた。
ツェペシュに関してはあえて串刺し公の名を彼は己が名とすることに決めている。この世界にその意味を知る者は居ないゆえの暴挙だ。
が、困ったことに下の名前をどうするかで悩んでしまう。明らかに西欧風の容姿の幼子は、それに則した名が良いだろうと考えるも、先程も述べた通り外国の名に詳しくはない。
ああでもない、こうでもないと蠢く姿は、いささか以上に情操教育上でよろしくないのだが、彼としてはとても真面目である。
結局名が決まったのはそれから何時間も後、彼女の目が覚めた後

であった……

――――エルジェーベトがヴラドと家族となってから数年の月日が経った。成長の過程は人と同じなのか、年々エルは愛らしく育っていく。

詳しい年齢は残念ながら助けた当初からある程度の年齢であったため、判然とはしないが、大体十になるかならないか辺りだろうとヴラドは思っている。

雪のように真っ白な髪は毛先付近で緩やかなウェーブが掛かり、今では腰まで伸びていた。その手触りも絹に劣らぬものであり、感覚の鈍いスライムの身でなければ、ヴラドも一日中撫でていたことだろう。

瞳は最高級のルビー、ピジョンブラッドの如き輝きを放ち、まるで魔性のような妖しい魅力を誇っている。

唇は薄っすら赤みの比率の強い桜色で、水気が豊富なのか常にぷるっとしていて妙に蠱惑的だ。

まだまだ未発達の身体だが、それでも少しずつ女性らしい柔らかさを備えはじめており、いずれ目を見張るような美しさに育つに違いない。

そんなエルを眺めるのがヴラドは好きで、気づけば少しずつ狩に出る機会も減っていた。最近では別に絶対強者への夢なんてどうでもいいのでは？　などと思ってしまうくらいである。

彼がなれなくても、このままならエルジェーベトがそれを叶えてくれるだろう。

幸い彼女もヴラドを非常に慕ってくれている。常日頃から、将来はパパの役に立つの！　なんて口にするくらいだ。

いけないけないと思いつつ、そんな意地らしくも愛らしいエルジェーベトを見ているとどうも丸くなってしまう。

狩に出るよりエルジェーベトと一日をのんびり過ごす方が大切だと、心底思ってしまっている辺りヴラドはもう末期であった。

「パパッ！　お帰りなさい」

『ああ、ただいまエル』

外で狩に出ていたヴラドが、数年前に樹海の入り口あたりで立てた“小屋”のドアを触腕で開くと、まるで体当たりでもするような勢いでエルが抱きついてきた。

幸い予想していた事もあり、既にゲル状の肉体は弾力性を強化され、抱きついてきたエルを優しく沈む事無く迎え入れる。

「えへへへ」なんて口にしながらにこやかな笑みを浮かべ、恐らくはウォーターベットのような触り心地だろうヴラドの肉体にしがみ付く。

流石にこのままでは中に入れないと、触腕でそっと引き剥がすと、エルの頬がぷくっと膨れる。

どうやらもっと抱きついていたかったらしい。この年頃なら、もう少し父離れというか、反抗してみせてもいいのだが、エルにその兆候は一向に現れない。

『エル、食事は済ませたのか？』

「うん。えっと……今日はオークを殺しておなかいっぱい血をもら

ったよパパ！！」

見れば確かにその口元には僅かながら血が乾いた後が見られる。
褒めて褒めて！　と言う感じで頭を突き出してくるエル。彼女にとっては獲物は所詮餌でしかないのだ。
しかもエルの潜在能力はヴラドとは比較にならないほど高く、年々その実力は真に化け物じみていくばかりである。
取り込んで溶かし、糧とするヴラドが言える事ではないが、小さな身で血生臭い行いを平気で実行出来るその心が少しヴラドには辛かった。
だがそれが吸血鬼だ。人と同じ枠で考えてはいけない。それはヴラド自身が人ならざる身となって、いやと言う程体験してきたことでもある。
口も顔も無いが、それでも内心で苦笑し、そっと触腕でシャンプーもリンスも、ましてトリートメントもない世界で驚くほど艶々とし、触り心地のよい髪を撫でてやる。

クリッとした幼いころ特有の大きな瞳が細まり、気持ち良さそうな顔を見せる。
甘やかすばかりではないつもりだが、それでも彼からすればエルは唯一の意思疎通が可能な家族だ。
大事にしたいと思っている。それこそ自身の命を天秤に乗せてもいいくらいに。
動く気配のないエルを増やした触腕で持ち上げ、そのままさほど広くは無い、リビングと寝室があるだけの小屋の寝室へと向かう。
もう既に外は満天の星が輝き、空は闇のヴェールに包まれている。
人の頃の習性の為か、眠るのならやはり夜がいい。
スライムの身とは言え、休息そのものは必要であるのだ。

長年一緒に居たためか、それはエルも同じであり、今ではすっかり昼型の生活をおくっている。

『もう今日は寝るといい。私がベッドまで連れて行こう』

「……（こくり）」

撫でられる間にどうやら眠くなってしまったらしい。既に触腕で姫抱きのように抱えられているエルの頭はこくり、こくりと不安定に揺れている。

出来るだけ振動が伝わらないよう、滑るように移動していく。小さなお姫様を起こしてしまわないようにとの配慮だ。

扉はないが、細い植物繊維の簾（すだれ）で仕切られた寝室へと入り、一つだけ設置されたベットにエルを横たえる。

ベッドにスプリングはないが、代わりに弾力性に富んだ植物の繊維が敷き詰められ、掛け布団は樹海の生物の毛皮だ。

エルの着ている衣服も繊維から作られた、かなりお粗末なワンピースらしき衣服だが、彼にはそれを用意するだけで精一杯であった。

様々な技術を叩き込まれ、あるいは自ら身に付けもしたが、流石に材料のない状態からは何をやるにも厳しい。

それに着飾る必要もない場所だと言うのも理由だろうか。この樹海で言葉を操る存在は、今のところヴラドとエルだけなのだ。

まるでアダムとイブのようだと思ったのは何時の頃だったかとヴラドは思案する。

『眠った、か……』

念のために軽くまぶたに掛かった髪を細い触腕で払ってやるが、ぴくりとも反応しない。

年非相応に聡明な娘ではあるが、同時に年相応に元気がよく、そして電池が切れるように眠ってしまう。

一度寝れば深い眠りなのだろう、中々目覚めることは無い。それはもしかしたらこの世界で生きるうえではマイナスかもしれない。

逆に言えば、それだけヴラドがエルに信頼されている証とも言えるだろう。だが、その期待に応えられないのがヴラドには申し訳なかった。

水気を多く含んだ艶やかな桜色の唇が半開きとなり、そこからすやすやと呼吸音が漏れ出している。

見詰めれば見詰める程高鳴るヴラドの核。もう駄目だった。限界であった、耐えに耐えてきたモノが、まるでダムの罅割れを抉じ開けるように、凶悪なアギトを突き立て、ガリガリと理性と言う名の最初で最後の砦を食い荒らしていく。

よく持った方だとヴラドは思う。心はささくれ立つこともなく、静かに崩壊の音だけを響かせている。

依存していたのはエルなのか、それもともヴラドなのか。小さな天使は孤独からヴラドを守ってくれた。

徐々に狩に出ることもなくなった時から、何れこの日が来るとどこかで直感しながら、それでも離れる事は考えられなかった。

いくら生前に訓練を積んだとは言え、一度触れたぬくもりを手放すのは無理だ。出会った瞬間に、ヴラドは一人であることを捨てたのである。

崩壊の鐘が心の中で響く。この数年で肥え太ったヴラドであって、ヴラドではない自身がその心を内部から食い荒らしている。

霞む思考。それでも最後までぎこちないながらもエルの頬を撫でるのは止めはしない。

（すまない……）

その言葉を最後に、プツリとヴラドの意識は途絶えた――――

「あ〝……あ〝あ〝ぁあぁあッ！？」

絶叫が迸った。子供特有の甲高く、それでいて痛々しい程に痛苦に染まった叫び。それでもその瞳は一欠けらの希望に縋るように目の前の人物を映している。

それが可笑しくて可笑しくて、内心で滾る狂おしい程の感情を爆発させるように肉体を揺らせば、その小さな身から再び絶叫が漏れ出す。

その真っ白な肌には何本もの硬質化した触手が突き立っていた。手、腕、胸、腹、腿、足。まるで幾本もの槍と化した触手に肉体を刺し貫かれ、感じたことの無いレベルの痛みで目を覚まし、吐いて出た言葉は直ぐに口腔より漏れ出た赤黒い鮮血で掻き消える。

ずっと、ずっと一緒だった。エルにとっては一番身近で暖かい人。

それがどうして自分にこんなことをしているのか、痛みでぐちゃぐちゃになった、まるでショートしたような思考でそれでも懸命に考える。

が、考える時間をヴラドは与えてはくれなかった。血溜まりをベッドに残し、そのままずるずるとヴラドの肉体に一瞬で引き寄せられ、そのままとぷんっと全身を呑み込まれてしまう。

息が出来ず、もがこうとするが、内部でも硬質化した一部が腕や足を拘束していて足掻く事もできない。

それ以前に血を失いすぎており、既に満足な力も出ず、まともな思考も出来なかった。過去に培った思い出が、ヴラドを敵と認識することを許してくれない。

ヴラドは話したことはないが、それでもエルは幼い頃に命を救ってくれたのがヴラドであると、薄っすら霞む記憶の彼方で理解していた。

こんな事をする筈がないと。パパは何時でも優しくて、時に厳しいけれどもやっぱり優しい人なんだと、言葉ではなく思念を伝えようとした時。

ざわざわとゲルが蠢いた瞬間、先程とは比べようもない痛みが全身を駆け抜け、声にならない絶叫がその小さな口から絶え間なく迸る。

気泡が口から漏れ出し、内部にゲルが侵入し、更に苦痛が増していく。それは生きたまま溶かされる苦痛。

ジワジワと肌を溶かし、むき出しとなった神経を直接溶かしていく。拷問すら生温い痛みを与えてくるが、既にエルは余りの衝撃と痛みにその精神は崩壊しかけていた。

（きっとこれは夢で。めざめたら、パパがおはようって頭をなでてくれる。そうだよね、ぱぱ……）

暗闇に落ち行く意識の端。僅かに残った感覚で、ひたすらに笑い続けるヴラドの声を、エルは聞いた気がした――――

『ハッ！？　ゆ、夢、なのか――？』

酷い夢を見た。自身が長年耐えてきた衝動についに屈し、成長したエルを捕食してしまう夢。それはヴラドが夢を叶える事を諦めた先に待つ未来だとでも言うのか。

見ればエルはまだ小さな幼児だし、しっかりと眠っている。成長なんてしてはいない。

それにしては生々しい夢であったとヴラドは思う。彼女を刺し貫いた感触、届いた悲鳴が今でも鮮明に思い出せる。

そしてその身を捕食した時に感じたこの世のものとは思えない、至上の悦楽。気づけば自身が震えている事に気づく。

名前を考えている間に眠ってしまったのだろう。そう考えるも、震えは収まらない。見た夢は、下手すれば起こりかねない未来だからだ。

それから暫く、ヴラドの震えは治まることはなかった。

第四話（加筆版）（後書き）

後書き

この物語内では基本、姓は前に持ってきています。
また、ヴラド＝ツェペシュに関してもあえて話中の表現としています。
なにとぞご理解の程をお願い致します。

第五話（加筆版）

謎の、いや、ありえる未来の一つを夢見てから次の日。ヴラドは心の底に溜まるもやもやとした澱（おり）を吐き出す為にも、助けた幼児と外に来ていた。

巨木の中は薄暗く、どうしても思考はネガティブになりがちだ。樹海ではなく、樹海と繋がる形で、あるいは囲むように存在している大草原。

その樹海との境界線に今エルとヴラドは来ている。暖かな……いや、少し熱すぎる陽射しの中でヴラドは同じ言葉を繰り返していた。

『ヴラドだ。ヴラド＝ツェペシュ』
「う〝ぁお？」
『ヴ　ラ　ド』
「う〝ぁど」
『……そうだな。それじゃあ、パパなら言えるか』
「ぱーぱ？」

歳を考えれば言葉くらいそれなりに発音できそうなのだが、どうもその辺を学んではいないらしい。

そもそもからして樹海にどうやって来たのか、あるいは誰かが置いていったのかも不明だ。有している知識の出所も分からなかった。

見た目は三歳児くらいだが、もしかしたら違うのかもしれない。それこそ、見た目はこれでも生まれたばかりという可能性もあるのではないか。

なにせこの世界は既に地球ではないと確信しているほど、中々に奇抜な生物が跋扈している。

人型の生き物とは言え、赤子の姿で生まれるとは限らない。実はその年齢で突如あの場に現れました、そう言われても今のヴラドなら信じられるだろう。

そんな風にヴラドは“日本語”を教えながら考えていた。

『そうだ。パパだ。私のことだよ』

「んっ、ぱぱ！」

『ああ、パパだ』

「ぱーぱ！　ぱぱ？　ぱぱ！　ぱ、ぱ、ぱっぱ！」

言葉そのものはしっかり理解することが出来ている。知識面では逆に歳に似合わないものがあるのだから、やはり生まれたばかりというのは変だろうか。

そう思うものの、それにしてはどうもこの娘はあまりに邪気がない。子供は得てしてそうだが、それでもこの世界の仮にも一生態系に属する生物であるというのにだ。

まるで生まれたてのようだと思ってしまうのは、ヴラドの色眼鏡であるのだろうか。

ぱぱと、まだ発音は間延びしたりとぎこちないが、それでもその何が気に入ったのか「ぱぱ」と連呼する姿は愛らしく、ヴラドに表情があればきっとだらしなく緩みきっていたことだろう。

ヴラドが次の言葉を伝えようとすると、その気配を察知したのか、騒がしかったのが嘘のように、何か期待するような瞳でヴラドを黙って見詰めてくる。

空気を読めて聡い。しかも中々に知識欲に溢れているときた。彼の世界で英才教育を施せば、どれほどの高みへと至れただろうか――そんな埒のない事を考えつつ口を開く。

『エルジェーベト』
「えるじぇーえと？」
『駄目か。それじゃあ、エルなら言えるか？』
「える！」
『そうだ、エル。君の名前だ。エルジェーベトのエル』
「……え、る……える――――えるッ！！　ぱぱ！　える！　えるじゃーえと！　う〝ぁど！　える！」

ぶつぶつ何か呟いては俯いていたエルが、暫くすると幼子特有のぷっくりとした饅頭のような頬を目一杯笑みに変え、先程より更に嬉しそうに己の名前とヴラドの名前を繰り返し口にする。
その紅葉のような小さな手でヴラドを指し、そのな呼び、今度は自身を指して名を呼ぶ。この瞬間、エルの存在は“エルジェーベト”として確立されたのだ。
そんなはしゃぐエルの声に反応して何か危険生物がこないか、一応気を配っているが、その様子もない。
本当ならこの世界に言語があるのならば、そちらを教えたかったのだが、ヴラドは残念ながら英語に日本語、それにロシア語を少ししか学んでいなかった。
思念を明確な言葉化するのに戸惑ったが、慣れれば中々便利である。今も嬉しそうに声が枯れるまで名を叫ぶエルの姿を見れば、例えこの世界には存在しない言語だとしても、教えることはきっと間違いではないと、少なくともヴラドは心より思っていた……

その夜、ヴラドは奇妙な夢を見る。いや、それは夢と言う程のものではないのかもしれない。
例えるならば、周波数の微妙に噛み合わないラジオを延々と聴か

される夢とでも言おうか。それだけなら一種の悪夢とも呼べるのかもしれないが、実はこの夢、既に三度目であった。

しかも聴こえてくる内容はほんの少しずつだが鮮明となってきている。それでも精々が音程度にしか判別出来ないのだが、悪意のようなものは一切感じられなかった。

感覚として訴えに近いだろうか。あるいは何か語りかけようとしているのかもしれなしい、助けを求めているようにも思える。

この夢の間、ヴラドは夢を見ていると自覚は出来るが、音を聴く以外には何をする事も出来なかった。

自由のない明晰夢と言ったところかもしれない。やがて、それも終わりが来る。大体夢の中での感覚で一時間もしない内にその奇妙な夢は終わり、目覚めるか別の夢へとシフトしていく。

同じ夢は何か意味を持つとかよく言うが、この世界でなら本当にそれもあるかもしれないと、感じる覚醒の中でヴラドは心に留めて置く事にした……

『美味しいか？』

「（こくこく）」

ヴラドが樹海で仕留めて来た体長ニメートル程の単独行動を好む、ハスキー犬に近い容姿をした大型のイヌ科生物。

その首筋に吸い付き、流れ出る血をとろんっとした瞳で夢中に啜

っていたエルが、ヴラドの言葉に首だけを上下させる。
まだ上手く飲む事が出来ないため、見る見るうちに草色のワンピースは血に染まり、頬や髪の毛、それに口の周りがべったりと血糊で汚れていく。
何とも言えない濃い血臭が漂い始めた。それを嗅ぎながらふと、己もすっかりその臭いに慣れてしまっていると感じ、良い意味でも悪い意味でも順応していると内心で苦笑を零す。
生前、確かにそれなりに血を見る機会は多かったが、ここまで日常的でもなかったし、無感動でもなかった筈である。それが人間ではない、としてもだ。
血の臭いに誘われて小物が現れるが近寄っては来ない。エルに名を付けてから今日で既に一ヶ月、ヴラドだって安穏と過ごしてはいない。

名を決める時に見た不気味な夢を振り払うため、そして近くに居て長いこと“エル”への衝動を感じない為にも積極的に“捕食”を行っていた。
幸い当初より衝動に慣れてきたお陰で、一日中でもくっ付いていない限り今のところ耐えられる範囲である。
夢のように、成長を止めてはいずれ本当に衝動に屈しかねない。それだけは何としてでも阻止しなければならなかった。
ゲルの面積は一ヶ月前に比べても一回り程度の成長しかしていないが、強化された能力は中々に凶悪だ。
塩基も酸も強力な一撃と化し、あえて肉体の一部を切り飛ばし、高濃度のそれらを対象にぶちまける一撃は非常に恐ろしいと言えよう。
惜しむらくは、この世界の生物の多くが大なり小なり様々な耐性を有している事だが、一撃が強力となればそれすらも無いのと同然となるだろう。

硬質化に関しても短い時間であれば、肉体の五割以上を岩石並みに硬くすることが可能だ。
他にも内部で様々なものを生成したり可能だ。このままいけば、ゲル以外にも肉体を変化させる事が出来るかもしれない。

『もういいのか？』
「もう、おなかいっぱい。ごちそうさまでした」
『よし、それじゃあ身体を洗わなければいけないな。何時もの所に行こう』
「はい、ぱぱ！」

口の周りをべったり血で汚す姿はかなり猟奇的なのだが、声音もほがらかな笑みも、雰囲気もそんな言葉とは真逆であり下手すればその赤すら血に見えないほどだ。
と言うのは流石にヴラドの親としての欲目かもしれないが……
「はやく！　はやく、ぱぱ！」と先を急かすエルを横目に、“フォレストウォルフ”を触腕で絡め取り、そのまま肉体で包み込む。
自身の色を黒に変え、『浅い場所とはいえ、何が出るか分からない。私から離れてはいけないぞエル』などと親馬鹿な思念を伝えつつ、ヴラドとエルは樹海の奥、“小川”の流れる場所に向かっていく。
その小川も、草原の方にいくと一級河川並みの川へと繋がっており、そのまま遥か遠くの地まで流れは続いている。
住処の巨木から樹海の深部の方面へと進むこと二十分、ヴラドとエルの視界に横幅三メートル程度の、流れの緩やかな川が姿を現した。
本当なら沸かして何か風呂でも用意すればいいのだが、流石にそれは今のところ難しいと言わざるをえず、エルの汚れを落とす時は

こうしてこの川に来ていた。

『深い場所には注意するのだぞ』

「んっ、わかってる。でも、ぱぱがたすけてくれるんだよね？」

『あまり期待はしないでくれ』

確かにエルの事は全力で守るが、それでも敵わない相手が出れば絶対とは言い切れない。

「ほら、早く服を脱いで綺麗にしてくるといい。水浴びは嫌いではないだろう」

「はーい！」

威勢のよい返事と共に、ぽぽいっとワンピースを脱ぎ散らかし、オムツに近い柔らかな繊維で出来た下着も脱ぎ捨て川に走り寄っていくエル。

その姿は年相応の無邪気さに溢れ微笑ましい。エルは水浴びが好きだ。特に今は完全に夏も真っ盛りの時期であり、殊更に気持ちが良いことだろう。

ヴラドは程近い場所、一際大きな岩の上で周囲を警戒しつつエルの姿を眺める。乾いてこびり付いた血は流れ、その真っ白な肌が目に眩しい。

最近は真夏の中でも更に猛暑と言える日々が続き、その冷たい水が気持ち良いのか、エルの口からはきゃっきゃっきゃっきゃっと楽しそうな声が零れだしている。

暫くじゃばじゃばと水を手に掬ったり、水面をその小さな足で蹴っては遊んだ後、ようやく同じく植物繊維で出来たタオルで肌を擦る作業に移ったようであった。

あまり強くする必要はないと教えてあるが、どうもその白い肌が赤くなってないかと凝視してしまうのは、やはりヴラドに親馬鹿の気質があるせいだろうか。

ふと、人ならざる者となってから、生前より遥かに鋭敏となった気配察知の感覚に何か中型の生物がこちらに近づいてきていると引っかかる。

流石に大まかすぎて大きさも大体しか分からないがそれでも一メートル以上、五メートル以下。

距離もここから百メートルも離れていない。明確な意思でヴラド達。いや、エルに向かってきているのは間違いなかった。

口はないが、内心で溜息を零す。このようなことは初めてではない、だからこれからヴラドが取る行動もよくある内容に過ぎない。

楽しそうに水浴びをするエルに声を掛けるか迷う。相手はそう強力な種でもないよ思われるが、それでも時間を食う可能性はある。

ヴラドが居ないと知れば、聡い子ではあるが、それでもどんな行動を取るか完全には読めない。それなら一言声を掛けておくかと口を開いた。

『エル！　私は少しだけここを離れる、戻ってくるまでしっかり待っているんだぞ！』

「はーい、いってらっしゃいぱぱ！」

特に疑問に思った風もなく、エルは川原で片手を振り元気よくヴラドに返事を返す。それを耳にした後、岩からするりと滑るように落ち、そのまま移動を開始する。

ヴラドが上流の方に数十メートル進み、更に擬態で姿と匂いを誤

魔化し草木に紛れるのと同時。
ガサガサと音を立て、鬱蒼と生い茂る木々と草葉の合間からそれは姿を見せた。その全体的なフォルムを端的に表せば“蟻（アリ）”だろうか。
身体を下腹部含めてプロテクターのような厚い褐色の甲殻が覆い、それ以外の部分も硬質的な皮膚に守られている。
顎は通常の蟻と同じ形だが、大きさに伴いその威力は比べるまでもなく致命的だ。
前に見た時は、別の昆虫型生物の甲殻を一撃で破砕していた。ヴラドのぷにゅぷにゅゼリーな肉体では、豆腐を切るようにすっぱりと切断されてしまうだろう。
肉体を断ち切られる程度、怪我にすらならないが、そのまま核を切断されてしまえばその時点で終了である。それゆえにあまり楽観視も出来ない。
ヴラドは今も目の前を通ろうとしているこの種を“フォレストアント”と呼んでいるのだが、目の前の種はその中でも恐らくは“親衛隊”と呼ばれる固体だ。
通常のフォレストアントの大きさは二メートル未満。それが目の前の固体は優に三メートルを超えている。

ヴラドは知らないことだが、親衛隊は基本的に女王蟻の傍を離れない。親衛隊が離れると言うことは、女王に直接何か命令された場合のみである。
通常は働き蟻と呼ばれる一メートルから二メートルクラスの蟻が巣の外で活動するのだ。それらを知らないヴラドだが、なぜこの場に来たのかの理由は簡単に説明できた。
この蟻どもはなかなか感覚が鋭い。五感の話しではなく、女王に献上する“餌”を探し出す為に発達した器官により、獲物を探すのが他の生物より優れている。

その感覚がどこで知られたかは不明だが、エルと言う“極上”の餌を見つけ出してしまったのだろう。
女王蟻はどうか不明だが。雑魚蟻に知能はないし、親衛隊も知能は無いのだが、ヴラドは慎重に一撃の瞬間を待つ。
最大の強みは知能。慢心はしないが、相手は昆虫。ゆえに、この一撃を回避するのは――不可能。

（悪いが長引かせるつもりはない）

目の前を通り過ぎた瞬間、擬態のまま即座に背後より忍び寄り、そのまま甲殻の薄い腹部を硬質化した触手の一突きで貫通。
厚い甲殻部分はそれこそ鉄のような強度だが、腹部の下は別だ。精々が厚い皮程度でしかない。
叫びというより、空気の振動のようなものを発し、急に襲い掛かってきた闖入者をその強靭な顎で噛み砕くべく、腹部から血を滴らせ俊敏な動きで振り返る。
が、途端に襲った更なる苦痛に、あぎとを何度も開閉させ声にならない振動を迸る。
腹部に突き刺した一撃は切り離してあり、硬質化が溶けた瞬間、傷口から強力な酸で内部を直接焼いたのだ。
その致命的な隙を逃さず、ヴラドが一瞬でその脚から頭部に蛇の形で巻きつき、大量のアルゴンを大気から吸収し、強力な酸を生成しそのまま頭を焼きながら、容赦なく硬質化した細い触手を瞳に突き刺す。
再び周囲に響く声にならない絶叫を無視し、傷口から大量の酸を流し込み、直接瞳の奥から脳を焼き尽くす。
数秒ほどびくんびくんと痙攣した後、バタリと地面に倒れ伏しそれ以降動かなくなる。

この程度の相手ですら、今のような小細工を用いないと倒せないのだ。確かに汎用性の高い肉体だが、決め手に掛けるのは痛いところであろう。

死亡したのを確認し、流石に大き過ぎるので捕食せず放置することにする。エルの元へと戻りつつヴラドは思考する。即ち“女王に知らせているか”どうかだ。

蟻と言うのは巨大なコロニーを地下に形成する。フォレストアントはヴラドの世界の蟻からすると、かなりの小規模だが、それでも数にすれば数百から数千、あるいはそれ以上にも上るだろう。

一体、あるいは二体、三体程度なら問題もなく撃退出来るだろうが、数十にもなれば蹂躙されるのが目に見えている。

流石に樹海を離れるのは惜しいが、とりあえずこの辺りからはどちらにせよ移動する必要はあるかもしれない。

なんて考えつつ巨大な岩まで戻ってくると、何やら慌てふためいているエルの姿が目に映った。

『エル、どうした？』

ヴラドの言葉にビクッ！　と大袈裟に反応すると、こちらを振り向く。

が、驚いたのはヴラドの方であった。エルの瞳は相当涙を流したのか、白色の部分まで真っ赤になり、目蓋まで腫れてしまっている。

「ご、ごめん、なさい……ひっく…んっぐ、ふく……ひっく、かわになが され、ちゃっ、たよぉ……ぱぱぁ、ごめ、なさい……ひぅっ、ぐっ……」

ヴラドを見たことでまた再燃してしまったのか、その大きな瞳からぼろぼろと透明な雫を流すエル。

見ればエルは下着だけ付けた姿で、上は素っ裸である。作ってあげていた毛皮で出来た足を保護する靴の代わりも履かず、その小さく白い足には無数の切り傷が出来ていた。

この時程、人と違い表情がなくてよかったとヴラドは感謝したことはなかった。

内心で激しく困惑する。そもそも、衣服をあまり汚さないようにとは言っても、大事にしないといけないとまでは言っていない筈である。

流石にエルの反応は少々異常に過ぎた。慰めるにも理由を聞かなければと、ヴラドは思念を飛ばす。

『泣き止みなさい。エル、ほら、ゆっくり息を吸って、吐いて』

えっぐえっぐとしゃくり上げながらも、ヴラドの言葉に懸命に従う姿は意地らしい。

触腕で軽く背中を摩ってやると、暫くしてようやく落ち着きを取り戻す。

『それで、一体どうしてそんなに泣いている。私は衣服はあまり汚さないよう言っているが、別に無くしたからと言って怒るようなことはしない。私に怒られると思ったのか？』

子供が泣くと言えば、大体の部分はこれだろうと口にするが、エルは首を横に振る。どうやら違うらしい。

『ではどうしてだ？　パパに話してくれないか』

ゆっくりと、出来るだけ優しくそう言うと、こくりとエルが頷き涙を零ししゃくりあげながらも口を開く。

『……えっと、あれ、ね？　ぱぱがはじめてわたしにくれたふくなの。えるしってるよ、ぱぱがいっしょうけんめいなやんで、かんがえて、やっとつくってくれたものだって。それなのに……える、まちがって、かわ、におとし……ちゃって、ひっぐ……はじめて、もらっ…た、ふく……なのに――』

そう言うと再び泣き出してしまう。そして口にした台詞にヴラドは言葉に詰まってしまった。

こんな小さな子供が、たかだか衣服一枚。それもそこまで衣服についての知識なんて無い筈の子が、義理の父からはじめてもらったからと。

普通はそこまで気にしないような事でここまで悲しんでくれる。ヴラドの心が何やら温かなぬくもりに包まれていく。

何時もなら多少は感じる衝動も、今だけは全く気にもならない。子が親に向ける無心の信頼とは何時だって親にとっての最大の報酬なのだ。

気づけば抱きついてギュッと抱きしめそうになるが、今度は今ほど肉の腕が無いことを恨めしく思うことはなかった。

仕方なく、肉体の弾力性を強化し、そっと伸ばした触手でその小さな身体を抱きしめてやる。

衣服は確かに特殊な植物の茎を肉体で溶かし、幾通りもの試行錯誤の末、溶かす過程で布状にまで整え、最後は触手で細い枝で縫って作ったものだが、そんなものまた作ればいい。

その後、ヴラドはひたすらエルが完全に泣き止むまでその小さな背を撫で続けた……

第六話（加筆版）

『こんなところだろう』
「ぱぱ、これは？」

ヴラドが満足気に思念を零すと、エルが不思議そうな顔で訊ねてきた。
目の前には樹海の入り口付近で周囲の木々を伐採し、空いた地に丸太や削られた木材を使い組まれたロッジが建てられている。
嵌め込み式を使っているが、綺麗な切断が出来ない為、強い揺れが起きれば崩れる可能性は高い。方法は単純で鋭利化した触手で削れる分は削り、それで無理なら塩基を扱い溶かすように削っていく。
後は触手を嵌め込む型と同じ形にし、そのまま塩基を用いて穴を空けるだけだ。それなりに時間は食うが、何とか出来なくもない作業である。
一応建築に関しての知識と実践は生前叩き込まれたが、何も道具がない状況ではそれも満足に発揮出来なかったのだが、一応形にはなった。

『家だよ。私達は今日からこの中で暮らすんだ』
「ぱぱとえるのおうち？　いままでのところは？」

不思議そうな顔でエルが疑問を口にする。ヴラドはフォレストアントの件は話していない。
そもそも水浴びをする時にやってくる生物の始末一切、エルには話していなかった。
もしかしたら聡いエルのことだから、なにか感づいているかもし

れないが、とりあえずヴラドから話すつもりはない。
家族間での隠し毎は正直あまりヴラドにとって気持ちの良いものではないが、それでも必要であればそれを許容したりもする。

『エルも私も少しずつ大きくなってきたからな。今までの場所は狭かったろう？　それとも、エルは広い家は嫌か？』
「ううん。える、ひろいおうちもすきだよ」
『よし。それじゃあ、今日は家具の準備だな――』

そう言って「かぐ？」と家具が何か知らないらしく、またもや疑問を口にするエルに説明しながら、ヴラドは再び高レベルの塩基などを扱い木材を削っていく。
触腕を鉄並みの硬度、そして鋭さを持たせられれば大分楽なのだろうが、今のところそこまでの変化は出来なかった。
結局雑なベットにテーブルや椅子などを作るだけでその日は費やされこととなる……

『完成したな』
「ぱぱ、ぱぱ！　える、ここでねてもいい？」

家具作りも無事終わった頃には既に日は暮れ、太陽は草原の遥か彼方に見える地平線へと殆ど沈んでいた。
椅子、机、ベッド。どれも形はお世辞にも綺麗とは言えないが、それでも使用することは出来る。
エルもあまり役に立たなかったとは言運ぶのを手伝ったりした為か、その喜びようも一入と言った感じだ。

『ああ、元々それはエルの為に用意した寝台だ。私はこんな身体だからベットは必要ない』

そう言うとエルがちょっと残念そうに、それでも元気一杯といった感じでベットに横になる。

ベッドと言っても、木材を板状に整え、四方に足を組み込みそのまま壁際に置いた程度の代物なのだが。

それでも敷物は手触りのよいオオカミ型の生物から剥いで用意したものだし、板との間も弾力性に優れた植物の繊維を敷き詰めてある。

掛け布団も毛皮で出来ており、保温性はそう悪いものでもないし、肌触りもなかなかのものだ。

「えへへ……」なんて締まりのない表情で、毛皮に頬をすり付けその滑らかさを堪能するエル。

今までまともな寝具はなかったのだ、きっと本人にとってはヴラドが思っている以上の何かがあるのだろう。

ヴラドからすれば、この程度のことしか出来ないことが心苦しいのだが、嬉しそうに笑みを浮かべるエルを見ているとそんな気持ちも和らいでいく。

『今日はもう寝よう。エルはそのままそこで寝るといい』

「はいっぱぱ！」

何時もより威勢のよい返事と共に、臭いを消臭し、ヴラドの生成出来る液体によりある程度の滅菌を施された毛皮にエルがその身体を滑り込ませる。

「ぱぱ、あったかい……」

『そうか。暖かいか』
「うん……える、こんなにあたたかいところでねるの……はじ…め…て……すぅ…すぅ…」
まだまだ夜遅くまで起きるているにはエルは幼い。気づけば言葉の途中で寝入ってしまっていた。
ヴラドが触腕を伸ばし、ずれている毛皮をしっかりと首元まで引き上げてやる。
『さて、私も眠るとしよう――』
エルの寝ている部屋の隣、夢で見た小屋と同じく簾で仕切られたリビング。
その玄関の近くでヴラドは身を縮めるように固定する。流動体である為、意識しておかないと起きた時にあらぬ形や場所に移動している事があるのだ。
機能的に意識を落とし、眠りの状態へと持っていく訓練はそれなりに得意であった。僅か数分もせず、ヴラドの意識は夢へと旅立つ。
ふと、気付くと己が夢の中に居るのだと言う考えが唐突に心の中に浮かぶ。そして聴こえてくるノイズ交じりの音。
またこの夢か……と思いつつも、最終的にこの夢がどこへ向かっていくのか少し興味もあった。
聴こえてくる音は相変わらず強いノイズに紛れているが、今回は以前より少しだけその雑音が晴れている事もあり、肉声であろうことが判明する。
『ｌｘｐｗ．ｘｐ［ｑま，ｑｉｍｘさ．ｘｏ@ｗへｍｘｐｊｃｏ３さい』

女性なのか男性なのか。それは未だ判別出来ない。それでもどうや誰かが喋っているだろうことは分かる。
夢は願望であるとか、記憶整理であると言われるが、ヴラドにこのような摩訶不思議な願望などない。
記憶の整理と言う線における、継ぎ接ぎによる夢。と言う線は零でもないが、こう何度も見るとやはり意味があるようにも思えた。
結局その夢ではそれ以上の事は分からず、気付けば別の夢。エルとの穏やかな日常の夢へと変わっていた――――

「パパっ！　みてみて！　ほらっ、エルがたおしたんだよ！」

ロッジもどきを建築してから一年と数ヶ月。数ヶ月前から始まったエルの戦闘訓練も、今ではヴラドの同伴すら必要ないレベルに到達していた。
ロッジのドアを開け放ち、嬉々とした表情をし、“片手”で引き摺っていた獲物をきらきらとした満面の笑顔で差し出してくる。
人型の生物のゴブリンをもう少し大きくしたような姿。ヴラドが“ホブゴブリン”と呼んでいる種族だ。
エルに殴殺されたのだろう。肉体のあちらこちらには打撲や鬱血、頭部などに至っては陥没してしまっている。
引き千切られたらしい右腕の付け根から血が微量流れているのが見えた。引き摺る間に殆どの血液が流れ出してしまったに違いない。

『エル、嬉しいのは分かるが、ロッジを血で汚すのはいけないぞ。食事の為ではないのなら、捨ててくるんだ』
「でもパパ、これエル――」
『捨ててくるんだ』
「……はい」

ヴラドの冷たい言葉に見る見るうちにその笑顔が曇り、俯いたかと思うと沈んだ声音で返事を返し、とぼとぼと外にホブゴブリンを捨てに行く。
それを見届け密かにヴラドは溜息を零す。本当は『よくやった』と褒めてやりたいし、頭を撫でてやりたかった。
だが甘やかすだけではエルの為にはならない。生き物を殺すのはいい。この世界では力こそが絶対であり、少なくともこの樹海ではそれがルール、真理、法則なのだ。
外来者たるヴラドですらそれを理解し、是としている。それを否定し人の価値を押し付けるような真似は出来るならヴラドはしたくなと思っていた。
だが目的なき殺傷はいただけない。それは知らないうちに戦闘狂いへの道に続いていく。
エルはヴラドがいるからこの程度ですんでいるが、元はかなり残忍な性格をした種族なのだろう。
殺しと言う部分に欠片も躊躇がない。そして本人は気づいていないが、それを楽しんでいる節さえあった。

種の本質に逆らった教育はエルに負担を与えかねない。だからヴラドは殺しそのものを否定することはない。

なんせ自身が数え切れない程生物を殺めているのだ、その背を見てきたエルに殺しはいけないことだと説くのは酷であるし、そもそもこの世界にそぐわない観念だ。

ヴラドの役割は凄まじい成長速度で実力を増しつつあるエルを、せめて戦闘狂に堕ちないよう導いてやることだろう。

親の役目とは、子に可能性を与える事だとヴラドは認識している。それが例え辛いことだとしても、将来あらゆる道をより多く選択出来るよう、様々な知識と経験を与えていく。

それらが結果的に子を成長に導き、あるいは助けになることだろう。事実、ヴラドは生前そうして子を育てたのだから。

今は素直にヴラドを慕い、言う事を聞いているが、いずれ子は親を離れるものだ。その時エルがどんな成長をしているのか、それは神ならぬ身のヴラドには知る由のないことではあるが、少なくともエル自身が己を誇れるように導いてやりたいと思っている。

そんな事をヴラドが考えていると、エルが戻ってきた気配を感じドアに視線を映す。

「……パパ？　あ、あのね、ちゃんとすててきたよ、えっとだから――」

『私は怒ってはいないよ。エルはまだ子供なんだ、知らないことだってあるだろうし、間違いだって沢山するだろう。私は知らない事があれば教え、間違いがあればそれを指摘するが。得た解答や選択をどうするかはエル次第だ。ほら、おいで』

「おこって、ない……？」

『ああ、怒ってなどいない』

ヴラドが優しく声を掛ければ、ロッジの入り口からもじもじと顔

だけ見せていたエルが、ぱっと花が咲くように笑みを浮かべ、そのままヴラドに抱きついてくる。

エルの体重を支えるくらいに弾力性を増したその身体を、まるで椅子のようにしてエルは座るのを好んでいた。

ヴラドが人であれば、今の代わりに膝に乗せて座らせていたのかもしれない。密着するようにヴラドの上に座ったエルから、子供特有の高い体温がヴラドに伝播していく。

残念ながら感覚の鈍い肉体の為、ややぼんやりとした温もりだが、それでもヴラドはこの体温をとても気に入っていた。

それはエルも同じなのか、その大きな瞳を細め、中心の盛り上がりに安心し切った表情で背を預けるようもたれ掛かる。

さっきまでの沈んでいた様子とのギャップに、第三者が見ればエルが演技をしていたのでは？　などと邪推してしまうかもしれない。

この世界で現状二人っきりで過ごしてきたヴラドには、無論それが演技ではないと知っている。

ふと、エルの頭が前より高い位置にあると気づく。どうも人外となってから、時間の感覚が曖昧と言うか、非常に物事を長期的に見るようになっていた。

エルも今こうして気づけば随分と成長している。身長だって伸びているし、髪も肩までだったのが今では背中に掛かっている。

毛先の付近で少しウェーブの掛かったクセ毛だが、触れるとふんわり柔らかくまるで綿菓子のようだ。

そしてエルが人でない最大の証である翼。かなり自由に折りたたみが出来るらしいそれも、デフォルされたような大きさから、少しずつ成長していた。

お饅頭みたいにぷっくりした頬も、少しだけ丸みが取れてきているのが分かる。手の指も紅葉みたいな感じから、しっかりしたものに変化しつつあった。

子供の成長が早いのは、子育てをしたことのあるヴラドも知っていたが、ふと意識するとそれを突き付けられる感じである。

何も成長は見た目だけではない。言葉も日本語ではあるが、発音もしっかりしてきたし、知識面もより豊かになり、情緒面も非常に安定している。

暇があれば、算学も教え込んでいた。こちらは言葉などとは違い、確実にエルの為になる筈だとヴラドは考えている。四則算に関してはそう時間も掛からずエルは覚えてしまった。

他にも戦闘面での成長も著しい。今はまだヴラドの方が殺し合いでは上回るだろう。

相性の問題もあるのだが、それでもエルの驚異的な膂力、見た目にそぐわない頑強さ、驚異的な筋力から得られる高速移動能力は脅威的だ。

純粋に速度の乗った拳の一撃を放つだけで、頑強な昆虫タイプの甲殻すら呆気なく砕け散る。増していく膂力に最近では振り回され気味なため、加減も教えないといけない。

エルの頭を触腕で撫でつつこれからの行動を考えていく。エルの予想以上の戦闘能力は嬉しい誤算だ。

衝動はより強い相手に強く反応する傾向があることから、助けた時の状況を考えれば至極当然の帰結なのだが、どうも容姿のせいですっかり失念していたらしい。

この分であれば、ヴラドの努力次第と、エルの肉体的成長度合いの有無で樹海を出る事も考えてもいいだろう。

ヴラドがこの地に居るのは、効率的な自身の成長を鑑みた結果だが、別に世界に興味が無い訳ではない。

冒険者、あるいは旅人。それらの言葉は中々に魅力的だし、こう

して異世界に来たのだから実践したいとも思っている。
しかし、世界基準での実力の位置が分からない以上、少なくとも樹海で上位に食い込むまでは外に出ないようにと考えていた。
ヴラドの実力も増しているが、それでも未だスライムだし、樹海でもやっとこさ下位中位上位で言えば中位に差し掛かったばかりだ。
だが不思議とヴラドには確信があった。そう遠くない先、この肉体が成長していけば、なにか“劇的な変化”が身に訪れるだろうと……

広大な大草原。その一角で三つの物体が高速で移動していた。一体は体長十メートル近い、猪のような姿の生物。
その生物を挟撃する形で二つの物体が高速で動き回っている。一体は不定形な肉体を様々な形に変え、予想以上の速度と軟体を用いて相手を翻弄している。
対して傍らは不定形生物より一回り以上も小さい人型だが、その移動速度は優に三体の中でダントツであった。
草色のワンピースを着込み、スカートからは白い足がちらちらと覗いている。
まだ幼い表情を何が嬉しいのか笑みで染め、圧倒的な力が生み出す速度で地を跳ねるように駆け回り、その細い腕から信じられないような膂力で持って、現在追い詰めている“獲物”の肉体を強打していく。
一撃放つだけで鉤爪のように曲げられた指先がその肉を引き裂き、鮮血を大地に撒き散らす。爪先に付いた赤黒い血をぺろりと舐め、その顔をにたりと狂気的な笑みに染め上げる。

瞬間、その猪の巨体が予想以上の俊敏さで幼子に振り返り、その口元に生えた一対の雄雄しい牙を振り回す。
それをバックステップで避けるが、そのまま猪は雄叫びを上げ言葉通りに猪突猛進で突き進む。
直線でのその速度は凄まじく、あわやその小さな身が牙の餌食になるかと思えば、横合いから迫った触腕がその身体に巻きつき、軽やかにその小さな身が宙に放り投げられる。
絶妙なタイミング、まさに息のあった連携にその身は重力の楔から逃れたかのように宙を舞う。
燦々と煌く太陽の輝きを背に、その背に畳まれた漆黒の小さな翼を広げ気流を調整し、そのまま宙でくるりと曲芸染みた動きで回ると、そのまま踵を振り下ろす形で落下していく。

「ドーンっ！」

幼子が踵落しの直撃と同時に口にするが、実際にはドゴンッと言う明らかに異常な音を響かせ、猪の頭部が陥没し、その目をぐるりと回して地面に倒れこむ。
ズズンッ！　と重たい響きが鳴り、小さな振動が地面を駆け抜けていく。
明らかな致命傷。恐らくは即死。幼子がそのままストンっと軽やかに地面に降り立ち、喜色満面の笑顔で「パパー！」と手を振る。
その両手は血に塗れ、来ている衣服にも血が染み込んでいるのだが、その溢れ出る陽気な雰囲気が血生臭さを感じさせない。
その微笑ましくも猟奇的な姿に内心苦笑しつつ、その場に近づいていく犬の姿をしたゲル状の生物。

『お疲れエル。大分二人での狩りにも慣れてきたな』
「えへへ……」

最近バリエーションが増えた変形形態、犬型から元の不定形に戻り、そのまま触腕を伸ばしエルの頭を撫でてやる。
エルの戦闘訓練を開始してから一年近く、最近では新たに判明した事実もあって二人で大型生物の狩りに出る事も多くなっていた。
と言うのも、協力して生物を倒した場合、その後の祝福は戦闘に参加した全員に及ぶらしいのだ。
どんな判定の結果なのかは不明だが、お陰でエルとヴラドは共に成長することが出来た。
尤も、一人で倒す場合に比べれば当然と言うか効率は落ちるのだが、疲労や時間効率を考えればエルとの連携は中々悪くないものである。
ヴラドには元から決め手となる決定打に欠けていた為、エルのような一撃を持つパートナーは非常に相性がよかった。

『まだ日は高い。もう少し獲物を探してから今日は戻ろうエル』
「はいパパ！　そういえば、どうしてパパはいきものをころすの？」

さて、行こうかと姿を変えようとし、エルが返事を返したままふと不思議そうに訊ねてきた。
言われて気づく。エルに話した事はなかった、と。別段隠すような事でもないのだが、逆に話すようなことでもなかった為か、ヴラドから口にすることはなかったようだ。
少しの逡巡の後、まぁいいかと口を開く。

『私は強くなりたいんだよ。それこそ何者にも負けないくらい』
「それならエルがつよくなるよ？　エルはパパをころさないし、パパがきらいなひとはみんなエルがころしてあげるよ。そしたらパパはだれにもまけないよね、それじゃあだめなの？」

エルの過激な言葉にもヴラドは驚かない。種としての特性上この手の思想や思考はどうしようもないのだ。
それでもエルはこうして何をするにも目的を置いてくれる。それが例え父の役に立ちたいと言う、子供心から来るものであろうと、エルは目的なき殺生をしようとはしない。
その一点こそが重要であり、大切なのだ。ヴラドはこれからもエルには快楽を得るための殺しだけはして欲しくないと切に願った。
それさえエルが守る限り、戦闘狂へと堕ちる事は決してないだろう。

『男ってのは意地っ張りなものなんだ。古臭い考えだが、男に生まれたからには何かでかいことやってなんぼだとな。これは受け売りだが、少なくとも私はそう思っている。そしてあくまでこの道は私の夢路であって、それは例えだれであろうと邪魔出来るものではない』
「でも、エルはパパのてつだいがしたいよ？」
『なに、手伝いを駄目だと言っているのではないよ。そうだな、何時かエルがもっと大きくなって、何か夢を見るようになったら、私の気持ちも分かるかもしれない』
「ふーん。エルはパパのやくにたてればいいだけなのに」
『エルにも何時の日か夢を持つ日が来るさ。さて、そろそろ行こうか』
「うん！」

威勢良く返事したエルを後ろに、即座に犬の形を模したヴラドが、その四足を駆使し広大な草原を駆け抜ける。
それに追走するようにエルが並ぶ。当初からは比べるまでもない速度で駆け抜け探すは大型の生物。
気配を消したり、誤魔化したりすることが出来ないエルは樹海での狩りは苦手だ。
結果草原で大型の生物を狙う事となる。今、二人はとても充実した毎日を送っていた――――

ふと、エルが寝てしまったその日の夜。ヴラドはここ最近、あの夢を見ていない事に思い至る。
ほんの半年前まではそれなりに見ていた夢。そう、あのノイズ交じりの肉声を延々と聴く夢だ。
最後に聴いた時にはついにその声の持ち主が、恐らくは女性だろうと言うところまで判明していた。
それも恐らくは十代。かなり若い、少女と呼べる年齢である。他にも結局は文脈もあやふやであったが、何かヴラドに語りかけているらしいことも判明している。
それがこの半年程気付けば全く見ていない事を思い出す。これも物事を長期的に見るようになってしまった弊害だろうかと思いつつ、まぁ、見なくなったのであればそれはそれでいいと、ヴラドは眠りについた――――

『ん？　エル、少し待ってくれ』
「パパ？」

日が暮れ始め、既に空は茜色に染まる誰彼時。誰そ彼と問うたが始まりの言葉。
そんな時刻の中で、今日の狩りを終えてロッジに向かっていたヴラドが立ち止まる。
丁度太陽が沈む方角、光でやや見辛かったが何かチラリと視界に映った。何時もなら気にもしないのだが、妙に意識に引っ掛かってしまい気になってしまったのだ。
仕方なく立ち止まって視界を凝らすと、そのぼやけた輪郭が何か小型の生物だと判明する。
なんとなく興味が引かれ、近づいていくと分かった色は黒。体長は三十センチにも満たないだろう。
黒の毛は見事な色艶で、その顔も何だか品があるように見える。
と言っても、瞳は閉じられグッタリと大地に倒れ伏しているし、その毛皮は黒で判別し辛いがべっとりと血液が付着していた。

「パパ、どうしたの――――これは？」
『多分だが、猫……だな』
「ネコ？」
『そうだ。私も昔飼っていた事があった。愛玩用の動物だよ』
「ふーん。でも、ネコさんしにそうだよ？」

エルの言うとおり、このまま放置すれば恐らくそう時間も経たずにこの猫らしき生き物は息絶えるだろう。
触腕を伸ばし触れて見るが、抵抗するだけの力は残っていないのか、力無く「フゥーッ！」と威嚇するだけであった。

さわさわと身体中を撫で擦った結果、傷は腹部と判明。そこまで深い訳ではないが、出血が激しく、このまま放置すればやはり間違いなく死に至ることだろう。

所詮は自然の摂理。何があったかは不明だが、ここで息絶えるのがこの猫の運命。弱き者はより強き者に搾取される、それがこの地のルール。

が、それはあくまでも“獣”たる、この世界に住む者達の掟に過ぎない。今でこそヴラドはこの世界の住人だが、本質は来訪者に過ぎない。

ならばその掟に縛られる必要も無い。郷に入っては郷に従えと言うのも一理だが、それだけでは自ら選択を放棄するに等しいだろう。

「パパ？」

『なに、昔飼っていた猫も黒だったと思ってな。エルも興味はないか？』

「パパがほしいならエルはどっちでもいいよ」

『そうか。なら私が欲しいと思ったんだよ。さぁ、帰ろう、私の肉体で包めば止血くらいは出来るが、ロッジにある薬草を使った方が確実だ』

「はいパパっ！」

エルを助け出した時のように猫を触手で持ち上げ、そのまま肉体に取り込み酸素を窒素などで割って巨大な泡を作り出す。

その中に猫を入れ、内部のゲルの強度を強化。そのまま犬の姿に変形し、沈み行く太陽を背景に、我が家への帰宅を急いだ……

第七話（加筆版）

どうしてこうなったのかと、ヴラドは一人心の中で滾る暗澹とした暗い思いを吐き捨てる。

犬型に変形した肉体を巧みに扱い、ジグザグに樹海を駆け抜け迫り来る“群れ”を引き離す。

傍にエルはいない。この突然始まり、そして終わりの見えない鬼ごっこが始まって四時間程経過した後、遂に離れ離れになってしまった。

その時の逃げることしか出来なかった己を思い出し、心の内側が憤怒の業火に包まれる。

（何たる不覚ッ。体たらくにも程があるぞ私はッ！　いくら訓練時代から数十年と経っていたとは言え、ああも昆虫風情に手玉に取られるなど……）

口があれば唇を噛み切っていた事だろう。もしかしたら未然に防ぐことは不可能であったかもしれない。

だが、可能性が零ではないのでれば、ヴラドはそれを可能な限り実践しなければいけなかった。それを出来るのはヴラドだけであったからだ。

逃げ切れるかもしれないという甘い誘惑に気を僅かに許した結果の失態。それはほんの些細な、それこそ僅かな油断であったが、それを見事に突かれてしまった。

（落ち着こう。怒りに駆られては冷静な判断は出来まい……今重要

なのは、どうやってエルと合流するかのみ）

ほんの数秒から数十秒。一分に満たない逡巡の果てに元の平静を取り戻し、ヴラドは既に深部と言ってもよい樹海の中を犬型の肉体で駆け抜ける。

子猫を拾ってから数ヶ月、エルの実力は飛躍的に上昇しており、単純な戦闘能力で言えばヴラドのソレを既に上回るだろう。

それでも縦横無尽に駆け抜けつつ、まるで庭のようにも感じる樹海の中、迫り来る“群れ”を一掃するにはあまりにも脆弱な力だ。

その数はまさに無尽蔵の名こそ相応しい。一体どこに隠れていたのかと疑いたくなる程の数。

ヴラドに口と舌があれば盛大に舌打ちをし、アメリカで培った聞くに堪えない罵詈雑言を吐き散らしたに違いない。

実際はそんな余裕もなく、ただひたすらに逃げ続ける事しか出来ないのだが……

『しつこい奴等だッ』

高々と聳える広葉樹の上より一体の影がヴラド目掛けて飛び掛る。それを犬型フォームの、獣特有のしなやかさで回避し、ようやく鉄並みの硬度を得た触手の一突きで的確に頭部を破壊。

甲殻を突き破り、脳髄を破壊し絶命させる感触を感じる暇もなくその躯から触手を即座に肉体に戻す。

そのまま振り向くことすらなく樹海を駆け抜ける。既にこの終わりの見えない逃走劇の中で撃退した敵は五十体を超えるだろうか。

時間帯効率と言う意味では恐ろしく効率のよい狩りではあるが、チップが己の命だと言うのだから笑えない。

まるで誘蛾灯に集る羽虫の如く、次々と現れる二メートル程の昆虫どもはヴラドとエルを付け狙ってきていた。

気付けば苔や背の高い草、茸、蔦、食虫植物、群生する植物が段々と禍々しいものへと変化している事に気付く。

（不味いな……明らかに奥に誘われている。前出会った時は、知能の欠片も感じなかったから油断していた。一体どんなカラクリだ？）

そう思考している間にも、突如地面より這い出てきた一体を避け――更に横合いからその強力なあぎとを開閉し迫ってきた一体を軽やかなジャンプで避ける。

とんっと、軽い音と共に木々に飛び移り、よじ登ってきた有象無象を避けるように再び跳躍。地面に着地して即座に出しえる速度へとシフト。

背後からは夥しい量の“気配”。同時に横や前方からも少数だが感じられる。

恐らく背後数十メートル先には津波のように奴等が押し寄せていることだろう。物量作戦もかくやと言わんばかりだ

少々どころか、全く持って見たくない光景なのは間違いない。

悪態を吐くこともせず、ヴラドは肉体に取り込んでいる子猫――大きさはここ数ヶ月変化が見られない――の様子を確認し、エルが無事であることを信じてもいない神に祈りつつ、樹海の最奥へと進んでいく……

――――そもそもヴラドが今の状況に陥ってしまったのは四時間

以上も前に遡る……

今日で子猫を拾ってから数ヶ月程、やはりと言うか、地球の猫とは生態や成長に違いがあるのか、まったくもって体重はおろか体長に変化が見られない。

傷も当初の実験で判明していた傷に効く薬草、それらを用いることで無事塞がった。元々自然治癒の能力も高かったのだろう。

食性に関してだが、キャットフードなどある訳もないので、とりあえず仕留めたウサギのような生物、この世界に来た当初にであったホーンラビットの生肉を与えて見たのだが、どうやら正解であったらしく、口の周りを真っ赤に汚して一心不乱に飛びく。

余程空腹だったのだろう。餌を取られまいと、まるで抱き付くように手で押さえ噛り付く姿は小さくとも立派な獣ハンターなのだと、ヴラド達に示していた。

以降このリツゥアノーン、愛称リアンと名付けられた黒の子猫はヴラド家の一員として育てられる事となる。

『美味いか？』

『ナァー！』

「おいしいの？」

『……』

ヴラドの思念にはその尻尾を揺らし、愛らしい声で鳴くが、エルが問うとぷいっと無視し、そのまま木を加工して作られた皿に収められた生肉に齧り付く。

ヴラドは内心で苦笑を呈すが、リアンのその反応にエルの細い眉がくいっと持ち上がる。

「……このこかわいくない。ねぇパパ、すてようよ？」

どうもあんまりエルには懐いていないらしく、大概は今のように呼び掛けにすら反応を示さない。

もしかしたら、エルが日本語を扱っていることも原因かもしれないが、ヴラドにもそこは不明であった。

ぷくっと頬を膨らませ、ヴラドの身体を椅子にしているエルが声を上げるのも、既にここ最近では習慣のようなものだ。

『猫なんて天邪鬼な生き物だ。いずれはエルにも懐く』

「ほんとうに？」

『ああ、あんまり構わず、寄ってきたときにコミュニケーションを取るのがコツだ』

「わかった、やってみる！」

口ではいらないなどと言っても、本心は興味津々に違いない。

エルにとって生き物とはヴラドを入れて、殺していいモノと駄目なモノに大別されてしまっている。

この黒の子猫はそんなエルの世界にやってきた殺しては駄目な生き物、その二番目だ。

自分からそう決めたかは今はいい。これを通じて、エルにとって良い意味での経験をきっと得られるだろう。

猫や犬などを撫でたり、あるいは人に撫でられる、撫でる、と言った行動はコミュニケーション能力を上げる効果がある。

それはオキシトシンと言う成分が分泌されることで得られる効果だが、撫でられるだけで分泌されるよりも、撫でる側となるのもまた良い経験となるに違いない。

だからこそヴラドは積極的にエルの頭を撫でるし、この子猫とも仲良くなって欲しいと思っている。

そわそわと、子猫をちらりちらりと横目で見るエルの様子を見て、年頃の女の子らしいと思える自分の心にヴラドは安堵した……

『よし、エル、この水皿をそっとリアンの前に置いてみるといい』
「う、うん」

テーブルの上に置かれた木材を円形にくり貫き外を削って整えた皿。それをエルに渡せば緊張した面立ちでそっと受け取る。
リアンも肉を食べ終えて喉が渇いているのだろう、ヴラドが大抵は置く皿なのだが、エルが手に持っても特に反応せず待っていた。

「はい。ど、どうぞ」

緊張に上擦った声を上げつつそっと肉の入っていた皿の横に置く。すると得に問題もなくリアンは皿の中の水を舐め始めた。
その様子をキラキラとした眩しい瞳で凝視するエル。この行為も既に十を超えているが、それでもエルは飽きないらしい。

「ぱ、パパ。さわってもだいじょうぶかな」
『さて、それは私にではなくリアンに聞くべきだろう』
「うん……せなか、さわってもいい？」

返事は返ってこない。しかし、その長い尻尾が一度横に振られるのを後ろから見ていたヴラドは目撃していた。
それはリアンなりの合図だ。許可と言い換えてもいい。もう何度となくやってきた行為だが、一度としてリアンはエルに触れる事を許してはくれなかった。
それが遂に積極的ではないものの許しが出たのだ。一歩に過ぎないが、エルとリアンの仲が深まった瞬間と言えるだろう。

『エル。リアンが触れてもいいそうだ。ゆっくり、優しく頭の方から背中の半ばまで擦るように撫でるんだ』

ヴラドに言われた通り、その背中を撫でようとするが――――

「フゥーッ！」

「ご、ごめんなさい！！」

元々膂力の強い種であるせいか、予想以上の力を入れてしまったらしく、リアンが毛を逆立て威嚇の声を上げる。

「パパ、ど、どうしよう……え、エルきらわれちゃったのかな……」

その大きな瞳にこれまた大粒の涙を浮かべ、エルがおろおろとリアンとヴラドを交互に見る。

今にも泣き出しそうな表情に、何とかしてやりたいのだが、これぱかりはリアン次第であるためなんと言ってよいのか返答に困ってしまう。

『ん？』

「り、あん？」

そんな二人の前でリアンが逆立てた毛を戻し、ゆっくりエルの前で横になる。その姿はまるで「ほれ、撫でるんだろう？」と、そう言っているようで、エルも思わずもう一度手を差し出してしまう。

先程より更に慎重に、そっとその柔らかな黒い毛に指先が触れる。そのままゆっくりと手のひら全体でその背を撫でていく。

「ぱ、パパっ！！」

リアンがエルの何時にも増しての大声にびくりと一度反応し、その頭をくいっと持ち上げるが直ぐにまた床にぺたりと伏せ、くぁっ！　と欠伸を一つ。

『ああ……良かったなエル。今日からは水皿はエルにやらせても問題はなさそうだ。出来るな、エル？』

「うん！　エル、がんばる！！」

そう言って再び太陽のように輝かしい笑みを浮かべ、それは蕩けそうなくらいに嬉しいと感情を表に出しつつリアンを撫ぜる。

少しだけ鬱陶しそうな様子であったが、リアンも特に嫌がる素振りも見せず、暫くの間エルはリアンを撫で続けた。

それを横目に見つつヴラドは思考する。狩りは既に終えており、陽は既に傾き始めている。ここ最近ではエルに戦闘能力面ですっかり先を越されてしまった。

ヴラドの成長性も異常と言えるのだが、エルの場合は元から戦闘能力の高い種族な為か、まるで乾いた大地が水を吸い込むかの如く成長していく。

最近では科学に真っ向から喧嘩を売るような、“魔法”としか言い様のない力まで見せる始末だ。

今はまだ小さな火を灯したり、旋風（つむじかぜ）を起こしたりするのが精々だが、成長と共にその魔法のような力も増すのであれば、将来は一体どうなるのか。

ヴラドとしては生き残ると言う意味でも歓迎だが、この世界にエルに匹敵した成長性を持つ種が居ると思えば、頭が痛くなるのも事実であった。

ほのぼのとした空気に、やはりリアンを助けたのは正解だと改め

てヴラドが思っていると――――

「パパ」

『ああ……少なくとも三体は居るな』

「エルがかたづけてくるよ？」

『大丈夫だ。エルはリアンとロッジで待っていてくれ、もし万が一があった時だけ出て来てくれればいい』

「パパがそういうのなら……けが、しないでね」

エルの言葉に思念だけで首肯を返すと、形態を犬型に変化させそのまま扉を押し開けロッジの外に躍り出る。

瞬間待ち構えていたかのように襲い掛かってきた“フォレストアント”。即座に四肢を鉄並に硬質化させ、扉を押し開けた勢いのまま前足でフォレストアントを押しのける。

そのまま背部から鉄槍と化した触手で比較的甲殻の薄い部位を貫く。緑色の液体がヴラドに降りかかるが、それに気に留めた素振りも見せず、近くで様子を見ていた二体のフォレストアントに素早く接近。

飛んで火に居るなんとやらとばかりに、その強力な顎で向かえ撃とうとするフォレストアントを嘲笑うように跳躍。

弾力の強化により高々と舞った肉体は、宙で無数の触手を展開し、硬質化した槍がまるで雨のように二体へと降り注ぐ。

一体が瞬く間に剣山と成り果てる中、もう一体は素早い動きで見事に降り注ぐ触手の嵐を掻い潜る。

昔出遭った時より遥かに動きが俊敏だ。その事実に一瞬動きが止まり、その間に地面に着地。

瞬間襲い掛かって来た鋭利な鋏のような顎。見事球体のヴラドの生命線、核狙った一撃を即座に犬型から平べったい形状に変身して回避。

そのままずるずるとフォレストアントの真下に移動、地面から突き立つ木々のように触手がフォレストアントを刺し貫く。

都合三体、時間にして一分と少しの戦闘を終えたヴラドが苦い顔を見せる。

フォレストアントと出会ってから幾度か住処を実は変えており、襲撃もなかったことから女王には伝達されていないと思っていたのだが――――

（明らかにこのロッジを狙って来ていた。これは少し不味いかもしれないな）

先程の三体が斥候のような役割であれば、本隊が向かってきている可能性が高い。

もし今までの期間が働き蟻増産の意味合いであったのならば――考えても仕方がないと思考を棄却。

即座にこの場を捨てる判断をし、フォレストアントを暫くのエネルギー源とし取り込むと、エルを呼ぶべくロッジへと戻っていった……

『エル！』

「パパ？」

荒々しく扉を開け放ち、ロッジに入るのと同時にヴラドの思念が勢いよく発せられる。

そうそう声――思念――を荒げることのないヴラドにしては珍しい行動に、エルがきょとんとした顔と声でヴラドを呼ぶが、それに構わず必要な事のみ告げるべく口を開く。

『ロッジを捨てる。恐らくそう時間が経たないうちにフォレストアントの大群が此処に押し寄せる』

「フォレストアント？　……ああ、アリさんだねパパ。でも、エルのてきじゃないよ？」

聡明とは言え、まだまだエルは幼い。数の暴力と言う本質をまだよく理解出来ないのだろう。

なまじ実力がある分だけそれは顕著なのかもしれない。

『エル、量は時に容易く質を上回る。エルは確かに強くなったが、相手が千以上も居て全部倒せると思うか？』

勿論数は当てずっぽうだが、下手するとそれを上回る可能性もある。ヴラドの言葉を誇大妄想と切り捨てるのは早計だろう。

「たぶんむり。それに、パパがにげようっていうんだから、エルはそれにしたがうだけだもの」

そう言ってにっこり笑うと腰掛けていた椅子から降り、そのままヴラドの横に移動すると「それじゃあいこう、パパ」と、外に向かう。

リアンがなぁーと鳴きヴラド達に着いてくる。動物としての本能なのか、それとも地球の猫とは違い知能が高いのか、その足取りに迷いは見られない。

エルとリアンの様子に頼もしさを覚えながら、ヴラドは一人と一

匹を連れて外に向かった。
瞬間、凄まじい頭痛にも似た痛みがヴラドを襲う。

『ッ…ァ…！？』
「ぱ、パパ！」

慌ててエルが駆け寄るが、ヴラドはそれに構う事も出来ない。何か、強制的に周波数を合わせられているかのような不快感。
脳内を弄り回されるような感覚に頭もないのに頭痛が増し、異もないのに奇妙な吐き気を覚える。
数秒がまるで無限にも引き伸ばされたかのような時間間隔の果て、遂に何かとぴったりくっついたと言う訳の分からない“確信”がヴラドの全身を駆け抜けた。
瞬間、どこかで聞いた事のある声が思念としてヴラドに響く。

『ごめんなのよさ！　本当はこん――――』

何を謝っているのかも判明する前に、ぶつりとまるで回線が切断されるように少女の声が途切れる。
そこでようやく声の主があの夢の中の、肉声の主であると思い至り、どう言う事だと自問しつつも収まった頭痛に何とか平常を取り戻す。
どう言う意味であったかは気になるが、今はそれより優先するべきことがある。

『心配を掛けた。早く行こう――』

と言いかけヴラドの思念が途切れる。三体のフォレストアントを

始末して数分と経っていない筈だが、どうやら既に手遅れだったらしい。
地面がまるで地震のように小さく振動している。同時に草原の方角から土煙と共に、“何かの群れ”がヴラド達の方へと向かってきているのが見えた。
距離にして数百メートル程は先だろうが、数分もしないうちにロッジに到着するだろう。
ヴラドがざっと確認出来るだけでも、明らかに百や二百なんかでは足りない、それこそ千単位、あるいはそれ以上の数。

流石にこの数はエルも予想していなかったのか、その大きな瞳を驚愕に見開き信じられないと言った感じだ。
かくいうヴラドにも流石に我が目を疑うかのような光景であった。
リアンは勇ましくも毛を逆立て「フゥーッ！！」と威嚇しているが、無謀と勇気は別物である。
最も早く硬直から回復したヴラドが即座にリアンを身に取り込む。
何時かのエルを助けたように、酸素を窒素で薄めた泡で包み、ゲルの弾力性を強化、犬型フォームへと肉体を変え、『エル、呆けている暇はないようだ。行くぞ』と声を発し、そのまま草原とは逆の方向、食物連鎖の縮図が渦巻く大樹海へとヴラドは走り出した……

『そう簡単には逃がしてくれないかッ！』

どこから沸いたのか、樹海から草原とは別働隊でも置いていたように現れたフォレストアントを触手で刺し貫き絶命させる。

「じゃまっ！」

同時に地面から現れた一体をエルの見た目にそぐわない膂力を誇る一撃が襲う。
冗談のような速度で巻き込んだ風による気流により、信じられない威力を発揮した素手の殴りはその堅牢な筈の甲殻を吹き飛ばし、そのまま本体ごと近くの大木に吹き飛ばしていく。
速度を出来るだけ殺さず、樹海の中を木々に足を引っ掛けないよう進むが、数十メートルも進めばまたもやどこから現れたのか、フォレストアントがその巨大な顎をガチガチと鳴らし突っ込んでくる。
それをエルのパンチが迎え撃ち、その肉体があっさり吹き飛んでいく。それでも次々と沸いてくるフォレストアントを見て、エルの顔が引き攣る。

『無駄に相手をしなくていい。今はとりあえず逃げ切ることだけを優先するんだ』
「う、うん」

背後から迫り来る大群。横合いから飛び出してくる少数隊、そして先回りでもしたのか、待ち伏せだったのか、前方からも時折進路を塞ぐように沸いて出てくる。
ヴラドはその自由な肉体を用い、即座に変形し次々ととやり過ごし、エルはその圧倒的な身体能力を利用し、どこの忍者だと言わんばかりに木々を飛び移ったり幹を蹴り飛んでいく。
それでも振り切れない場合はその凶悪な素手の一撃を持ってして活路を開く。
ヴラドも時に触手を振り回し、時に酸や塩基を飛ばし、失ったエネルギーは死体を取り込み即座に回復することでペースを維持して

いる。
樹海に入ってそろそろ一時間、木々の高さも増し、本格的な樹海の領域に踏み入ってしまったというレベルだ。
斜めに向かう事も考えたが、背後から追いつかれる可能性もある為、現状は真っ直ぐ進むしかなかった。

幸い人外の恩恵か、方角はなんとなく理解できる。四肢を動かし、樹海の中でありながら生前の全速力を上回る速度で駆け抜けていく。
ヴラド自身は兎も角、エルの体力やリアンが心配であったが、予想以上にエルの体力は高そうであるし、リアンは泡の中で大人しくしている。
その様子はまるで状況を理解しているようで、時折こちらの意思を理解しているのではないかと思ってしまうくらいだ。
稀に遭遇するフォレストアント以外の生物を避けつつ、エルもヴラドも二、三言時に言葉を交わすだけでひたすらに樹海を進み続ける。
ふと、今まで気づかなかったが、樹海の様子がどうも可笑しい事に気づく。何が変なのか、逃走しながらも意識を傾けること数分。

（……そうか、生き物の気配が薄いのか。元々騒がしい場所ではないが、それでも生命の気配が濃厚な地だと言うのに、その気配が随分と希薄なんだ）

それが意味することに思考を巡らせていく。フォレストアント達が狙っているのはエルだと言うのは間違いない。
そこに何故かヴラドまで含まれているが、この際はすべてがエルに集中するよりはいいだろうと逆に御の字だ。

ならば、エルを横取りされたくない為に樹海の生物を排したのか？　それはあっているようでどこかズレている気がヴラドにはしてならない。

そもそも、この樹海が広大とは言え、同じ種がこれだけの数を維持するのは相当大変な筈である。

そこで何か違和感、そう――――数、その思考が強烈な違和感を放っている。

今まで襲ってこなかったのは兵隊蟻や働き蟻の増産の為だとヴラドは検討をつけていた。

では、増やすのに必要なのは何か？　それは餌だ、つまり、フォレストアントの爆発的な増殖に伴い森の生物が減少してしまったのである。

最近は草原での狩り、樹海も浅場であった為に見逃してしまったのだろう。

こんな広大な樹海で目に見えるレベルで生物が減っている。ならば、一体どれだけの数でフォレストアントは勢力を拡大しているのか。

考えるのが嫌になってしまうくらいの怖気が駆け抜ける。一瞬脳裏に過ぎるのは逃げ切れるのかと言う事実。

心に一瞬忍び寄る不安と言う名の魔手を、即座にヴラドは鼻で笑うように消し飛ばす。

ヴラド一人であろうと、最善の道を取り、生きる目を模索し続けただろう。そこに今は“家族”が居るのだ、それならば不可能を可能に変えてみせるのが“父”の役割だろう。

子を守れないでなにが一家の大黒柱か。子に格好良い姿を見せるのもまた、父の役割なのだ。

『エル！　あまり私から離れるなよ。何時分断されるか分からない』

出来るだけ思念を限定し、フォレストアントに伝わらないよう気をつける。

声量を絞るのと似ているが、それとも違う感覚は言葉にし難い。

ヴラドの思念が無事届き、エルがこくりと頷き素早く少し離れていた距離を詰めてくる。

そこで返事をしないのは、やはりエルが年以上に聡明な証だろう。

時折逆に年不相応な幼い面もあるが、それもエルの美点と言えなくもない。

『エル、まだ疲れてはいないか？』

「だいじょうぶだよパパ、まだまだエル、はしれるもの」

そう言ってその細い腕を曲げ力瘤を作ろうとするが、残念ながら僅かも盛り上がらない。

エルなりの励ましなのか、それとも自然に出た反応なのか、今の状況を忘れている訳ではないが、ヴラドの心に笑みが零れる。

高くなっていく木々の間を駆け抜けながら、触手を伸ばしてエルの頭を乱暴に撫でてやる。

いきなりのヴラドの行動にわっぷわっぷとエルが口にするが、それでも止めない。

乱暴なのは移動しながらなのでヴラドとして許して欲しいところだ。

ぷくっと頬をエルが膨らませるが、直ぐにその怒ってますと言う表情も、撫でられ続けるうちにほにゃっと崩れてしまう。

そこに泡の中でリアンが「ナァー」と鳴く。まるで自分も居ると

主張しているようで、ヴラドの心は温かな感情で満たされる。

（そうだ。私には守らなければいけない家族が居る……誰一人として犠牲を出しはしない。父は何時だって子の英雄（あこがれ）であり続けなければいけないのだから……）

そう心の中で再度の決意をし、力強く地面を蹴った――――

第八話（加筆版）

樹海を進み続けてそろそろ数時間が経つだろうか。周囲の景色はどんどん薄暗く、そして不気味に変化していく。

ここ数十分、大分振り切ることができたのか、フォレストアントの追撃が殆どない。

精々が数分に一体、二体程度だろう。だが体力はともかく、エルは明らかに精神面で疲弊し始めている。

三十分前までは終わりの見えない逃走劇に、その顔色も暗かったのだが、目に見えて追撃の数が減ってきた事でようやくその表情に笑顔が戻りつつあった。

思えば、それこそが最大の油断。昆虫如きがまさか、かような策を用いてくるなど誰が思おうか。

ヴラド自身、出来るだけ警戒を続けているつもりであった。それでもエルの安堵した顔に僅かな綻びが出ていたのだろう。

ゆえに、本来なら気づけたかもしれない“襲撃”を許してしまった。

このままなら逃げ切れる……そうヴラドが心で呟くのと同時、地面が“爆発”した。

丁度開けた位置の場所が爆弾でも仕掛けていたように地面が弾け飛び、草木や土が盛大に舞い上がる。

土煙が立ち込め小石が降り注ぐ中、思わずその散弾の如き勢いで飛んできた木片や小石を左に避けてしまった結果出来た、エルとの距離を詰めようとした瞬間――――

『なっ！？』

ヴラドが思わず驚愕の言葉を漏らしたのよりやや早く、“川”がエルとヴラドの間を強制的に遮った。

茶色い川。思わずそう判断してしまった後、それがよく見れば大小様々に集まった信じられない数の“フォレストアント”だと気づく。

あまりの密集度に茶色い流れとしか視認出来ないそれは、瞬く間に二人の間の間隔を押し広げていく。

地面が爆発したように見えたのは、どこからか地下を移動してきてそのまま出口を吹き飛ばしたからだ。

今まで追っ手の数が少なくなっていたのが、地下に多くを動員していたからだろう。だが今更それを理解したとしてもあまりに遅い。

生きた蟻の川は二人を分断した後、更に途中で二手に分かれ、まるで巨大な大蛇のような動きでエルとヴラドに向かって殺到し始める。その数目測だけで数百以上。

『エルッ！　エルーッ！！』

瀑布の如き流れで大木を圧し折りつつ向かってくる蟻共を、木々を四足で飛び跳ねることで回避しつつ、可能な限り最大に上げた思念を飛ばしてエルの名を呼ぶが返事が返ってこない。

まさか……と信じられない思いが胸を満たすかと思った瞬間、木々の合間、百メートル程先で蟻の群れが吹き飛ぶのが見えた。

小さな躯体が跳ね回る姿も同時に一瞬だが映り、エルが無事であるのだと知る。心底心の中で安堵している己を叱咤しつつ、迫り来る猛威から距離を取り直す。

急いで追いつかなければ――――そう思い進路を変更しようとした瞬間、まるでそれを遮るように蟻の川がエルの方向へと回りこみそのままヴラドに旋回するように襲い掛かった。

密集する木々をものともせず、くねくねと器用に避けながら、時なぎ倒しつつ周到にヴラドを攻め立てる。

この数をまともに相手にすれば間違いなく待つのは死だ。それを理解出来ない訳ではないからこそ、ヴラドは内心不甲斐無い自身を罵りながらも“逃げる”。

紙一重。まるで蛇が鎌首をもたげ食らい付くように、蟻の群れがヴラドの居た大木をミシミシと圧し折っていく。

轟音と共に周囲の樹木を巻き込み倒れていく大木、それより一瞬早く地面に着地したヴラドはエルの無事を祈りつつ樹海の奥へと走り行く。

今までの襲撃の少なさは地下の動員以外にも、油断させる為だったのだろう。既に隠す必要もないと言わんばかりに、蛇のような群体で襲い掛かる群れとは別に、わらわらと個別でフォレストアントどもがヴラドへと殺到してきていた。

それらを相手していては後ろから迫る群れに追いつかれ、あっと言う間に蹂躙されてしまう。途方もない数の暴力を前に生きる目などそれこそ限りなく零に等しい。

脳裏に過ぎるシーンは、とある南米に生息する軍隊アリと呼ばれるアリ達だ。ジャングルや平地を凄まじい量で移動し、獲物を瞬く間に覆い尽くし噛み殺す殺人蟻。

まさに今のフォレストアントはその名こそ相応しい。知能の欠片も見られなかった筈のこの種が、どう言う訳か小賢しい知恵を身に付けている。

その巧妙な移動に始まり、統制の取れた動き、どう見ても司令塔

に近しい存在が居るのは間違いない。それこそそれなりに知能を有した存在だろう。
今は兎も角引き離し、エルと合流しなければ……そう思考し、限界まで速度を引き上げる。
多少避けきれない大木に身体がぶつかるが、ブラドの身は不定形生物。その強みであるゲル状の肉体がある程度の衝突をものともせず、最大速度での走行を可能としてくれていた。

『しつこい奴等だッ』

高々と聳える広葉樹の上より一体の影がヴラド目掛けて飛び掛る。それを犬型フォーム、獣特有のしなやかさで回避し、ようやく鉄並みの硬度を得た触手の一突きで的確に頭部を破壊。
更に結果的に上昇している膂力にモノを言わせ、そのまま死体を近くのフォレストアントに投げ付け吹き飛ばす。
エル程の力はないが、それでも生前に比べれば信じられない膂力を今は誇っている。
そのまま振り向くことすらなく樹海を駆け抜ける。既にこの終わりの見えない逃走劇の中で撃退した敵は五十体を超えるだろうか。

（不味いな……明らかに奥に誘われている。前出会った時は、知能の欠片も感じなかったから油断していた。一体どんなカラクリだ？）

そう思考している間にも、突如地面より這い出てきた一体を避け――更に横合いからその強力なあぎとを開閉し迫ってきた一体を軽やかなジャンプで避ける。
とんっと、軽い音と共に地面に着地して即座に出しえる速度へとシフト。

背後からは夥しい量の“気配”。同時に横や前方からも少数だが感じられる。

恐らく背後数十メートル先には津波のようみ、奴等が押し寄せていることだろう。物量作戦もかくやと言わんばかりだ

少々どころか、全く持って見たくない光景なのは間違いない。

悪態を吐くこともせず、ヴラドは肉体に取り込んでいる子猫――大きさはここ数ヶ月変化が見られない――の様子を確認し、エルが無事であることを信じてもいない神に祈りつつ、樹海の最奥へと進んでいく……

（一体何が目的なんだ？　この辺りはもう深部だぞ）

大分距離を離したが、それでも数百メートルもアドバンテージがあるかどうかは分からない。

相変わらずエルの方向や外へと向かおうとすると、どこからかわらわらと蟻どもが湧き出してくる。

一体どれだけの数のフォレストアントがこの森に存在しているのか、もし地球で発生していたなら未曾有のバイオハザードとなっていたに違いない。

湧き上がる不気味な怖気。分からない事は恐怖だ。まるで急に知能をつけたかのようなフォレストアント達の動き。

それがエルを付け狙う事と繋がっているのかは不明だが、可能性は高いだろう。分断されて三時間、そろそろエルを助け出した場所をも越えるころだろうか。

平時ならちょっとした懐かしさに浸る事も出来るだろうが、今はそんな事をしている余裕もない。

その先はヴラドですら過去一度も踏み入った事のない最深奥だ。
この辺りまでくるだけでも大分生物の息吹が戻ってきている。
それは即ち、フォレストアントの十や二十、あるいは百でも仕留められないような強力な生物が跋扈する領域と言う事に他ならない。
今のヴラドでもこの領域内では一割程の種には勝つ事が難しいと言わざるを得ない。それでも当初に比べれば信じられない成長なのだが……
そしてこの先は、そんな地球上の生態系では考えられない化け物どもより更に強大な、それこそヴラドでは歯が立たないような存在が蠢く地だ。
まさに神話に語られる化け物に等しいだろう。過去一、二度程エルを見つける前に見た事のある存在からすれば、今のヴラドでも恐らく路傍の石ころのようなものに違いない。

それ程までに、これより先の地に住む生き物達は一線を画す存在なのだ。否が応でもヴラドの緊張は高まっていく。
それにここまで来ればヴラドにも蟻達の思惑が見え始めていた。
“導かれている”。あるいは羊犬が羊を追い立てるように、ヴラドはこの樹海の最深部へと誘われている。
もっと早くに気づいてよかったのかもしれないが、昆虫相手と言う先入観がそれを阻害してしまっていたのだろう。
ヴラドがようやくそれに思い至ったのも、つい先程からフォレストアントの動きが襲い掛かると言うよりは、“道案内”のようなものとなっており、更に言えば明らかに“ヴラド”を守るように周囲に壁を展開し始めたからだ。

（一体何処に連れて行くつもりなんだ……？　少なくとも逃げ出そうとしない限り襲い掛かってはこないようだが）

蟻如きに言いように追い立てられた事実は非常に遺憾ではあったが、逆にそうまでして導く先で待つものにも興味が出てきていた。
下手すれば生餌を連れて行きたかっただけかもしれないが、それにしてはあまりに妙だ。
餌にするだけなら殺さない方が得だ。だと言うのにまるで生死を問わないような攻勢ぶりであったり、こうして逆に今は守るように展開している。
少々その動きは不自然であった。それを言うならば、急に知能らしきものを有したその一点こそが最も異常なのだが。
一体何がこの先で待ち受けているのか……蟻達の導きに従い、恐らくは終点でエルとも合流出来る筈だと願いながら、ヴラドはまもう少しでこの鬼ごっこも終わりだろうと密かに感じとっていた――

（ここが樹海最深奥、か……）

フォレストアント達に誘導されるように進みだして一時間程、明らかに空気の重さがその地帯は違った。
そこはそう、深部となお比してもヴラドに“魔界”と思わせるに相応しい場所であった。あらゆる植物は奇妙な進化を遂げ、天を覆わんばかりの勢いで空を侵食している。
その色も緑などと言う色は少なく、紫やら赤やら、中には地球の自然界では殆どありえない青色をした植物など、かなり毒々しい。
差し込む光に反射するのは恐らく毒性のある胞子だろう。まるで霧のように、あちらこちらから胞子のようなものが引っ切り無しに

植物達から排出されていた。
ヴラドは成長に合わせ、あらゆる毒性に非常に強い存在へと変わっている為に影響はないが、通常であれば一時間と活動は出来ない場所である。
幸いエルも種族柄なのか、毒に対する耐性は非常に優れている為、移動中に倒れることはないだろう。

植物以外にも姿は見えないが、何か“強大”な存在の視線と呼ぶべきものがこちらを監視しているのをヴラドは感じ取っていた。
それはヴラドの能力が優れているのではなく、相手がこちらにも分かるよう監視している類のものだ。
言い換えればそれだけの行動が出来る知性を持つ者達が居る、と言う訳である。
ヴラドと言う“弱者”をなぜ監視する必要があるのか、それは不明だが、今回の一連の流れにもしかしたら何か関係があるのかもしれない。
視線の感じも何かと言うと敵意よりは成り行きを見守る、と言う感じが強いのもヴラドにそう思わせた一因だろうか。
下手をすればこれは本当に生きて帰れないだろうと、改めて気を引き締めていると、フォレストアント達の動きが緩慢なものへと変化していく。
視線を前に集中させれば、薄っすらとした靄の奥から巨大な“洞穴”が姿を現す。いや、それは洞穴などではない。フォレストアント達の“巣の入り口”だ。

『パパッ！！』

直径十数メートルもある巨大な地下への穴に圧倒されていると、ふとエルの声が響きそのまま横面に衝撃が奔った。
幸い声に対して反射的にゲルの弾力性が強化されていたからいいものの、下手すれば今頃エルはヴラドの肉体を突き抜けていただろう。
湧き上がる歓喜を抑え、エルとの接触と同時に変化した視線にいぶかしむヴラド。

（なんだ？　明らかにエルとの接触に監視が動揺した――？）

「パパ？　どこかケガしたの？」

明らかに監視者達――複数名――が動揺したゆらぎ。それも間違いなく想定外の事態に対する反応にどう言う事だとヴラドが思考していると、エルが泣きそうな声でヴラドに縋り付いてきた。
その姿と声にハッと我を取り戻し、触腕でエルの頭を撫でてやる。思考の海に埋没してしまうのは、ヴラドの悪癖であった。

『大丈夫だ。どこも怪我はしていない。エルこそ怪我はしていないか？』
「えっと、すこしだけキズができたけど、すぐになおったよ！」

そう言って指で示した部位はなるほど、確かに草色のワンピースが千切れてしまっている部分が数箇所見られた。
エルは種族の特性か、その回復力は非常に高い。人と違い細胞の分裂限界数（ヘイフリックリミット）がもしかしたら無い、あるいは比べるべくもない差があるのかもしれないが、それでも何か代償があるのではないかとヴラ

ドは危惧してしまう。
出来るのなら、その辺の詳細が分かるまではあまりその再生能力を使わせたくないと思うのである。
それももしかしたら過保護な考えなのかもしれないが、ヴラドにはこの世界の知識が無い。考えすぎくらいが丁度いいとも言えた。

『そうか……無事で本当に安心したよ……』

触腕を増やし、まるで抱き締めるように背に伸ばし、トン、トンっと背中を叩く。
エルもされるがままとなり、おずおずとその小さくか細い腕でヴラドに抱きつく。
エルのように温かな体温をヴラドは持っていないが、それでもそうされるだけでエルは幸せだった。

「パパ……」

再開の今だけ――その瞬間だけはフォレストアントも、監視者も、今の状況すら危険を承知で思考から排し、二人はそれから数分と言う短くも永遠に思える時を抱擁に費やした――――

律儀と言うか、どう言う訳かエルとの再開を黙って見守っていたフォレストアント達が、抱擁の終わりを皮切りにして巨大な地下へ続く穴に進んでいく。
ヴラドも四足形態のまま、エルの前に出る形でそのまるで地獄にでも繋がっていそうな巨大な穴へと進みだす。

進みだして直ぐに香って来たのは“死臭”であった。信じられない量の生餌や死体を運び込んだ結果だろう。

腐乱した肉の臭いが辺りから漂い、それも奥に行くほど強まっていくので、エルがかなり嫌そうな顔をする。

ヴラドは一応感覚として臭いを察知することは出来るが、それを臭いとして感知することはない。

ヘビが視力の変わりに熱センサーを搭載しているのと近いだろうか。それが死臭だと判断は出来るが、臭いそのものを感じる事は出来ない。

だからエルがどれだけ凄まじい悪臭に苛まれているかヴラドにはイマイチ理解出来なかった。それでも生前の経験から死体が腐乱する臭いを嗅いだ事もあるため、その不快さは理解できる。

「パパぁ……ここ、くちゃいよぉ……エル、かえりたい……」

更に地下へ、地下へ、入り組み、分かれ道が無数にあるのに迷わずフォレストアント達が進む中、エルがとうとう泣き言を漏らす。

先程から鼻を摘んでいるようだが、どうやらさほど効果は期待できなかったらしい。

さて、どうしたものかと考え、ふと内部に仕舞っているリアンを意識する。

『そうだな。リアンも居るが、エルも私の中に入るか？　少なくとも無臭の空間だ』

「は、はいる！　パパのなかにエルはいる！　ここくちゃくてあたまがおかしくなりそう……」

一も二もなく返事を返すエルに内心で苦笑しつつ、ヴラドが触手でエルを絡め取りそのまま肉体に引きずり込む。

エルが一瞬粘液質な液体の感覚を味わった後、リアンと同じく泡の中に閉じ込められていた。
と言っても強度はそう高くは無く、エルがパンチでも繰り出せばあっさり脱出出来るだろう。

「ありがとぉパパ。えへへ、パパのなかにはいるのはすごくひさしぶりだね」
『核だけは傷つけないよう気をつけてくれ』
「うん！」

そう言って膝の上にリアンを乗せてエルがニコニコと笑みを浮かべる。
リアンも状況を察してか、特に嫌がる素振りを見せず大人しくしているようであった。
先程までは悪臭に顔色を悪くしていたと言うのに、エルも中々の変わり早さである。

『フォレストアントが何か行動を起こすと思ったが、そう言う事もなかった。さて、一体何が目的なのか検討が付かない』
「うん……それに、おそとのいきものもおそってこなかったよ」
『ああ、その点も少し妙だった。私は長いことエルと居るから耐性も付きつつあるし、夢の通りにはならないで済みそうだが。少なくともフォレストアント達は衝動を感じている筈なんだ。それなのにこうも至近距離で本能に逆らう事が出来るなんて思えない』
「ユメ？」

ヴラドの発した言葉にエルが泡の中で小首を傾げる。リアンも真似して首を傾げるのがなんとも愛らしい。
流石にエルを無残に血祭りに上げ、更には己が糧とした夢を見たなどとは言えない為、心苦しいがヴラドは嘘を吐くことにした。

『いや、ちょっと縁起の悪い夢を昔に見てね。それを思い出しただけだ』
「ふーん」
「ニャー？」

エルはどうでもよさそうに、リアンは何の話しか理解出来なさそうに口にする。

今がいわゆる捕虜にも近い状況だと言うのに、なんとも柔らかな空気がヴラド達を包んでいた。

流石にこれは不味いと、周囲の警戒に意識を切り替える。そしてそれから更に一時間と少し、幸い明かり苔らしきもので明るさは保たれている中を黙々と進み、とうとう恐らくは終点だろうと思われる前にヴラド達はたどり着いた。

フォレストアント達がまるでモーゼの十戒のように割れ、先に広がる広大な空間への道を作り出す。

ヴラドが一歩進むたびに後ろの蟻達が通路を塞ぎ、退路は必然と消えていく。

重苦しい空気と死臭が満たす中、懸命に生きる目を模索しつつヴラドがとうとう二、三百メートル規模の空間の中央へと至る。

そしてそれが“視界”へと映りこむ。体長恐らく十五メートルクラス。腹部は通常の蟻とは違い大きく長い。

背中には昆虫特有の翼らしきものがあり。その固体が飛行を可能としていることを示している。

放つ威圧感は出会った生物の中でも明らかに群を抜いての最高レベル。感じる衝動も凄まじく、大分衝動を自ら抑えたりする術を身に付け始めたヴラドにもかなりキツイレベルだ。

間違いようもない。周囲には一回り体格の良い戦闘用の蟻を侍らせたそのまさしく別格の存在者こそ、このフォレストアントのコロニーを支配する“女王”。

この樹海でも間違いなく上位に位置する強者。今のヴラドではどう足掻いても勝つ事の出来ない存在が昆虫独特の、無機質で感情を感じさせない瞳でヴラドを見詰めている。

ヴラドの中でリアンが威嚇の声をだし、エルは今の自分より明らかな格上の存在にどうすればいいのか顔を歪めている。

何か違和感をヴラドは覚えるが、少しの警戒も油断も許せない相手に全力で集中することで一杯一杯の為に、そこまで意識が回らない。

……五分、十分、ジリジリとヴラドの精神が削られていく。そして十五分経過し、流石のヴラドも内心どう言う事だ？　と疑問符が沸く。

相手がどう言う意図の下、ヴラド達をここに誘導したかは分からないが、沈黙を保つ理由が分からない。

相変わらず女王蟻は微動だにせずヴラドを眺めているだけだ。こちらの精神を削りきる作戦かと思考しつつ、更に五分の時間が経過する。

四面楚歌の中で限界の精神を保つのは非常に苦しい。肉体が人であれば汗をかいていただろう。

こうなれば根競べだと内心で決意した瞬間、女王蟻が急に動きを見せる。その肉体がよろりと前に進んだかと思うと、急激な膨張を起こし、まるで膨らんだ風船の末路のように“破裂”した。

『ハ？』

「え？」

「にゃ？」

理解不能の事態に思考が停止する二人と一匹。ボタボタと肉片が降り注ぎヴラドにぶつかるが、停止した思考を戻すには至らない。

周囲の土を女王の体液と肉片で染め、それでも後ろのフォレストアント達は動く気配を見せない。どの固体もまるで抜け殻のように意思を感じさせなかった。

先程までは確かに強烈な存在感を放っていた強者が呆気なく。そう、呆気なく前触れもなく消え去った。

それも破裂などと言う訳の分からないことでだ。あまりにも予想外の事態の中、麻痺する思考を懸命に動かそうとヴラドの無意識が働き始めた瞬間――――

「お兄様！！」

女王の居た奥。いや、正確にはその更に地下から染み出すように全裸の少女が飛び出して来て、そのままヴラドに抱きついた。

まるで世界が凍りついたような錯覚さえ覚える中、流石のヴラドも一体何が起こっているのか説明してくれと、内心で信じてもいない神に愚痴を零すくらいには異常な事態であった。

第九話（加筆版）

「どうか致しましたかお兄様？　それとも私（わたくし）のニホンゴが間違っているのよさ？」
「パパにさわらないでっ！」
「フゥーッ！」

ヴラドが硬直していると、逸早くエルとリアンが中から抜け出しヴラドに抱きついてきた少女を引き剥がし、それぞれ敵意を剥き出しにする。
同時に少女が口にした情報がヴラドを更に混乱に叩き落す。

（いや、それより日本語と言ったか、今？）

茫然自失となっていた耳に届いたありえべからざる情報に無意識で反応するが、それもすぐに少女の言葉でかき乱されてしまう。

「別に貴女のお父様を取るつもりはないのだわ。ただ、このお方、ヴラド＝ツェペシュは今日から私（わたくし）のお兄様にもなるのだわさ」

そう言ってやや語尾が可笑しい気がするものの、随分と流暢な日本で喋りながらエルの本気雑じりの一撃を片手で楽々といなす少女。
リアンに至っては懸命に爪と牙をその滑らかで白い肌に突き立てようとするが、何か見えない壁でもあるかのように、少女の肌数ミリ前より先に爪も牙も進める事が出来ない。
エルもむきになっているのかヴラドから離れると、そのまま両手両足、ヴラドから学んでいる素手による基本的な格闘術を駆使するも、これまた容易く動きの基点を潰され行動を制御されてしまう。

確かに数年足らず、それこそ遊び混じりとは言え、大振りな一撃で視線を集め、狭まった視界から死角を突き、消えるように接近、そこから素早い押し出し、あるいは重心を見極めた体勢を崩す一撃。

それらをあっさり返すのはしっかりとした技術を身に着けていなければ難しい。あるいはそれを可能とするだけの圧倒的身体能力の差か……

年齢は恐らくエルより確実に上だろう。見た目だけで判断すれば年の頃十四、五歳くらいだろうか、少なくともかなりの実力者には違いない。

「鬱陶しい生き物だわね。焼いて食べてしまいますわよ？」

「フニャッ！？」

見えない壁にもめげずに爪を突き立て、牙で噛み付こうと奮闘していたリアンがあっさり首筋を掴まれ、少女が発した恐ろしい言葉に一瞬にして尻尾をだらりと力無く下げる。

「確か、エル……であっているのだわさ？　そう邪険にしないで欲しいのよ。私に敵対する意思はないのですから。それどころか、お兄様のお役に立てること間違いなしなのよ？」

ヴラドの役に立つ、敵対の意思はない。と言う二つの言葉にエルの拳が下がる。

まだ完全に信用した風でもない証拠に、その瞳にはありありと敵意が浮かんでいるが、とりあえずは話しを聞く気にはなったらしい。

そこにきてようやくヴラドも己の醜態から舞い戻る。無理も無い、いくらこの世界に来て人ならざる者となったとしても、年頃の少女がいきなり破裂した蟻の下から水が染み出すように登場し、なおか

つ全裸でお兄様発言である。
精神的な訓練を積んでいる身とは言え、あまりにも予想外。インパクトとも強すぎであった。そもそも訓練に関しても大半が苦痛に対するものであったのだから、致し方ないと言えた。
時間にして数分。少女がヴラドを殺す気であれば、とうに消滅させられていただろう。
少なくとも見た目で実力の判断は無謀であるし、こんな場所にいる時点で弱者である筈もない。現に少女はあっさりエルを手玉にとって見せたのだから。
聞くことは山ほどもあるが、取り敢えずとるべき言葉は、とヴラドは思念を飛ばす事にする。

『エル。とりあえず話しを聞こう。リアンもあまり無茶はするな。そして君――――』

とそこで少女の名を知らない事に気づく。一瞬の逡巡の後、再びヴラドは口を開いた。

『すまない、よければ名を教えてはくれないか。私の名前はヴラド＝ツェペシュ、一度名を捨て、新たな人生を歩むことを決めた亡霊だ。この娘は私の子で、名をヴラド＝エルジェーベトと言う。こっちの子猫も私の家族で、名を同じくヴラド＝リツゥアノーンと言う』

そうヴラドが切り出すと、少女が「ふふ、これはご丁寧に有り難う御座いますわ」と、見た目にそぐわない艶やかな笑みで全裸のまま、無い筈のスカートを幻視するような、それは見事な礼をしてみせる。
堂に入ったその仕草は短い期間で身に付くようなものでは決してない。ますます少女の正体があやふやとなる思いだ。

そのまま下から覗き込むようにヴラドを見つめる瞳は深い緑。まるで大森林を押し込めたような輝きである。

「私（わたくし）の名前はロザリンド、ただのロザリンドだわさ。そして、今日からはヴラド＝ロザリンドとなる者なのだわ。どうぞ、串刺し公のお兄様におかれましては是非、ロザリーと呼んで下さいまし」

その言葉からは少なくともヴラドでは嘘を感じ取れない。常識など通用しない異世界だ、ヴラドの知らない方法で嘘を誤魔化している可能性もある。

が、どうもこれはヴラドの感ではあったが嘘はやはり付いていないと思えた。本気でヴラドを兄と慕おうと言う気持ちだって伝わってきている。

少なくともそれで今までの言が嘘であるのならば、ヴラドの世界で即大女優の仲間入りは間違いないだろう。直ぐに返事をしない為か、よく見ればその瞳が僅かな不安に揺れている。

エルより年上とは言え、その容姿はどうみても少女と呼ぶべきものだ。そんな娘が上目遣いで内心どうあれ、不安気な表情を見せている。

ヴラドは何かと言うと子供が好きだ。それは子を育てた経験によるものだが、父としての役割を気に入っている為でもある。

『先に一つだけ聞いておく。後の質問はすべて後回しだ。ロザリンド、君は私達を身命に誓って害しないと誓えるか？』

内心で溜息を零し、たっぷり一分以上の間を置いてようやくヴラドは思念を発した。

ここで必要なのは身の安全である。すべてはそれを確保した後に聞けばいい。この問いも真実相手次第であることから、効力に期待はできないが、それでもないよりはマシだと口にする。

かなり譲歩した内容だ。相手の実力の底が不明な為、この程度しか急には用意出来なかったと言い換えてもいい。

ヴラドのロザリンドと言う、あえて愛称を拒否した呼称にほんの僅か、それこそヴラドですらぎりぎり気づけるかどうかの一瞬、酷く傷ついた表情を見せ、即座に元の薄っすら笑みを浮かべた表情に戻ると一呼吸置き、同時に一度閉じた瞳を見開きロザリンドは口を開いた。

「お兄様。私は本気なのだわさ。私こと、ロザリンドは――――その刻みし“真の名”に掛けて、この場に居る二名と一匹に対し如何なる害も及ぼさないと誓うのよさっ！！」

声高らかに響き渡るロザリンドの言葉。しかし、それは言葉以上の意味で効果を発揮した。

魔法と呼ばれる、未だヴラドには未知の領域たる世界。その中でも真名と呼ばれる、魂に刻まれた名を使った最高レベルの契約。

それを用いた誓約の魔法を使用したのだ。ヴラドがロザリンドの身より放たれた、その新緑色の光に咄嗟に警戒を示す中、光はロザリンドを中心とした数メートル規模の魔法陣と化し、幾何学模様を形成する。

陣事態が淡く黄緑色に輝く。それはヴラドが初めてこの世界で見た“魔法”であった。

光そのものが幾何学模様を描いていき、陣が完成したのを見て、どことなくロザリンドが緊張した面立ちで口を開く。

「さぁお兄様。不安かもしれませんが、どうか一滴の体液を私にお与え下さいまし。それで“誓約”の魔法は成就し、私ことロザリンドは、一切の危害を与える事が出来なくなるのよさ。これを破れば身の破滅を齎す世界最古にして最高の契約魔法なのだわ。例えお兄様が私にいかなる危害を加えようとも、この魔法の完成を持って、私はお兄様に抵抗すら許されない身となるのだわさ」

そう言ってそっと手のひらをヴラドに差し出すロザリンド。よく見ればその手は小さく震えている。

それはそうだろう。彼女はこの魔法により、身を守ることはともかく、一切の反撃を許されない身となるのだ。

言い換えればヴラド達に命を明け渡すにも等しい所業だ。どうしてそこまでするのか、それはロザリンドならぬ身たるヴラドには計り知れない事である。

ヴラドは迷う。この魔法が本当に言った通りの内容である保証はない。が、やはりロザリンドが嘘を言っているようにも見えなかった。

多少の嘘を見抜く訓練は積んでいたが、それ以上にロザリンドは感情の揺れがあまりに自然すぎるのだ。他にも感としかいいようのない部分、こうして未だ襲ってはこない事、上げれば幾つも挙がるのだが……

その顔はやや薄暗い空間で判別し難いが、明らかに青褪めているように見える。魔法を知らないヴラドですら、この誓約が一歩間違えれば死を招く程恐ろしいものだと理解出来るのだ。

行使者たるロザリンドからすれば、きっとなお恐ろしい恐怖だろう。もしかしたら使用するだけでも何かデメリットが発生するのかもしれない。

触手を伸ばそうとして引っ込める。それを幾度も繰り返す。エルもリアンも無言だ。その瞳に映るのは家長たるヴラドの意思に従うと言う無言の光。

だからこそ、その期待がヴラドに容易な選択を許してくれない。ヴラド一人であれば、これだけの本気を見せた少女に納得し、誓約を止めただろう。

だが今のヴラドは家長なのだ。一つの判断が下手をすると、己以外の命まで冥府に引き摺り込みかねない。

遠い昔、子の責任は親の責任だと教官が重い罰則を被ってくれたことがあった。同じく、紛争地域にて瀕死の子を同じ子として迎え入れてくれたこともあった。

ならば、今のヴラドに出来る事とは一体何か？　少なくとも教官を敬い、師と、親と仰いだ己に出来る事とは――――

ヴラドは家族と言う絆を大切にしている。その結果が彼の人としての最後の幸せな老衰だろう。家族全てに見守られ、温かな中で死去した彼はその時代では酷く稀有な最後と言えた。

切っ掛けはとても些細なことではあったが、ヴラドは教官との出会い以来、自身の命と等しいくらい家族を大事としてきた。

だからこそ己の意思と言うべきものと、家族と言う言葉がぶつかり主張を繰り返す。一体どの道こそが最善であるのかと……

「パパ」

「ニャー」

幾度も迷うヴラドの背から、その家族の声が届く。信頼に満ちた、

まるでヴラドなら当たり前のように全てを任せられると、そう言われたかのような信頼感。
それを機に、ヴラドが腹を括る。答えは最初から出ているではないか。ならば、ここで取るべき選択肢もまた既に決まりきっている。
そして、ヴラドは先程までの迷いを感じさせない雰囲気で触手を動かした――――

――――伸ばされた触手はロザリンドの手に収まり、そのまま先端からぽたりとその体液が零れ落ちる。
ヴラドに表情はないものの、その気配から尋常ならざる決意が窺えた。それは一体いかなる決意なのか、ロザリンドには分からない。

「いい……のよさ？」

思わずと、そう呟いたロザリンドの声は小さく震えており、端には深い期待と脅え、そして安堵の感情が揺らめいている。
信じたい。けれど裏切られるのではないか。自分の精一杯は伝わったのだろうか……
渦巻く感情は瞳にしっかりと現れ、だからこそヴラドは言葉を口にする。感情は時に言葉にしなければ伝わらないのだ。

『私のみの本心で言えば、この誓約などなしに君を迎え入れたい。しかし私はこのヴラドの家長なのだ。迂闊な判断はそう取ることは出来ない。それでも私はこの誓約が本物であると信じてみようと思う。なぜなら、君は私の家族となるのだから。それなら家族を信じるのは当然だ。なんら問題はないだろう？』
「……ぁ…っ…」

ヴラドの言葉にロザリンドが何か口にしようとするが、しかし漏れ出るのは嗚咽のみであった。

綺麗な深い森林を讃えたような色合いの瞳からは大粒の涙が零れ落ち、その白皙の肌を静かに伝い地面に落下していく。

エルとリアンの安全を最大限考慮するのであれば、この案は正直あまり褒めたものではない。

それでも、ヴラドは少女の願いを見捨てる事は出来なかった。今確かに、ヴラドは在りし日の教官の気持ちを理解していることだろう。

血よりなお強固な絆、それは家族と言う。誰をも疑うのは容易いことだ。それを踏み越え、時に相手を信じることもまた重要な意味を持つ。それは彼がアメリカで教官から得た価値観でもある。

顔を俯かせ、静かに嗚咽を漏らす少女を黙って見守るヴラド達。

エルもリアンも先までの反発が嘘のようだ。

「私(わたくし)を信じてくれて有り難うなのよ……ロザリンドの命、お兄様に預けるのだわ。さぁ、ここに最も古く強力な誓約を！　魂に刻まれた真の名と、一族の長足る者の一部を持ってここにその成就を！！」

暫くし、目元を少しだけ赤くした少女が面を上げキリっとした凛々しい表情で高らかに宣言する。

同時魔法陣が回転し、そのまま新緑色の発光を一際高めては周囲を照らし出す。

発光が数秒持続した後、緩やかに収束し、魔法陣は煙が掻き消えるようにして霧散する。

するとすっ、と、その白く細いロザリンドの右腕がヴラドの前に

差し出される。
何事かと視線を腕に映せば、そこには先程までは見当たらなかった赤いラインが手首に記されていた。
丁度手首周りを一周し、円となっているライン。それをエル達にも見えるよう腕を掲げると、ロザリンドは口を開く。

「これは誓約の証なのよさ。この誓約は私に消滅が訪れるその日まで解けることはないのだわ。これがロザリンドの差し出せる誠意。だから……その――ヴラドお兄様と、そう呼んでもよろしいですか？」

ちょっと上目遣いでヴラドを覗き込むロザリンド。声音は随分としっかりしているが、その実その裏には不安が見え隠れしている。
一体どうしてこうも不安となるのか、ロザリンドの過去に関係あるのか、それは分からない。それも何れ彼女が語ってくれるだろう。
自身に表情が無いのを恨みつつ、出来るだけ柔らかな響きを意識してヴラドは思念を放つ。

『ああ……確かに。ロザリー、君の誠意を私は受け取った。ようこそ、私の――――ヴラド家に。今日から君はヴラド＝ロザリンドであり、私の妹だ……ただ一つ、私からも頼み毎がある――』

「お兄様、本当によろしかったのよさ？　お兄様だけではなく、エルにリアンまで巻き込むだなんて……本当に後悔しないのだわ？」

燦々と日の光が差し込む“大草原”の途中、今まで無言であったロザリーが口にする。

心配しているのはヴラド達だと言うのに、その声音からはまるで自分のことの様に心配しているようにも思えた。

「パパがきめたことだもん。エルはいつだってパパがいちばんだからだいじょうぶだよ」

「なぁー」

ヴラドの触手を掴み、もう一方でエルとは違い“黒白のゴシックドレス”を身に着けたロザリーの手を握り、にこやかな笑みを浮かべる。

その姿は在りし日の、まだヴラドが若かった頃、妻とヴラドの間に子を挟んで経験した光景の焼き増しのようであった。

その酷く懐かしい光景に、一抹の郷愁の念と。それを大きく上回る思いがヴラドを包み込む。己の選択肢はきっと間違っていなかったと、そう証明してくれている気がするのだ。

『だ、そうだ。私としても心苦しかったが、こう言う時こそ家族は一致団結するべきだろう？』

「でも……同じ誓約を全員がするなんて……」

『なに、家族は家族を傷つけない。ならば、この誓約に一体どれほどの枷があろうか。家族となった瞬間から、誓約などなくとも、見えない誓約は適っている。それに、家族一人に肩身の狭い思いをさせるのは、家長としては見過ごせないだろう？』

そう言って最早癖となりつつ頭を撫でる行為をロザリーにも行う。

ロザリーが口にした通り、あの後ヴラドは同じ誓約。
つまりはロザリーを一切害せないようにする誓約を行ったのだ。
証拠にその核には赤いラインが走っている。
見ればエルも左手首に、リアンも右前足に同じものがあった。術は無論ヴラド達には使えないのでロザリーが行使したのだが、この術は害すると言う項目には当て嵌まらないらしい。
ロザリー曰く、害しようとすると、まず警告のように魂に直接作用する激しい痛みが走るとのことだ。
実はかなり特殊で高度な術らしく、その判別の精度も相応に高いのである。

「お、お兄様！　私こう見えてもう三千歳近いのだわさ!?　こ、子供扱いはよして欲しいのよさ！」
『精神と年齢に関係はない。それに私は兄だ、ならば何も問題はないだろう』
「それはそうだけれども……でも、恥ずかしいのだわ」

そう言ってほんのり頬を染めるロザリー。曰く、それこそこの世界に生を受けて一度も頭を撫でられた事がないらしい。
そして、ロザリーは本人の自称だが既に封印されていた期間を含めると三千歳近いと言う。
封印。彼女はあの樹海の最深奥の地下、それこそ女王蟻のいた場所より更に下で封印されていた。
当時、魔神と言うこの世界でも上位に位置する力のヒエラルキーに属していた彼女はその力に溺れ、この世界で好き勝手してきた。
そして結果的にとある勢力に目を付けられ封印されてしまう。
そうして今回の一件までおよそ五百年以上を暗い地下で過ごす事となる。眠るような封印ではない。それは意識のある、身動きの出

来ない拷問のような封印だ。
その孤独は一体どれだけのものであったのだろうか。ロザリーならぬ身であるヴラドには知る事は出来ない。

「エルはパパにあたまなでてもらうのすきだよ？」
「にゃー！」
『だ、そうだ。そのうち羞恥心も消える、何も問題は無い』

リアンにまで鳴かれ、とうとうロザリーが白旗状態となる。恥ずかしいと言うが、それは別に撫でられるのが嫌いな訳ではないのだろう。
事実、ヴラドに撫でられているロザリーの顔には心温まるような笑みが浮かんでいる。
ロザリーが空を見上げる。今日は晴れで、時刻も昼過ぎ。当然空は澄み渡る青、そして温かな気温。だが、ロザリーにとって数百年ぶりの空気の味であり、青であり、風であった。
少しずつ自力で封印を破り、ちょっとした能力を行使出来るだけの余力が出来たのはヴラドがこの世界に来た僅か後。
そしてヴラドの行動をひっそり魔法により眺めていたロザリーにとって、エルとヴラドの関係は酷く眩しいものに見えたのだ。
更に言えばその扱う言語も酷く懐かしく、思わず夢を使い語りかけてしまったのは許して欲しいとロザリーは思う。
それでもこうして結果的には大地の下で、こうして歩いていける。懐かしい言語は既に忘却した筈の古い記憶を疼かせる。溢れる郷愁、言い知れぬ感情の高鳴り。

気付けば封印から近い場所に巣を作っていたフォレストアントの

女王蟻を操り、それを通じて他の蟻を支配し、ヴラド達を封印の場に最も近い巣の最奥へと導いた。

フォレストアントも女王を介した為か、命令に齟齬は発生するし、ロザリーも実はかなり焦っていたのだが、結果よければすべてよしとは良く言ったものだ。

自我の薄い存在を支配するくらいは可能であったが、逆に直接ヴラド達に思念を飛ばすのは難しかった。それでも何度か繰り返してみたのだが、結局まともに通じたのはフォレストアントが暴走した時くらいである。

感情の波は一時的に力に変化を与える効力がある。間近でヴラド達を感じれれば、高鳴る感情もあいまって封印から抜け出せる……

そう思っての行動は的中し、あまつさえロザリーは三千年の時の中でついぞ得られなかった家族を手に入れる。

それは予想通りとても温かく、ロザリーの心を癒してくれた。本当は口にしたい言葉がある。

でも、それを言うには少しロザリーのコミュニケーション能力は欠如していて、羞恥心が邪魔をする。

だからヴラドには聞こえないと知りつつ、ロザリーは心の内で口にした。

（ありがとう）

と。

第九話（加筆版）（後書き）

後書き

加筆作業終わった！　まぁ、冗長と言うなの作業でしたが、そこは次回に活かすとします。
加筆量はざっと二万字……ぉぉ、普通に六話分くらいの量ですねｗやっと続き書けます。次はまたちょい展開がある意味様変わり、ある意味ようやくか！　を迎えます。

それでは、感想や評価、お気に入りに誤字脱字報告、心よりお待ちしております＾＾

第十話

『さて、取り敢えず樹海を出たのはいいが、これからどうする？』

実は樹海を出たのは強力な種に襲われるのを懸念した結果である。と、言うのも、どうやらロザリーの能力は現在最盛期の二割にも満たない、精々が一割出せれば良いところらしいのだ。

それでも樹海の生物相手であれば、引けを取らないらしいが、ヴラド達はそうもいかないだろう。

そもそも弱体化した原因も長い期間封印されていたせいであり、その封印を破るのにかなりの無茶をした結果でもあるらしい。

かつては魔神級の実力者としてそれなりに名を轟かせもしたようだが、その力も今では盛者必衰の理の如くである。

それでもあの女王蟻はおろかこの一帯の強力な存在者を凌ぐ力を未だ有していると言うのだから、最盛期の実力が一体どれ程であったのか窺い知る事が出来よう。

「エル、じゅかいとそうげんしかしらないよ？」

「ニャ？」

別にヴラドはエルとリアンに聞いた訳ではなかったのだが、律儀にも返答を返してくれる。

何となくそんな一人と一匹の頭を触腕を伸ばし、頭をぽんぽんと撫でてやる。エルには素直に育って欲しいものであった。

一々身長に合わせる必要もなく撫でられると言う点では、この不定形の肉体も中々便利なものだ。

「それなら私に考えがあるのよさ。お兄様の目標は取り敢えず魔神級の力を手に入れる、と言うことでいいのだわ？」

エルを挟んで左側に位置するロザリンドがそう訊ねて来るが、ふとそこでそもそもの疑問点を思い出した。

まだまだ聞きたい事は多いが、その中でもこれは取り分け優先度が高いと言える。

『魔神、と言うものが何なのかも知りたいのだが。ロザリー、君はどうして“日本語”を喋れるんだ？』

そう、彼女は今まで語尾がやや変ではあるものの、流暢な日本語を口にしていた。落ち着いてきた今、それを聞いておくのも悪くないだろう。

ヴラドの言葉にロザリーがまっていましたと言わんばかりの笑顔を向けてくる。

「やっと聞いてくれたのだわ。でも、お兄様になら心当たりがあるのではないのだわさ」

『と言うことは……』

ロザリーの口ぶりからやはりと言う思いが心を占める。流石にこの世界の共通語なりなんなりが、日本語と言うのはありえない。

仮に日本語であったとしても、ロザリーが口にした“私のニホンゴ”と言う言葉が出るのはありえないのだ。

それは日本と言う存在を知らない限り出てくる筈のない単語である。本来ならありえない事だが、ヴラドは既にそれが決してありえべからざる事などではない事を知っていた。

何故なら、己自身がその答えそのものだからだ。つまり、彼女―

―ロザリーも、ヴラドと同じく外来者であり、かつ日本を知る地球人であれば日本語を知っていても可笑しくはない。
　ヴラドのそんな意味を含めた思念に、にやりと口角を持ち上げロザリーはヴラドの続きを話すように口を開く。

「そっ、私こととロザリンドの“半身”は二ＸＸＸ年生まれの日本人なのよさ」
『半身？』
「ええ、ヴラドお兄様も本来なら私と同じになっていた可能性もあるのだわ。ただ、お兄様の場合は意思も魂も弱い生物に“憑依”してしまったから、完全に肉体を奪ってしまっただけなのだわさ。反対、私の場合、元が高位の“ロザリンド”と言う、単一種族（オールインワン）であった為に、その精神と魂が融合してしまいどちらつかずの存在になったのだわ」
「ち、きゅう？　ひょーい？」
「にゃー？」

　エルとリアンが聞きなれない単語に疑問符を頭上に浮かべているが、ヴラドはそれに答えてやる余裕はなかった。
　ロザリーの口にした事はつまり、一歩間違えていれば、ヴラドと言う意思がなくなっていた可能性を示唆している。
　それは途轍もない恐怖だ。己ではない己。それは既に死に等しいとヴラドは思っている。強力な種に憑依すれば自我を崩壊させかねないと言うのなら、底辺であった生物に憑依出来たのはある意味幸運なのかもしれない。
　だが、どうして憑依と言う言葉で確定しているのか疑問が浮かぶ。可能性としては、この星の一生物として“生まれる”と言う選択肢があっても可笑しくはない。

『ロザリーが私と同じ同郷の者だというのは分かった』
「言った通り、半分だけなのよさ。家族が居なかったのは、地球の私ではなく、この世界の私なのだわ。お兄様がお兄様なのも、地球から来た私に兄が居たからなのだわさ」

そう口にするロザリーの瞳には薄っすらと懐かしみの感情が浮かんでいる。

『そうか……だが、どうして私が憑依だと思ったんだ』
「それを話すと少し長くなるのだわ。それでもいいのよさ？」

黙ってそれにヴラドは頷く。それはもしかしたら、ヴラドがこの世界にやってきた答えに繋がっているかもしれないのだから。

「お兄様、お兄様は進化の最果てとは何か考えた事はあるのよさ？」

行き成りの質問に思わずどういう意味だと自問してしまう。憑依と進化、そこに一体なんの関係があるのか、少なくともヴラドには皆目検討も付かない。

とりあえず素直に今の考えを口にしてみることにする。

『いや、そもそも人は長い時を掛けて進化してきたんだ。生前はそんな事考えもしなかった』
「でも、今は違うのだわ」

まるでヴラドの考えを予想しているかのようなロザリーの言葉に、黙ってヴラドは頷く。

『ああ。今の私の成長、それは最早成長と言う枠で括れるレベルではない。言い換えればそれこそ“進化”と言ってもいいだろう。と言っても、その果てなど考えた事はないが』

「幸い私にはたっぷりとこの世界に来てから時間があったのだわ。だから考えた……過程は省くけれど、結果分かったのは、進化の果ての一つが“星”であると言うことなのだわさ」

『……は？』

飛び出た結論にヴラドが思わず間の抜けた思念を零す。いきなり星と来たのだ。

進化の果てが星。それは科学の世界で生まれたヴラドからすれば何を馬鹿な……と、そう一笑にふすような内容であった。

だがロザリーの顔は至極真面目である。ヴラドに嘘を付いている様子は無いし、からかっているような気配もない。

それでは仮に進化の終着点の一つ。一つと言う言い方も気になるが、とにかくそれが星であったとして、いかなる理由で星などになるのか、それこそヴラドの想像外であった。

表情筋など、ましては顔すらないのだが、どうも気配で考え込むのを察知したのかロザリーがくすりと一度笑ってから口を開いた。

「別に意地悪をするつもりではないのよさ。そもそも、この結論自体、地球の知識があったからこそ閃いたことなのだわ。とにかくまた過程を省くけれど、星々の一握り、特に生命を抱く星の多くは進化の果てで星となることを選んだ“者達”なのだわさ。同時、星になると自我を失うのだけれど、それは完全に消失する訳ではないのだわ。最低限度残った意思……地球でも様々な呼び方で言われているのよさ。その意思の強さにも強弱はあるのかもしれないけど。そうした意思の下、何らかの思惑で“私達”は呼び寄せられたのだわ』

確かに、人。いや、知的生命体の深層心理意識下には意思があるとか、星には意思があると言われているが、それが元は“生命体”であったからだとは、あまりにあまりな飛躍であった。

だが、確かに仮にそれが正しいとすれば確かに星に意思があっても不思議ではないだろう。星に至る経緯までは流石に不明ではあるが……

『思惑とはなんだ？　そもそもその言い方だと、私達以外にも複数来訪者が居る事にならないか』

「そこは私にも分からないのだわさ、居るかもしれないし、居ないかもしれない。この世界に来たのだって星の気まぐれなのかもしれないし、何か大きな意味があるのかもしれないのよさ……ただ、この世界の歴史や古い遺跡などを調べていくか、星に直接意思を伝える術を手に入れればそれも分かるかもしれないのだわ。星に意思があると知ったのも、そういった遺跡などを調べて分かったことなのよさ」

随分とスケールの大きな話だと思いつつ、とりあえず己がこの世界に来たのは偶然ではなさそうだと分かっただけでも収穫だと思う事にする。

それにロザリー以外にももしかしたら同じく地球、あるいは別の世界からの来訪者が居るかもしれないと言う前知識もそれなりに有用だ。

だが取り敢えずは力を手に入れる事に直接作用する訳でもなさそうだと、暫くは先送りにしてもいいだろうと同時に判断する。

『それでは、魔神に関して――――ッ！？　なん…だ…これ、は……』

魔神に関して聞こうとした瞬間、まるで視界がぐらりと揺れるような酩酊感がヴラドを襲う。
熱の無い肉体が、急激に温度を上昇させる。痛みはない。だが、何とも言えない“高揚感”が身を包んでいる。

「随分と遅かったのだわ。続きは本当の“進化”の後でまたするのよさ、お兄様――」

ロザリーが何か口にしているが、それを聞き取る前にヴラドの意識は急に途絶える。
肉体はまるで一点に集まるように球状となり、表面はブクブクと高熱にあわ立っている。
その異常事態にエルとリアンが慌てて側に寄るが、それをロザリーの手が遮った。
キッ！　と睨み据えてくる鋭い眼光にも意にかいさずに口を開く。

「問題ないのだわさ。急激な“魂”の摂取の結果、ようやくその消化が終わって“変化”が始まったのよさ。お兄様の望んだ強者への一歩……それが始まったのだわ」
「パパ、だいじょうぶなの？」

エルの言葉に問題ないのだわと答え、好奇心を隠しきれない眼差しで繭のようにも思える球状のゲルに視線を戻す。

「お兄様は一体、どんな“進化”を選ばれるのか、楽しみなのだわさ――――」

第十話（後書き）

後書き

一部は後で小出しする予定だけど、とりあえず出しておきたい説明が多すぎて次も説明ターンになりそう……

ええはい、ひとえに作者の力量不足です、申し訳ありません。

とりあえずようやくヴラドもスライム卒業。

ロザリーはとっても便利、説明役の人。作者が楽したかったのです……

それでは、感想や評価、お気に入りに誤字脱字報告。

特に感想や評価は作者のモチベに多大な影響を及ぼすので、過剰摂取くらいの意気で与えてやって下さい。

では、次の更新でまた！

拍手での感想の場合、名前が入力されていれば活動報告で返事いたします。

無い場合はしません。あっても文末に返信不要で入れてくだされば返信いたしません。

第十一話

『ここは一体……私は、また夢を見ているのか？』

暗い場所である。周囲一帯僅か先を見通すことすら出来ない闇。ロザリーがあの声の夢を見せていた原因だと、未だ知らないヴラドは遂今回もそれだろうと勘違いをしていた。

『不思議な場所だ……寒々しい光景だと言うのに、どこか暖かく、そして懐かしい気がする』

ヴラドの言うとおり、そこはとても不思議な感覚を感じさせる場所であった。不安を掻き立てそうなくらいの闇。

それなのに逆に妙な安心感を覚えるのはどうしてなのか。まるで母の胎内で守られているようだと、覚えている筈もないたとえが浮かぶ。

ふと触手を伸ばす。ヴラドの命令に従い、一本の触腕は目の前で所在無さ気に揺れている。肉体はしっかり動くようであった。

『スポット、ライト……か？』

とりあえず移動して見ようと肉体を前に動かそうとした瞬間、ヴラドを中心に半径十数メートルの範囲が何所からか照らし出された。

やや黄色がかった光はどこかスポットライトを彷彿とさせる。そして次の瞬間、“無数の道”が突如スポットライトの境界線上に出現した。

『一体何が起こっているんだ？』

先程から疑問ばかり口にしているとヴラドも分かっているが、理解出来ない事ばかり起きているのだから仕方がないだろう。

突如出現した道。いや、それは道と呼んでいいのかすら疑問視せざるをえないものであった。なんせ、三百六十度全てを埋め尽くすかのように、幅もバラバラに出現したのである。

それこそ足元にだって出現しているのだ。まるで奇妙なトリックアートでも目視している気分であった。

ただ、道は道でも先の見えない道だ。ほんの一メートル程だけ、道の入り口に古臭い外灯が一本立てられており、それぞれの入り口を照らし出している。

他にも足元の道も見えない壁があるかのように落ちることもない。そう、真下にある為そのままでは落ちると表現すべきものなのだ。

逆に真上に見える道はどうやって進めばいいのかすら分からない。少なくとも、ヴラドは空を飛ぶ方法を会得した覚えはなかった。

『進もうにも、どの道もまるで壁があるように行けない、か……』

全てになるとそれこそ三桁にも上りそうな量の為、適当に近くから数十選んで進んでみようとしたのだが、どの道もスポットライトの境界線より先に進む事が出来なかった。

さてどうするか……そう思考の海に沈み掛けた瞬間、まるで天啓のように“理解”が宿る。

そう、それは宿ると言う表現が的確であった。本能だとか、知らない知識だとか、似ているようで違う感覚。

それは知識そのものが舞い降りてヴラドに宿ったと、そう表現するしかない奇妙な感覚であった。

何となく、それがロザリーの言っていた“この星の意思”に起因

するものだと言うのも同時に理解する。
そしてそれを切っ掛けにこれら全ての道が、先程まではただの不気味な道であったソレが、一つ一つが“進化の可能性”であるとも知った。
百を容易に超える量の道一つ一つが、様々な進化の可能性を秘めているのだ。進めばその可能性に即した進化が行われる。

『……始まりの地、可能性の道、か――――』

思わず呟いてしまった言葉にしかし、中々的を射ているとヴラドは思う。此処こそが、全ての生物の始まりの地であると。
本来は種と言う単位が、途方もない長い期間を経てこの無数の“可能性”から一つを選び取って進むのだ。
それを今ヴラドは一息の下に飛び越えようとしている。本来ではあり得ない、時を早回ししたような進化の道が目の前にある。
一つ一つが放つ可能性の輝きは眩しく、今までの成長などとは桁の違う変化を齎すのは間違いなかった。
そう言った視点を得ると、これら不気味な道がどれも何ものにも代えがたい財宝にも見えようと言うものだ。
幸い、この地での主観時間は現実と比べても途方もなく引き伸ばされていると言う事も、ヴラドは宿った知識から理解している。

どうすれば道を通れるようになるか、それもヴラドはしっかりと把握していた。ようは目指したい進化をしっかり思い描く必要があるのだ。
その思いから、ヴラドの可能性そのものたるこの無数の道の中に該当、もしくは近いものがあれば自然にその道が分かるのである。

参考にと幾つもの道を“読み取っていく”。軽く境界線に触れれば、その道が持ちえる“可能性”をヴラドに教えてくれた。

今のまま不定形生物として、しかし今までとは比べるまでもない汎用性を得て進化する道。

堅牢な甲殻を有する昆虫への進化。その果てにはまさに虫の王とも呼ぶべき終着点が蜃気楼のように見えた。

爬虫類のような存在へと進化する道。その中でも人型の蜥蜴（とかげ）からは、最終的に“竜”へと至る終着点が同じく陽炎のように垣間見える。

他にも同じ不定形生物でありながら、その身を自然の化身たる“炎”“風”“水”“地”などそのものとなる、まさに精霊と呼ぶべき存在へと至る道……

他にも無数の、道の分だけヴラドには可能性が存在していた。そして恐らく道の先には分岐が存在し、その分岐はまた別の道に繋がり、更なる広がりを得ていくのだろう。

最終的にどれだけの選択肢が存在するのか、ヴラドには全く持って検討すら付かなかった。それこそ千や万では終わらないのではないだろうか。

幾つもの可能性を垣間見て、ヴラドは今の己が目指すべき境地を考える。可能であれば人型になりたいと思っているし、それこそエルのように吸血鬼となれるのなら成りたい。

だが、長いこと不定形生物として生活してきた為か、別に人型でなくともいいと言う考えがあるのも事実であった。

暫く悩み――それなら、最終的にどっちか選べばいいのでは？

と言う結論に辿り着く。分岐の先で、人型になることも、あるいはそうでなくなる道も無数に交差しているだろうことからの結論だ。

それは半ば確信に近い考えであった。宿った知識にも近い事があ

ったのというのも原因である。

ふと、今も胸の内で輝きを放つ炎を思う。それは何れ何者にも屈しない強者へと至る為の篝火だ。

それを認識するとの同時、古い古い、何十年も昔の記憶からとある言葉が思い出された。

《信念は炎にも似ている。もし、その夢を諦めないのなら、どこまでもその炎を抱き突き進むがいい……》

《そして炎の勢いが強く、熱いほどその信念は力強い》

それはまるで衝撃のような思いをヴラドに与えた。“炎”それは原始的でありながら、強力な力だ。

人は有史以来炎と共にあった。言い換えれば、人は炎と共に歩んできたと言えるかもしれない。

弱点も確かにあるが、それすら圧倒的な熱量を有した炎であれば塵と還す事が出来るだろう。

（信念は炎にも似ている――）

胸の内で繰り返す。それはまるで魔法の言葉のようにヴラドの内に燃え盛る炎の勢いを加速させる。

それは天啓のようですらあった。言葉と同時、これほど己に見合った能力は他にはないと思える程に……

『信念は炎にも似ている……もし、その夢を諦めないのならば、どこまでもその炎を抱き突き進むがいい――』

そう自分自身で口にするのと同時――――全ての道が消え去った。

まるで崩れ去る回廊のように、選ばれなかった可能性が消えていく。

たった一本。しかし、ヴラドが己で選び取った最良の一本だけは

崩れ去ることもなく、むしろその存在を示すように目の前に残った。
その道を視界に映した瞬間、これしかないと思ってしまった。その思いに応えるように、暗がりに残った道が己を主張するように“燃え盛った”。
轟々と、真っ赤な炎と火花を撒き散らし、周囲の暗闇を照らし出しながら道は燃える。だが、ヴラドに恐怖心はなかった。
それはヴラドの信念を具象化した炎だからだ。ゆっくりと、だが確実に一歩を踏み出す。瞬間ヴラドを炎が包み込む。
熱い……炎の熱さではない。それは変革の熱である。急激な進化による膨大なエネルギーが生む熱がヴラドの信念を加速させる。
一歩進む度に炎は勢いを増し、肉体は凄まじい速度で進化していく。数歩進めば新たな外灯が出現し先を照らし出す。

本能と信念に従い突き進む。分岐が出現しても迷うことなく選び取っていく。今のヴラドには、己がどれを選び取り、切り捨てるべきかが見えていた。
進化とは退化でもある。選ぶと言うことは、切り捨てると言う事に他ならない。一歩進む度に確実に得、そして失っていく。
だが構わない。捨てると言うことは不要と言う事だ。選ぶと言うことは必要と言う事である。
それがたとえ何時の日か後悔する類のものであろうと、今、この時、少なくともヴラド自身は満足であった。
暗い暗い闇の中、今や天をも焦がさんばかりに燃え盛る道の中、ヴラドは終わりを感じ取る。
既に闇から赤に染まった視界の先に白が見えていた。それは間違いなく現実からの“光”である……

「そろそろ帰って来るのよさ……」

繭が急劇に膨張を開始し、まるで粘土細工のように形を変えていくのを横目にロザリーは口にする。

「パパ……」

「にゃー……」

ロザリーは何が飛び出すか好奇心に目を輝かせ、エルとリアンは不安と心配を目に黙って成り行きを見守る。

そして繭が何倍にも膨れ上がった瞬間、瞳を開けていられない程の“赤”が周囲に迸った。

紅蓮の炎は周囲を一瞬で飲み込み、轟々と天に向かってその猛威を振るう。反面ロザリーもエルもリアンも一切の熱を感じていなかった。

そんな不思議な現象の中で“ソレ”は現れる。最初に見えたのは前足であった。繭を突き破り、巨大な前足が地をしっかりと踏みしめる。

真っ白な美しい毛に覆われた足先からは轟々と炎が噴出し、現れた顔は“獅子”。その鬣は炎のそのものであり、メラメラと燃え盛っている。

後ろ足も前足と同様であり、尻尾の先端も炎が轟々と火花を散らしていた。

「炎の獅子……」

「パパ！」

「ニャーっ！！」

ロザリーが呆然と呟き、姿は変われども、感じる気配からそれがヴラドと理解したエルが歓喜の声を叫ぶ。

現れたヴラドは進化の先で炎を選び、肉体を獅子と化したのだ。その体長は優に三メートルを越し、その表情は百獣の王の名に恥じぬ威厳を纏っている。

炎は的確に敵を焼き尽くし、その爪牙は鋼鉄すらも切り裂き、その四肢の生む速度はまさに風となるだろう。

今、ヴラドは確かにこの瞬間、絶対強者への一歩を踏みしめた――

――

第十二話

広大な草原の中、一頭の雄雄しい獅子が大地を踏み締め歩いている。

全長は尾も含めれば四メートルは越すだろう。その獅子は紅蓮の炎を纏い、鬣（たてがみ）も同様に炎で形成されている。

尾の先だけは青白い炎が揺れているようだが、不思議な事にどの炎も一切の熱を持たない。正確に言えば、“敵対者”のみ熱を伝える特殊な炎であった。

牙は通常の獅子より長く、上唇から口下まで伸びている。その凛々しい顔立ちの中、真っ赤に染まった瞳がやたらと爛々に輝いていた。

まるで研いだ刀剣のように鋭い爪は、未だ振るわれていないながら、並みの鉄鎧如きならあっさりと切り裂くだけの鋭利さを秘めているだろう事が見て取れる。

それこそがヴラドが、不定形生物のスライムと成り果ててより数年の月日を掛け、ようやく得た新たな身体であった……

『それにしても、私達はどこに進んでいるんだ？』

「え？　エルはきまっているんだとおもっていたけど、ちがうの？」

体躯が巨大となったことで、嬉々としてその背に座り込み居場所を確保したエルが首を傾げる。

その瞳はやや眠たげである。鬣の炎は仄かな温もりとなり、年中葉が落ちない樹海では分かり難いが、少なくとも春先くらいの気温のここ最近の中では非常に心地よいのだろう。

『ああ。私もロザリーが自信満々に進んでいるから取り敢えずその

方向に進んでいるだけだ。そこのところ、実際はどうなんだロザリー』

ヴラドが問いかけると、前方を黒白のゴシックドレスと若葉色の腰まであるストレートの髪を揺らしながら歩いていたロザリーが、くるりと反転し後ろ向きで歩いたまま口を開く。

「言わなかったのよさ？　考えがあるって。今向かっている方向、この世界で言えば西。地球で言えば北の方角には、私が昔使っていた拠点の一つがある筈なのだわ。流石にもう荒らされているだろうけど、隠し部屋の類は見つかっていない可能性は高いのだわさ」

『何か置いてあるのか？』

「まっ、最盛期の頃に使っていた物に比べれば大した物でもないけど、装備品が幾つか。それにこの世界での通貨なども置いてるのよさ」

「つうか……そうび？」

エルが一人、次々と出てくる知らない単語に頭を悩ませている。ヴラドと二人きりの生活であった為か、どうしても知識の偏りは免れなかった。

そのツケがどうやらこうして同行者が増えることでまわってきたらしい。それでもエルであれば、そう長い時間も掛からず覚えていくことだろう。

それだけの知識欲、そして記憶能力をエルは有している。今も会話から内容を推察し、分からなければ邪魔にならない程度にヴラドへと質問している。

その努力が、父であるヴラドの役立ちたいと言う思いの為であるとは、流石にヴラドも知らない。

『やはりこの世界にも文化があるのか』
「それはそうだわさ。だから私も封印されたのだわ。まぁ、地球に比べればお粗末なのは確かなのよさ。知能数は高い種が多いのに、根底で力こそが正義だという風潮があるから、どうもまとまりに欠けるのだわね」

本当、嫌になるのよさ。なんて口にするが、ロザリーの顔には笑みが浮かんでいる。この世界では努力すれば才能の有無は分からないが、少なくとも成長していける為、ある程度の力を得る事が出来る。

そうして身についた力で欲しいモノを手に入れる快感は凄まじい。地球では犯罪であることも、この世界では力さえあれば何者にも縛られずにそれが叶う。

そう言う価値観が世界全土に根付いている。反面、お陰で知力では人すら越す種が居ながら、科学的面で発展してこなかった事にも繋がっていた。

更に言えば、地球より広大な星である為、種と種の交流がやや希薄なのもそれに拍車をかけているのかもしれない。

旅人や冒険者と言う者は、この世界ではある程度の実力がなければ自殺行為に等しいのだ。自然的に集団は内に篭ってしまう傾向が強くなる。

『そう言えば、すっかり私の進化のせいで話がずれてしまったが……魔神に関して、それに進化に関してもよかったら説明してくれないか？』
「分かったのだわ。どうせ、拠点の砦まではここから数日以上は掛かるのよさ――――」

そう言うと、ロザリーまでヴラドの首筋に跨りだす。とんっと、軽やかなじゃんぷで正確に歩くヴラドに跨った軽やかさは中々に見事であった。

「方角はこのまま真っ直ぐ。太陽を背に向けて進んでいけばいいのだわ」

「むぅ……ここはエルのばしょなのに」

「ニャー！」

突如乱入してきたロザリーに、エルとその手に支えられたリアンが抗議の声を上げる。女王蟻の一件から、すっかり二人とも仲がよくなっていた。

「いいじゃないのよさこれくらい。私達、家族なのだわさ」

家族と言う言葉にエルがむすっとしながらも、渋々引き下がっていく。家族と言うものは、エルにとっては殺してはいけないものの最たるものになっている為だ。

それは家族を大事にしているヴラドの影響が大きく反映されている結果と、そう言い換える事が出来るかもしれない。

「わかった。でも、エルがまえね」

「構わないのよさ。お兄様、ちょっと止まって下さい」

ロザリーに言われるまま立ち止まると、一度地に下りた二人と一匹が場所を交代して再びヴラドに跨る。

それを背の重みで感じつつ。ヴラドは内心で自分は乗り物ではないんだが……と愚痴を零しつつも、頼られている感じもあり、実は

満更でもなかった。
首筋にエルが跨り、その腕の中にリアン。そしてそのやや後ろ、胴体の部分でスカートを気にしてか器用に横座りでロザリーが並ぶ。
それを確認し、ヴラドがロザリーに合わせて緩めていた速度を少し早めながらも再び歩き出す。

「さて……魔神に関してだったわさ？」
『ああ、その通りだ』
「魔神と言うのは、一定以上の実力者――と言うよりは、魂の強大さを誇る存在を指す言葉なのだわ。お兄様も感じていた筈だけど、この世界では“魔獣”あるいは、“魔族”を殺す事で、肉体から魂が剥離する時に零れるその欠片を身に取り込むが出来るのよさ。その質や量でこの世界の魔獣や魔族は成長し、中にはお兄様のように進化する事が出来るのだわさ」

この世界では明確に魂と言うのが認知されている。そしてそれは死亡時に肉体を離れるのだが、同時にその肉体で溜めた経験とも、世俗の穢れとも様々に言われる一部を落としていく。
ありていに言えば魂の残滓、もしくは欠片だ。そしてそれは強力な者程落としていく欠片も強力となる。
これが衝動の強さに関する秘密であった。そして魂を吸収するのだから、当然己の魂はより力強いものへと変化していく。
そして魂には大きさと質がある。たとえばスライムであればどんなに魂を取り込もうと、質は基本的にスライムと言う種から変化しない。変わるのは大きさだ。
核に外付けのブースターを取り付けていく感覚に近いだろうか。ヴラドがスライムの時に感じた成長とはこれのことである。
そしてその外付けの魂と本来の魂を一つの魂に純化してしまうの

が“進化”。これにより、大きさは元にもどる、あるいはより小さくなる代わりにその質は急激に上昇することとなる。
今のヴラドがこの状態にあたるだろう。不定形で溜めた魂が限界をむかえ、圧縮され輝きを増した状態だ。

『と言うことは、出来ない者も居るのか？』
「私はスキルと、そう呼んでいるのよさ。世界的に体質やら先天的才能やら言われているけれど……とにかく、種の限界を超えて進化するには特別な才能なり、私流ならスキルが必要なのだわ。恐らくお兄様にはそれがある」

言われてなるほどとヴラドは納得した。確かに、だれもかれもが種の限界を超えてしまっては、世界のバランスが容易く崩壊してしまうだろう。
ちょっと考えれば分かることだが、どうやら樹海での生活は予想以上に人らしい思考をすり減らしていたようだ。
納得した表情を見せるヴラドにロザリーが続きを話し出す。

「魔獣と魔族の魂吸収も、そう言う意味ではスキルによるものなのよさ。魔獣か魔族か決める要因とも言えるのだわ」
『魔獣と魔族と分けているが、違いがあるのか？』

そうヴラドが質問すると、「いい質問なのよさ」とロザリーがにこやかに笑う。

「単純に、知能が低いか高いかの違いなのだわさ。そう言う意味ではそこのリアンもお兄様もエルも、みんな魔族と言う範疇なのだわ。逆に言えば女王蟻なんかは力はあっても魔獣のカテゴライズなのよさ。折角だからこの世界での力、魂の強大さにおける区分も話して

おくのだわ」
『そんなものがあるのか……』
「境界線はちょっと曖昧だけど、しっかり存在するのよさ。これで魔神級かどうかも分かるのだわ。ちょっとお兄様止まってくれると嬉しいのだわさ」

言われヴラドが立ち止まると、ぶつぶつと小さく何語とかを呟くロザリー。
すると宙に新緑色の光が何か文字を形作っていく。どうやらそれはこの世界の文字なのか、残念ながらヴラド達には読み解く事が出来なかった。
それはロザリーも承知しているのか、同じく新緑色で構成された指揮棒らしきものを、横に箇条書きで書かれた文字の一番下を示し口を開く……

ロザリーによる基本的な世界の説明はまだまだ終わらない。

第十三話

「それじゃ説明するのだわ。まず、この世界における実力――魂の質と大きさによって、大体の目安だけれども十一の階級。この世界じゃ“階級（レゾニア）”と呼ばれるもので全ての生物は区分されているのよさ」

そう言うと空中の一番下の文字。それを指揮棒と言うか、説明棒のようなもので再度叩くフリをする。

物質化している訳ではないのか、時折文字を貫通してすり抜けてしまっているのはご愛嬌と言うところだろう。

「階級は数字が小さくなるほどより位が高いのだわ。そして一番下の階級、第十一階級を“一般級（ノービス）”と呼ぶのだわさ。そして、その次の十階級が“兵士級（ソルディアット）”。九の階級が“指揮官級（コマンダー）”。八の階級が“騎士級（ナイト）”。そして七の階級が――“准男爵（バロネッツ）”と呼ぶのよさ」

説明しつつ、次々と下から順に説明棒で文字を追ってはコツコツと叩くマネをするロザリー。

これで眼鏡でも掛けていれば教壇に立つ教師には――――容姿で見えないものの、雰囲気としては申し分なかったに違いない。

ロザリーの説明にヴラドが頷く。言われた内容は一言一句違えず記憶していた。この新たな肉体、記憶能力も上昇しているようだ。

エルも理解しているのかは不明だが、なにやら神妙な顔つきでしきりに頷いている。よく見ればその視線が微妙に泳いでいる為、実はやってみたいだけなのもしれない。

その様子はヴラドが思考の海に没入する姿勢になんとなく似ている。スライムでも近い事をしていたかと思うと、なんだか胸に苦い想いが立ち込めた。

まぁ、必要なら後で自分が噛み砕いて教えればいいだろうとヴラドは内心で決め、ロザリーに先をさとす。

『続けてくれ』

こくりロザリーが小さく頷き、再び説明棒でなにやら八の階級と七の階級の間にある線を示す。

「七の階級、准男爵（バロネッツ）の次。第六階級を“男爵（バロン）”と言うわのだわ。そしてこの男爵（バロン）の階級から世界では“魔神”と呼ぶのよさ。言わば第七階級は魔神予備軍と言えるのだわ。でもまるで見えない壁でもあるように、七と八の差は大きいのよさ。それこそ、才能があるかないかの差と言えるかもしれないのだわさ」

そこまで話すと一息つき、たっぷりと酸素を補給してから再び口を開いた。

「そして五の階級を“子爵（ヴァイカント）”。四の階級を“伯爵（グラーフ）”。三の階級を“侯爵（マーキス）。二の階級を“公爵（デューク）”、そして第一階級を“大公（グランド・デューク）”とそれぞれ呼ぶのよさ。それじゃあ、ここまでの説明を纏めるのだわ」

そう言うと再び小さく何事かを呟く。すると、今までこの世界と思われる字で書かれてた宙の文字が見事に日本語に変化する。

それなら最初からそうしていればよかったのではないかと思うのだが。聴覚でしっかり覚えさせ、その後に視覚も交えて再度復習させるのは、中々悪くない手だとヴラドは思わず考えてしまう。

とりあえず宙に視線を移せば――――

“一般級（ノービス）”

“兵士級（ソルディアット）”
“指揮官級（コマンダー）”
“騎士級（ナイト）”
“准男爵（バロネッツ）”
―これより先は別格で
サウザンド（貴族級）と呼ばれており、かつ魔神として区分する―
“男爵（バロン）”
“子爵（ヴァイカント）”
“伯爵（グラーフ）”
“侯爵（マーキス）”
“公爵（デューク）”
“大公（グランド・デューク）”

と、日本語で書かれている。それをヴラドはしっかりと記憶していく。

エルも今度は真面目に記憶しようとしているようで、真剣な表情で文字に視線を向けていた。

「因みに、お兄様の今のところの階級は――『内なる魂よ、その輝きをそっと私に教えておくれ……魂検（サーティス）』」

何やら、それこそ呪文らしきものを明確に唱えるロザリー。そのまま何やら暫く思案顔をした後、再び口を開く。

「指揮官（コマンダー）級と騎士（ナイト）級の間くらいだと思うのよさ」

と、言われてもヴラドにはそれがどれだけ凄いのかよく理解出来なかった。取り敢えず魔神級には未だ遠く及ばないのを理解したくらいだろうか。

『魔神級の力を有するのは未だ遠そうだな』

己に言い聞かせるかのようにヴラドが口にする。やや人間とは違う、少し無理のある音だが、しっかりとその声は口から発せられている。

それも声帯がしっかりと存在するお陰だが、構造が微妙に違うため人のように綺麗な発音は望めないようだ。

「何を言ってるのよさ……スライムは最低階級の一般級（ノービス）なのだわさ。それをたったの数年で騎士級（ナイト）に迫る勢い。環境が特殊であったとは言え、凄まじい成長速度なのだわ。普通、一つの階級をあげるだけでも数年以上。それも階級が増せばより困難になっていくものなのだわさ。私が魔神まで行くのには百年以上掛かったのだわ」

心底呆れた風にロザリーが溜息交じりに口にする。そこでようやく己の歩んだ成長速度が、それこそ異常であったのだと気づく。

側に居たエルは、今でこそヴラドが進化によって実力を再び追い抜いたとはいえ、かつてのヴラドをすら上回る勢いで成長していっていた。

その為自身の成長速度が異常なのだと気づく事が出来なかったのだ。少し考えれば、種自体の潜在能力（ポテンシャル）に差があるのだから当たり前なのだが……

やはり樹海での生活で思考能力が鈍っていたのかもしれない。だが、別段ヴラドが天才だとか、異常な成長効率を誇るだとか言う訳ではない。

ひとえにそれは環境が許したことであり、ヴラドの努力の賜物であった。これより先は、今までのような成長速度は望めないだろう。

ロザリーの言葉からそこまでを理解したヴラドだが、ふと疑問と言うより好奇心が沸き立つ。

『そう言えば、ロザリーの最盛期はどの階級に属していたんだ？』
「ふふ、聞いてくれると思ったのよさ」
ヴラドの質問に背に乗っているのだから、顔は見えないと言うのにまるで悪役のように口元を吊り上げる。
「私の階級は“伯爵（グラーフ）”なのよさ。と言っても、別に魂が削られた訳でもないのだから、時間がたてばもとの階級相応の実力は戻るのだわ。まぁ、それこそ百年くらいかかるかもしれないのだけれど……」
最後だけちょっと力なく口したが、その内容にヴラドは素直に驚いていた。今一しっかりとその凄さは分からないが、それでも第四階級と言うのは相当なものであると言うのは理解出来る。
ヴラドの知る由ことではないが、それこそ最盛期のロザリーであれば今のヴラドが百居ようと手傷を負わせられるかどうかであったろう。
一つ下の階級が一つ上の階級を打ち倒すには、階級内で最底辺同士と仮定した場合でも、下の階級の者が十は必要だとこの世界では言われている。
それも状況によって変動するだろうが、少なくとも数倍以上の実力差が能力的に存在しているのだ。
『私がそこまで辿り着くまでどれほどの時を必要とするのだか……軽く頭痛がするな』
その巨体も合わさり、溜息と言うよりは荒い息と称した方が相応

しい吐息を零し口にする。

「だいじょうぶだよパパ！　エルがさきにそのだいいちかいきゅう？　になって、パパにいっぱいたましい？　をあげるよ！」

ニコニコと受け取りようによっては物騒なことを口にするエル。それが邪な考えから来ているのではなく、邪気のない純粋な好意から来ているだけにヴラドも苦笑しか顔に出来ない。

そもそも第一階級は無理でも、それ相応を目指すのなら、必然それに伴った犠牲が出るのは必然なのだ。ヴラドもエルに何か言える立場ではなかった。

「まっ、私達には膨大な時間があるのよさ。何をするにしてもゆっくり考えればいいのだわ。あっ、もう先に進んでいいのだわさ」

思い出したように述べたロザリーに従い、再びヴラドが歩き出す。気づけば日は少しずつ沈み始めていた。

もう直ぐ空も茜色に染まることだろう。そこまでいけば後はあっと言う間に夜の帳に覆われるに違いない。

この世界での夜空はそれこそヴラドの生きていた時代、その頃と比べるまでもない程星がよく見える。

天の川らしきものは無論、まるで空が一つの巨大な宝石箱と勘違いしてしまいそうな程だ。

背に感じるほんのりと温かな人の体温を感じつつ、耳にはロザリーの説明を聞き、ヴラドは野営の出来そうな地を目指して広大な草原を突き進む……

第十三話（後書き）

後書き

複数の方々に、改行などはこのままでいいと意見をいただきましたので、現状のままで書いていこうと思います。
そして結局一話使って長ったらしく説明……

次からは控えめと言うか、殆ど説明はなくなります。
後は状況に応じて小出しでいきます。面白くもない説明話ばかり、申し訳ありません＾＾；

それでは、また次の話でお会いしましょう！

あ、一応本作一期の結末はプロット出来ました。
一期と書きましたが、言うなれば中学生三年間の物語の最後と言う感じです。
そのときになって、要望がそれなりにあれば、二期開始（高校生での物語り）みたいな感じで始めれるタイプの終わり方になりそうです。

もし予想出来たら、気軽に何かの感想ついでに書いてみると面白いかもしれません。
一応ドンピシャはないだろうとは思っていますので。

第十四話（前書き）

ロザリーの発揮できる実力に関してですが。十話の記述を一割程度と修正しました。

第十四話

ヴラド達が草原を西に進むこと三日。途中幾度か大型の魔獣と遭遇したが、ロザリーが常は抑えてあると言う気配――この場合魂の輝き――を開放しただけで逃げだしてしまった。

彼女から衝動を感じないのは衝動の原因たる魂の輝き。質や大きさで決まるそれを隠蔽しているからしい。

ロザリー曰く、あまりにも差がありすぎると衝動ではなく本能的な恐怖に置き換わるとのこと。

最盛期の一割程度とは言え、その実力は魔神に触れるか触れないかのラインを未だ保っている。

現在のヴラドですら敵わない位置にロザリーは立っているのだ。

なんとなしに家長として情けない思いに駆られるヴラドであった。

他には特に障害もなく、道中様々な事を聞き、覚えられる範囲でこの世界の知識をヴラドとエルは詰め込んだ。

と言っても、それは五百年も前の知識な為これまたロザリー曰く、「もしかしたら変化している知識もあるかもしれないのだわ」、との事である。

言語に関しても一から学んでいる途中であった。共通語と呼ばれるものは確かに存在しているみたいなのだが、どうも普及率は高くないらしく、大抵は思念でやり取りする場合が多いらしい。

広い世界に反して街道の数は少なく、更に航路は危険な魔獣の領域。しかも種が非常に多いので、小国のようなものが乱立。致し方ないと言えた。

食事に関しても魔獣を狩る事で済んでいる。ロザリーの場合、そもそも食事自体必要ないようだ。

と言うより、魂力（こんりき）を消費してエネルギーを賄っているとのことで

ある。

魂力とはそのまま魂の力だ。これが魔法を扱う上での源であり、扱えるかは才能もあるが、必ずだれでも多かれ少なかれ保有している。

なぜなら、魂の質や大きさがそのまま量にかなり影響を与えるからだ。言うなれば、魂と言う器に魂力と言う水が入っていると想像すればいいだろうか。

ただ、完全に質や大きさが量と直結している訳ではない。そこは未だこの世界でも不明なブラックボックスだ。

分かっているのは魔法や、それに等しい能力を使用するのに不可欠な要素であり、多くの応用が利くエネルギーのようなものであるということくらいだろう。

魂力は自然に時間が経てば回復するらしいが。睡眠や食事を取る事でより多く回復する。また、魂を摂取しても効率よく回復するらしい。

「着いたのよさ」

ふと、説明された事を反芻していたヴラドの。猫科のもふっとした毛に覆われた耳にロザリーの言葉が届く。

「ここがおねえちゃんのいってたキョテン？」

「そうなのよさ。間違いないのだわ」

と自信満々に乏しい胸を張って告げるロザリーだが、ヴラドもエルの訝しげな声音に賛成であった。なんせ、何もない。

本当に何もないのだ。よく見れば何となく風化した煉瓦らしきも

のの残骸などが見て取れるが、注意深くみないと周囲の草原と変わらないように感じる。
あえて今までと違う点を上げるのならば、北側には立派な山脈が広がっているくらいだろうか。

『本当にここでいいのか？』
「失礼なのだわ！　間違いなくここなのだわさ。しっかりマーキングの魔法が働いているのよさ」

ヴラドの言葉に対し、腰に手を当て怒っているフリをしながらロザリーが口にする。

「まーきんぐ？」

エルが聞き覚えのない単語にオウム返しのように繰り返す。それはヴラドも名前から内容を察せられるとは言え、気になっていた点であった。

「まっ、簡単に言えば使用者にしか分からない目印のようなものを付ける魔法なのだわさ。草原からも感じていたから心配はしていなかったのだわ」

なるほどとヴラドは内心で頷く。だから妙に自身があったのかと納得した。
だが、流石にこうも綺麗に砦そのものがなくなっているとは思っていなかったのか、ロザリーも少々困り顔である。
暫くああでもないこうでもないと思案顔をし。そのままヴラドの背からすとんっと、飛び降り、周囲を歩き回る。
どうやら何かを探しているらしい。その目線は砦跡に沿って注がれているようだ。

『何を探しているんだ？』
「入り口なのだわ」
「いりぐち？」

エルが反復し、そのまま地に視線を向けるがあるのは草ばかり。地下への入り口どころか、それらしいものすら見当たらない。

『埋もれているのか……』
「そうなのよさ。困ったのだわ。マーキングは十数メートル範囲に効果を及ぼすから、細かい位置までは無意味なのだわさ。砦が残っていれば簡単だったのに……誰が破壊したのかしら。腹がたつのだわ！」

そう言って黒の編み込みブーツで地面を何度も蹴る。と、その音が周囲の地面とは違うことに気付く。
数度その行為を繰り返していたロザリーの表情がにんまりとしたものへと変化した。

「見つけたのよさ！」

そう言って小さく何かを呟くとガコンッ！　と言う何か金属製の重々しい音が響くのと同時、丁度地面を蹴った位置から両開き式であったと思われる、灰色の扉が開いた状態で地面から飛び出した。
パラパラと付着した土や草が零れ落ちると、どうやら元が砦の床に偽装してあったものだと見て取れる。
その表面は石畳状になっており、扉を引き起こす取っ手も付いていない。そんなヴラドのちょっとした疑問に気づいたのか、「オリジナルの封印の魔法なのだわ」と呟き、そのままぽっかりと口を開

けた地下への階段を下りていく。
その後からヴラド達も続く。どうやら床そのものに長年土が積もり、今の地上の状態になったらしい。地下だと思われる螺旋階段は全く風化していなかった。
これも魔法なのかと聞けば、「劣化し難い素材が使われているのだわ」とロザリーが答える。
螺旋状になっているらしい石階段の途中途中にある松明、それにロザリーが魔法で火を点しながら進んでいく事数分。
それなりの深度に到達した頃、かなり広い空間がヴラド達を出迎えた。

『む？』

全員がその空間と言うか、部屋に入っていく中、ヴラドだけが困惑の声を上げる。

「あー……そもそも、その巨体でよくここまで降りられたのよさ。すっかり失念していたのだわ……」

そう、この部屋、入り口の幅がそう広くないらしく、どうも頭部が突っかかってしまうのだ。
螺旋階段自体はかなり広く、慎重に降りればなんとかなったのだが、どうしてこう部屋の入り口だけ狭いのか。
内心で愚痴を零しつつ、何度か頭を突っ込んでみるがどうしても通らない。

「仕方ないのだわさ。ちょっとお兄様下がって下さいまし」

言われるままに数歩下がるとロザリーがぶつぶつと恐らく詠唱だと思われる言葉を呟く。
それが完成するのと同時、入り口の壁に衝撃が奔った。爆発時の衝撃のような、そんな強い衝撃が直接数度ピンポイントで四方に発生。
破壊するには至らなかったが、あちらこちらに罅が出来ている。これならと――ヴラドが前足で素早く壁に爪を振るう。
巨体に見合った膂力に、鋭く硬い爪との相乗効果抜群の一撃が耐久度の下がった壁を呆気無く粉砕してしまう。
これならもしかして爪だけで粉砕出来たか？　と、予想以上の手応えに満足しつつヴラドも部屋の中へと入っていった……

『すまない、ロザリーにすべて任せてしまったな』
「気にすることないのよさ。出来た妹が居て便利だと思ってくれればいいのだわ」

そう茶目っ気たっぷりにウィンクし、手に抱えていた最後の荷物を石畳の床に降ろす。
見た目にそぐわない、それこそエルより優れた膂力によって支えられていた荷物はドスン、と音を立て落ち、同時に埃が舞う。
けほっけほっ！　とロザリーが咳き込む。特に重い物であったのが災いしたようだ。

「ねぇねぇおねえちゃん。このきんいろのまるいのはなに？」

次々とどこからか持ち出されてきた荷物の山。その塊の一つ。金

色のコインが無数に散らばった場所をエルが指で示す。
ロザリー自身、何を持ち出したのか完全に把握していないのか、どれどれなんて口しながら覗き込む。

「ああ。それはこの世界の通貨なのよさ。一応は共通って銘打たれている“ラデオン金貨”なのだわ。今でも普及しているのかは不明だけど、あって困る事はないと思うのよさ」

そもそも通貨と言う意味を知らないエルが困った顔を見せる。それを察したロザリーが笑みを浮かべながら丁寧に貨幣の説明をすると、エルも理解が及んだのかその表情が明るいものに変化した。
そんな二人の様子を眺めているヴラドとリアンの顔は心なしか嬉しそうだ。

『そうしているとまるで姉妹のようだ。エルもロザリーの事をどうしてか姉と呼ぶが、どうやらロザリーも満更ではないようだな』

純粋に嬉しそうな気持ちを滲ませたヴラドの言葉に、ロザリーが慌てるようにぶんぶんと手を横に振る。

「そ、そんな事はないのよさ！？」

そう口にするも、先程のエルに教える時の嬉しそうな。それこそ妹を構ってやれることが嬉しい姉のような表情を見た後では、どうも説得力に欠けてしまう。

「おねえちゃんって、よんじゃダメなの？」

そもそもエルがそう呼ぶようになった切っ掛けも、何かと言うと

エルに構ってやっていたこの三日が大きな原因だ。
後はヴラドの地球での子供が男子一人に女子一人の兄弟であり、偶にぼかしつつも家族と言うものをエルに話していたせいかもしれない。
エルの下から覗き込むような――身長的にどうしてもそうなる――上目遣いに、ロザリーが言葉を詰まらせる。
キョロキョロと視線を彷徨わせるが、前はエルの目線。横はヴラドの生暖かい瞳。何故か後ろにはリアンが尻尾を振っている。
そしてヴラドの反対は壁であり、まさに四面楚歌の状態であった。

「うっ…うぅ……そ、そんなことよりこの荷物の山を早く整理するのよさっ！！」

暫く顔を俯かせていたロザリーだが、急に噴火でもするように両腕を突き上げて叫ぶ。
しかし言葉に反して顔はほんのり朱に染まり、明らかに額面通りではないと言っているようなものであった。
しかし、エルにはそれが伝わらない可能性もある。事実、その顔には悲しみの色が濃く映っていた。
そんなエルにヴラドがそっと気付かれないよう思念を飛ばす。即ち――恥かしがっているだけだ、と。
ロザリーが背を向けている間、エルの顔には「おねえちゃんはずかしがりやさんなんだ」と言う、妙な理解が浮かんでいた。

第十五話

「やっぱりお兄様はこれを付けるべきなのだわ！」
「それ、エルもほしい！」

荷物の山から取り出した四つの装備。どれも同じ型らしい。恐らくは四つで一つのセットなのだろう。
エルがそれを見てキラキラとした瞳で口にするが、ロザリーは困った顔をする。

「同じものは流石にないのよさ。でも似たものならまだあるのだわ――――」

ヴラドを置いて行くくらいの勢いで盛り上がる二名。と思えばリアンも何気に獣用の装備を漁っている。
やはり知能が高いのは間違いないらしい。何となくその表情が好奇心に輝いているのは、おそらくヴラドの気のせいではないだろう。
そもそも上記の会話になった始まりは、ロザリーが持ってきた荷物にあった。曰く“魔道具”と呼ばれる魔法の力を付与した神秘のアイテムや、装備が無数混じったものであるらしい。
もしかしたらそれなりに凄いものかもしれないのだが、残念ながらヴラドにはこの世界の価値観を未だ有していない為判別が付かない。
そんな荷物の置かれた部屋でロザリーが発した、「さ、何を使ってみたいのだわ？」と言う言葉が切っ掛けであった。

「ほらお兄様、早速装備してみるのよさ」

そう言ってうきうきとした様子でロザリーが足甲と手甲の中間のようなものを持ってくる。
どうやら四足獣用の装備なのだろう。銀色に輝くその金属製の装備の先端には、爪がしっかり飛び出るよう細工されている。
だが如何せん大きさが違う。どう見ても装備の方が小さく、ヴラドに使用出来るとは思えない。

『大きさが合わなくないか？』
「ふふ、大丈夫なのよさ。まっ、お兄様は私(わたくし)に身を任せていればいいのだわ」

と、何やら聞きようによっては勘違いしそうな言葉を口にしつつ、そのメタリックに輝く具足の横にある留め金らしきものを外す。
すると丁度右に当たる部分から綺麗に具足が縦に開き、見事足に装着できるように変化する。

『これは……これも魔法の力なのか』

思わず驚愕の言葉がヴラドより漏れ出る。横で見ていたエルも驚きの表情を浮かべているようだ。
ロザリーがそっと開いた具足をヴラドに当てると、まるで装着者に合わせるようにその大きさが変化していく。
ものの数秒も掛からず丁度いい具合になり、そのままロザリーが留め金を締める。カチャリと金属音がなり、ヴラドの前足、後ろ足は次々と手首足首の次の関節手前まで守る形で具足に覆われる。

「ふふ、似合っているのよさ。この具足の名前は“ディオ・エルエレイア”。この世界の言葉で、日本語に言い換えれば“堅牢なる守り”と言う意味を持つのだわ。本当は他にもあればよかったのだけ

ど、流石にそこまでは置いてなかったのだわさ」
『いや、むしろこういったものを使う発想が私には欠けていた。人が使うものだと言う認識があったのだろう。感謝している』
「喜んでもらえたらなら嬉しいのよさ」

そう言ってにっこりと微笑むロザリー。森林色の瞳が細まり、その桜色の唇が弧を描く。この世界にあるのか不明だが、その着ているゴスロリチックな衣装――衣装に関してはどうやら魔法で用意したものらしく、魔法を打ち消すタイプのものを食らうと一瞬で掻き消えてしまうらしい――更に地球ではあり得ない髪色なども相俟ってどこか作り物めいた雰囲気だ。
エルも容姿だけで言えば非常に先が楽しみだが、まだアルビノ等と説明のつく容姿である為衝撃は少ない。
反面ロザリーのそれは明らかにヴラドにとって見慣れないものであった。染めたりカラーコンタクトを入れているのとは違う、自然な感じが何とも改めて見れば不思議である。
ロザリーの笑顔にそんなことをヴラドが考えていると、どうやらロザリーがエルの為に装備を見繕っているようであった。

「これなんてどうなのよさ。鉤手甲、お兄様の付けているものの先端に三本の爪を装着した代物なのだわ。特別な魔法は掛かっていないけど、使われている素材は中々で、その強度と鋭さは鋼だってものともしないのだわさ」

取り出したのは手甲に爪を付けたような装備だ。全体的に薄青色に輝く金属で出来ており、その爪だけはシルバーに輝いている。
飾り気は殆どなく、実用本位と言う気配を漂わせている一品だ。
爪の部分はヴラドのものより幾分か短い。大体目測十五～二十セン

チくらいだと思われる。
エルは素手で直接殴り掛かったりする為、相性は悪くないだろう。扱いに慣れるには少し時間を要するだろうが、基本は手を扱う延長と考えればいい。

「これ、エルがつかっていいの？」
「構わないのよさ。さっ、付けてあげるのだわ」

そう言ってヴラドの装備と同じく留め金を外し、エルの腕にその金属塊を装着していく。
これまた同じく大きさが勝手に装着者に合わせて縮み、それによって爪も十五センチ程度に縮まる。

「これにはちょっとしたギミックがあるのだわさ。ここの引き金、ちょっと引いて欲しいのだわ」
「ひきがね？」

エルの疑問の声に「これだわさ」と、丁度手の外側の部分にほんの少し飛び出ているレバー。
引き金のようなものを示す。エルが頷き、その引き金を反対の手でグッと引く。
すると今まではそのギラリとした凶器の輝きを灯していた刃が、シャキンッ！　と言う甲高い音を奏でて手甲の部分に収納される。

「そのまま直ぐ下にあるボタンを押してみるのだわ」

こくりと再び頷き、レバーの直ぐ下に存在するでっぱりを押し込む。すると予想通りと言うべきか、今まで収納されていた爪がジャキッ！　と鋭い音を立て勢いよく飛び出した。
その様子にエルの瞳の輝きが一層と増していく。まるで玩具を与

えられた子供のように、何度も爪を締まってはボタンを押して射出させるのを繰り返す。

「気に入って貰えたならよかったのだわさ。残念ながら、防具の類は置いてないのだわ。どこかで調達するしかないのよさ」

『いや、十分だろう。ロザリーが居なければ、それこそ何も持たずに旅をする羽目になったのは間違いない。それよりロザリーは何も必要ないのか？』

エルもヴラドも装備を見繕ってもらったし、リアンも何時の間にか手足を包む皮製の靴らきしきものを装着している。

一方のロザリーは用意した袋に金貨やその他持ち出せそうな物を仕舞い込むだけで、何か武器を手に取る様子はない。

そんなヴラドの疑問にロザリーが詰め込み作業を止め、にやりと口角を持ち上げる。

「私はこれを使うのだわ」

そう言って床に突き立っていた一本の剣を手に取る。それは俗に連接剣と呼ばれるものだ。あるいはその剣身がまるで蛇の腹のようにも見える事から、蛇腹剣とも呼ばれるだろうか。

握り手は何か布が巻かれ滑り止めとされており、柄は優美な羽を思わせる形をし、連結されている刃はまさに蛇の腹を思わせる。

その刃の色は艶消しの黒で構成されており、光を一切反射しない。長さは優に一メートルを超しており、振るった時の長さがどれだけなのか予想が難しかった。

剣と鞭の要素を併せ持つ一品だが、見た目通り癖が強く扱いは難しい。鞭より重いそれを自在に操るには相応の膂力と、熟達した技術が無いと不可能だろう。

ロザリーの容姿であれば、細剣などが似合いそうなのだが、随分とキワモノを持ち出したものだとヴラドは内心で苦笑する。

『一応蛇足だと思うが聞いておこう。扱えるのか？』

「勿論なのだわ。伊達に千年以上も生きてないのよさ。それに、これは過去直接使った事もあるのだわ。エルの装備と同じように、これにもちょっとしたギミックがあるのだわさ」

そう言うと持ち手の底に付いているボタンを押し込むと――ジャキンッ！　と言う何か固定するような音が響くのと同時、ロザリーがその連接剣を振るう。

片手で楽々と振るわれたそれはしかし、刃が撓り飛び出すこともなくまるで普通の剣のように弧の軌跡を描く。

「こうしてボタンを押せば通常の大剣のように扱えるのよさ。強度を保護する魔法も併用されているから、魂力を流すことで予想以上の硬度を誇るのだわ」

そう言うと床に転がっていた黒の艶消しに塗装された鞘に剣を仕舞い込み、そのまま備えられているベルトのようなものを利用し背中に背負い込む。

身長の関係で腰に佩くのは無理なのだろう。それだけでもその剣がロザリー用に作られたのではないかと、そう思わせるには十分であった。

それから十分程たち、皮製のバッグに必要な物を詰め込み終え、残りは捨てていくと言うところで落ち着く。

総数にして三つにも及ぶ大きめのバッグは二つをヴラドの首に掛け、残り一つをロザリーが運ぶ事となった。

そんな中、一枚の色褪せた巻紙をロザリーが地面に転がす。紐を解かれたそれはコロコロと転がり、その全容を明らかにする。

『地図か？』

「そうなのだわ。あって困るものではないのよさ。これから向かうのはここ。この拠点から真っ直ぐそのまま直進して約一週間の距離にある街、“テイトローイ”なのだわ。何をするにしても情報は必要だし、そこで必要な物も購入しないといけないのだわ」

「ねぇねぇパパ、まちってなーに？」

『私達のような者達が一纏まりで住んでいる地だ』

ヴラドの言葉に何を想像したのか、エルの表情ワクワクとしたものに変化する。

その様子にロザリーとヴラドが笑みを零し、行き先は誰からも反対されずテイトローイへと定まった。

一行の長い長い旅路は今ここに始まったと言っても過言ではないだろう……

。

第十五話（後書き）

第十六話

昔話をしよう。どこかのとある世界のお話だ。魔法ではない、科学の世界で生まれた一人の少女の物語……

高度経済成長を終え、暫くの時が経過した日本。そんな国の中で、旧家と呼ばれるとある家系の末娘として生を受けた者が居た。

上に姉が一人。更に兄が居り、彼女は礼儀に厳しい家系でありながらも比較的甘やかされて育った。

日本人特有の漆黒の艶やかなストーレトロング。きっちり揃えられた姫カット。外にあまり出ない為か、日本人にしては随分白く肌理細やかな肌。

少したれ目の二重に重たげな睫毛。細い眉はややハの字気味であり、その表情はどこか庇護欲を誘う。

百五十あるかないかの少し小柄な身長。実年齢より二歳は若く見られる童顔。コンプレックスでもある起伏の少ない肉体。

凡庸に、一言で言えば美少女とそう言い換えて差し支えない娘であった。

政略結婚に関して言えば姉が受け持つであろうし、跡取りは兄が居る。少女は唯一兄弟で枷を受ける事がなかった。

旧家としてはそれなりに有名な家系であり、それなり以上に政財界への発言力を有した一族。

その為に礼儀作法その他勉学は勿論、習い事も多かったが、それでも差し引いた結果としてはとても恵まれた立場である。

――――とある一点を除けば、であるが……少女は生まれつき病弱であった。

人より病原菌に対しての免疫力が弱いらしい。有名な病程ではないにせよ、それは日常生活に影響を与えるレベルだ。

ゆえに少女は運命に引かれるように外に出る事もなく、基本的には屋敷の中で過ごす事となっていく。

それは皮肉にも裕福な家庭に生まれ、最低限の枷で多くのモノを生まれながらに得た少女への対価のようですらあった。

多くの者より自由を謳歌出来る立場でありながら、それを存分に享受することが出来ない矛盾。気づかない内にわだかまる苛立ち。

そんな少女であったが家族は優しい。政略結婚と言う、時代錯誤な結果婚姻を結んだ両親だが仲は良く、少女をとても可愛がってくれる。

兄も姉も妹を疎ましく思うどころか、積極的に構ってくれた。

世界の中でも有数の自由を得られる身でありながら、病一つで自由を逃した少女。少女にとっては生まれつきの付き合いであったのだから、もしかしたら不自由とは考えていなかったかもしれない。

それでも対外的に、客観的に判断するのであればそう結論付けるに十分ではあった。花よ蝶よと愛でられ育ちながら、狭い箱庭の中で自由と言う名の飼い殺しを甘受する。

そんな生活を疑問に思うこともなく幼少時代を過ごし、やがてエスカレーター式の名門女子校。俗に言うお嬢様学校の中等部に繰り上がる頃から、少しずつ自分の境遇を理解していく。

自分はとても恵まれている立場なんだと……それは弱い身体を持つ不幸に嘆いていた己が、どれだけ傲慢であったのかを知るには十分過ぎた。

結果的にはその考えがより少女をよい方向へと導いたと言っていい。一つ、無知から知を獲得した少女は賢き者へと近づく。

病弱であったため、必然学業は休みがちであったが、その心優しい性格もあいまって友人に事欠くこともない。

少女の家には度々学友がお見舞いに訪れたものである。そう言う意味でも少女はとても恵まれていた。

学業は楽しく。同じ学友は皆優しい。兄も姉も自分にとても良くしてくれる。自分の立場をほんの少し理解しただけで、幸せはまるで風船のように膨らんでいった。

社交界にも縁の少ない少女は良い意味で清らかに、悪い意味でとても世間知らずに育っていく。

中等部三年間、少女はとても幸せだった――――

高等部に繰り上がる頃、両親が少女に一つの提案を持ちかける。それは今の病弱な肉体を本格的に治してみないかと、そう言う内容であった。

それを少女は二つ返事で頷いた。成功率はほぼ百パーセント、一度の手術で完治すると言われたからだ。

事実、その病の治療はそう難しいものでもなく、誰もが少女の晴れやかな笑顔を予想してやまなかった。

少女の反対の言葉にも是と言わず、病院まで押しかけてきた両親ばかりか兄に姉。姉は縁談が進む重要な頃だったし、兄は次期党首として社交界へと忙しい。

整ったマスク、高身長、高学歴、次期党首……持てはやされて然るべき立場ながら性格も良し。自慢の兄である。

姉も以下同文であり、少女は劣等感すら抱くこともなく純粋に誇りに思っていた。

そして母はともかく、父だって現党首としてやることは多い筈なのだ。親ばかだとか、シスコンだとか、そんなことを思うよりもその気持ちが少女にはたまらなく嬉しかった。

そうして誰もが笑顔で見送る中、少女は手術室へと消えていく……

「どうしてこんなことに……む、娘は。娘は一体どうなるんだっ！！」

壮年の男性が白衣を着た初老の男性に掴み掛かっている。

その顔は恐ろしいまでの怒気に染まり。まさしく視線で人を殺せたなら、白衣の人物はそうなっても可笑しく無いほどだ。

男性に詰問され白衣の男性は淡々と事実を口にする。手術は失敗です、と――――

失敗する筈のない手術。ほぼ百パーセントの成功率。更に“親戚”から紹介された名医による執刀。

それでも結果は覆らなかった。だがしかし、本当にそれは偶然であったのか……

否。つまり、少女は下らない八つ当たりの標的になっただけであった。親戚そのものか、それとも別の家か。

とにもかくにも、少女はこの家を良く思わない者により、故意的に手術を失敗させられた。

結果少女は病弱な肉体をそのままに、半身不随のおまけすら身に負う羽目となる。

麻酔から覚めてから告げられた内容。“二度と地を踏みしめる事は出来ない”と言う、その内容は少女にも衝撃であった。

軽い気持ちだった。父も母も、兄も姉も、誰もが失敗など考えてはいなかった。それが下らないしがらみで失敗に導かれてしまう。

少女以上に、父は、母は、兄は、そして姉は怒り、猛った。しかし、どれだけその身を憤怒に焦がそうとも少女の半身は戻らない。

既に進んでしまった針を巻き戻す事は叶わない。それは既に神の所業である。

現代の医学では、少女の半身を戻す事は不可能。執刀した医師は

既に姿をくらませている。
怒りの矛先は親戚筋へと向かうのは簡単な帰結であった。言わば分家に等しい者達が犯した事態。
背後関係を調べる必要はあったが、少女以外の家族にとっては些細な事。日本でそれなり以上に権勢を誇る家にとって、国内で敵に回せない者など居はしない。
そんな物騒にすぎる思考を各人巡らせている時、病院の個室で横になっていた少女が口を開いた。

「私なら大丈夫だよ。今は無理でも、五年、十年先は分からないよね？」

そう口にした言葉に誰もがハッとして息を呑む。一番苦しいのは少女である筈なのに、外野があれこれ熱くなっていた事実に各人が静かに恥じた。

「とにかく、暫くは安静にせんといかんな。自宅での療養で構わんのだろう？」

少女ににこやかな笑顔を向けた後、傍にいた医師に流石は現党首と言わんばかりの鋭い視線で睨み付ける。
その迫力に呑まれ頷く医師に対し満足気に首肯し、その日の内に少女の退院は決まった。

――――数ヵ月後。少女の姿は名門女子高、お嬢様学校にその姿があった。以前と違うと言えば、その身は電動式の車椅子に座っており、常に一人の執事が付き添っていることだろうか。

普通なら虐めにあっても可笑しくない境遇だったが、ここは仮にもお嬢様学校。皆良い意味で穢れを知らず、悪い意味で世俗を知らない。

少女に対してもまるで我が事のように嘆いたり、知り合いの医師を紹介することはあっても、蔑むことなどありはしなかった。

しかし、その優しさが少女を苦しめる。優しくされればされるほど、動かない半身を思い知らされた。

事故ならよかった。あるいは純粋に医療ミスでもまだ救いがあっただろう。父や母達は黙しているが、病院での出来事、それに僅かな空気で少女はそれが何か人為的なものであったのだと感づいた。

――――誰かの我欲によって己の半身は奪われた。

その思考は少女の精神を知らない間に蝕む。どうして自分が、なんで、どうして、暗い感情は更に暗い思考と感情を呼び、病は気からと言う通り、徐々にその病弱な体質もあいまって寝込む事が多くなっていく。

兄の励ましも、姉の婚姻の愛でたい報告も、父の土産も母の話も。どれも一時的には少女を慰めてくれたが、時間と共に再び戻ってしまう始末。

少女は不幸かもしれない。だが更に不幸な者は居るだろう。主観的に見れば間違いなく居る。たとえば少女の境遇を不幸と仮定し、では紛争地域で足掻く身寄りのない子とどちらが不幸かと問えば、大多数の人が後者を選ぶに違いない。

下を見ればキリがないが、そう言う意味では少女は結局未熟であったのだ。それでも感じている不幸のみを取れば、少女の不幸は紛争地域の子に勝るとも劣らないだろう。

何故なら客観的に不幸であろうと、本人がそれをどう受け取っているかで不幸の度合いが変化するからだ。

痛みに慣れた者が感じる苦痛と、慣れない者へと同じ痛みを与え

た場合の苦痛。どちらがより痛苦を感じるかを問うに等しい。
同じモノでも、受け取る側によっては差が生まれる。そう言う意味で考えれば少女の不幸は確かに誰に比べられるものではなかった。

悪化する症状が生む悪循環は少女をどんどん蝕んでいく。遂には一日の大半をベッドで過ごすようになる。
学校は無期休暇扱い。幸い寄付金のおかげで退学扱いにはならなかったが、卒業式に出るのはこのままでは無理だろう。
周りがなんとか元気付けようとし、一時的に活力を取り戻してはまた戻る。そんなサイクルの中で少女はやがて自由と言う言葉に憧れるようになった。
動かない半身。体力のない肉体。些細な事で体調を崩す不甲斐無い身体。
ベッドで暇つぶしに読む本には様々な冒険譚が存在し、その数だけ自由があった。それは酷く弱った少女には眩しく見えたものだ。
気付けば少女は本に傾倒し、一年が過ぎた頃には屋敷に小さな書斎が出来る程。僅かながらネガティブな渦から抜け出した少女に、両親と兄に姉は揃って涙し少女に望む本を与え続けた。

（異世界……行って見たいな……そこでなら、私はまた昔のように地を駆ける事が出来るかな）

ベッドの横にある窓から青空を眺め、読み終わった本を隣の机に置いて少女は思う。
本のお陰か幾分体調は快復傾向にあったが、それでも常に微熱に苛まれる身体は少しずつ少女から現実と物語の境界線を取り払っていく。

抗鬱剤や精神安定剤に含まれる成分による眠気、それも少女から現実を取り払う手助けをしている。

ふと、読み終わった本のタイトルに目が行った。“ロ○ホライズン”、最近発刊された小説で、ゲームをプレイしていたら異世界に飛ばされたと言う内容だ。

多く、様々な本を読み。そして行き着いたライトノベルと呼ばれるジャンル。その中には現実から異世界へと足を踏み入れると言う、荒唐無稽な内容のものが多く存在した。

（世界の表は仮初で。裏側で能力者達が暗躍していて、今日もどこかで人知れず私達を守ってくれている……）

そしてそんな裏側にひょんな事から半歩足を突っ込んでしまう少年。そこから始まる非日常の日々。

文章で語られるそんな物語の数々は少女に歪な希望を与えてくれた。

「私も、異世界に言ってみたいな……」

心からなのか、冗談なのか、判別の付かない独り言は誰に聞かれることもなく、広い寝室にまるで溶けるように掻き消えた――――

第十七話

――異世界に行ってみたい。

そんな荒唐無稽な妄想を抱いてから幾許かの月日。高等部三年の半ば、遂に少女に転機が訪れた。ようやく寝込む事も減り、未だ薬の服用を続けながらも時折登校するようになった頃。

医学会でちょっとした革命が起こった。それによりもたらされた革新的技術の数々。その中には少女の病気は無論、半身すら取り戻せるものも含まれていた。

一般より逸早くその情報を嗅ぎ取った家族は誰もが歓喜する。その新技術が安全に使用出来るまでは今しばらく掛かるだろうが、それでも数年と掛かりはしないだろう。

両親は泣いて喜び、兄は涙を堪え、姉は少女に抱きついた……

――ああ……神は少女をお見捨てにならなかった。

誰もが抱いた感情、想い。それほど少女を含め、家族はこの情報を待っていたと言える。

少女が十八の年を刻む頃の話だ。そしてその顔に笑顔が舞い戻る。

（ちょっとした不幸から病気が治るどころか、更に不運に見舞われる。でも、それは奇跡的に完治して……まるでどこかのヒロインのよう）

そう笑顔の裏で思考していたが、それは些細な事。最早少女の半分現実と同化した妄想は矯正出来るレベルではなかった。

表に決して出ない妄想。脳裏でひっそり楽しむそれは家族にすら

知られていない。いまや少女の隣室の半分以上はライトノベルやファンタジー小説で占められていた。
それこそ好きな小説であればその台詞を一言一句違えずに諳んじる事が出来る程に。

だがしかし。残念ながら運命の女神は決して少女を逃してはくれない。
それは体調もよく、気分も上々。新たな小説の発売に心躍らせ、ネットから取り寄せることなく、自ら買いに行こうと珍しくも思ったとき。
神の見えざる腕は時に唐突に不幸を運んでくる。死神の鎌は常にその首筋に宛がわれている。冥界へと続く奈落の口は何時でも足元に潜んでいる……

『――未明、ＸＸ市ｘｘ区の交差点で交通事故が発生。これにより一名が重症を負い、病院に搬送されるも……』

「ここ、は……？」

ふと目が覚め周囲を見渡すと、そこは私に身に覚えのない場所。どこかの家屋でしょうか。
粗末な小屋らしき建物の中、その襤褸と言って過言ではない一室の、これまた擦り切れたシーツを被せてあったベッドに私は横たわっていた。

混乱の極致に立たされているかのような激しい困惑が私を蝕む。

「えっと……私はたしか――――ッ！？」

どうしてこんな所に居るのか。それを思考しようとした瞬間、凄まじい激痛が私に襲い掛かった。

まるで火鉢と化した脳を直接掻き回すかのような、灼熱の熱さと狂おしい程の激痛。同時に次々と思い出される記憶。

“私”の最後。書店までもう少しのところで聞こえたエンジン音、一瞬の衝撃、身体の内側から何かがバキバキ、グチャグチャと砕けちる音。信じられない程の痛苦、あっと言う間に消え行く意識。

そして“私”と“あたし”の記憶。まるでデータの流出でも起こったかのように、次々と知っている記憶と“知らない”記憶が私の脳裏で再生されていく。

その膨大な情報量と際限なく増していく苦痛に、ドサリと木製の床に倒れこみ、私は起きて早々あっさりと意識を手放した。

――――二度目の覚醒。“私”、いや、“私（わたくし）”としては初めての目覚め。未だ痛む頭を軽く抑えると、さらりとした感触が私（わたくし）の手に触れた。

地面に倒れ伏している格好から起き上がり、ベッドに座り込むと髪を手にとって見る。埃が少し付き、清潔な環境に居なかった為か少しばかり汚れ、更に痛んでいた。

その色は生まれたばかりの新芽を思わせる、活力に溢れた若葉の色。近くにおいてあった金属食器。なんの飾り気もないそれを覗き込むと、その深い森を凝縮したような緑の瞳が映った。

（これが私の身体……）

“私（わたし）”だった頃より幾分の背も見た目も幼いが、その分健康な肉体。忘れて久しい下半身の感覚。

病を恐れない肉体は活力に溢れ、まるで内から体力の源泉が湧き出しているようにすら私（わたくし）には思えた。

肌は白く肌理細かいが、あまり風呂に入っていないのか、少し汚れが目立つ。それでもその容姿は見慣れないワタシと違うのもあいまって斬新だ。

自然と笑みが浮かぶ。“私（わたし）”でもあり、“あたし”でもある“私（わたくし）”だが、どちからと言うと私（わたし）の比率が大きい。

（ふふ、ふふふふ……）

止まらない笑いを内心で押さえ込みながら、軽やかな足取りで部屋を飛び出す。粗末な色の落ちた茶色のワンピースがひらひら、ひらひらと、まるで私の内心を表すかのように舞い踊る。

（ああ……まさか、本当に異世界に来れるなんて。母上、父上、兄様、姉様、私（わたくし）は今、とても幸せです）

高揚の為か、あるいは記憶の融合のせいか、どうも元の世界への薄れた感情を感じつつ、まぁいいかと親不孝にも程のある思考で打ち切る。

高鳴る心臓の音。興奮に頬を染め、私は勢いよく古びた木製の扉を押し開く。

ギィ――と、耳障りな音を響かせ新世界の扉が開かれた。同時に射し込む祝福の光。その目を焼くような光量に、自然と私の瞳が細まる。

澄み渡る青、広がる緑の森、新鮮な空気。私は知っている。あた

しは一人でここに住んでいた。この村から離れた場所で、密やかに……

でもそれも終わり。私（わたくし）はそんな隠居のような生活をするつもりはない。この自由を取り戻した足で、健康な肉体で、未知なるモノを探求していく。

誰にも邪魔させない。もう狭い籠の鳥なんかにはならない。あたしとわたしは足りないモノを補い合い、ワタクシとなったのだから……

『いま、のは……』

突如訪れた目覚めにヴラドが重たい息を吐き出す。今も脳裏にちらつく夢の残滓はそのリアルさを訴えている。

まるで本当に長き年月を少女と過ごしたかのような重み。思わず自身の姿を再確認。巨大な肉体は健在だ。その燃やさない炎も、獅子の顔も、ヴラドの知るものと変わりない。

それでも思い出せる人の感触。それも少女のような……

『聞いた方が早いか』

巨体を誇る肉体を持つ者用の宿舎。その一室で思考の海に囚われる前にヴラドは起き上がった。目覚めに同調し、その纏う炎の勢いが加速する。

一歩踏み込めば石畳に敷かれた毛の長い絨毯にその肉球が包まれ、ふんわりした感触を伝えてきた。

人型の魔族の宿舎――宿屋――と違い、調度品は少ないが、広さ

はその数倍であり、ヴラドでも気兼ねなく入る事が出来た。
ここテイトローイでも上から数えた方が早い高級な宿屋。そこにヴラド達は昨日到着した早々チェックインしていた。
五百年前の金貨は残念ながら使えなかったが、代わりに両替が可能であった為、一行は現在資金的に余裕がある。
高さ五メートル程もある扉、それがヴラドの姿を感知して自動で開く。魔法の一部地球なみの便利さに内心好奇心を燃やしていると、金属製のレリーフが施された見事な扉はズズズズ……と、重々しい音を響かせ停止した。

『ん？』

ふと、肉体によるものか、感度の上がった聴覚に足音が届く。それも間違いなくここに向かっている。
急いでいるのか随分と駆け足だ。いや、もしかしたら走っているのかもしれない。同時に嗅覚を意識的に調整すると、嗅ぎ慣れた匂いが鼻に運ばれてきた。
どこか森林の新鮮な空気に少しの甘さを混ぜたような、なんとも特有の体臭とも呼ぶべき匂い。
飛んで火に居るなんとやら。あるいは噂をすればどうたらと思考しつつ、直ぐ数メートル先の曲がり角から勢いよく姿を見せた小柄な姿を前足で抱きとめる。

「わっ、わっわ！？」

軽い衝撃と同時にその勢いが止まり、若葉色の髪が慣性に従い前に揺れる。上半身がつんのめる形でヴラドの前に居る少女が腕をわたわたさせ、口元からからは頼りない声を漏らす。
ロザリーであった。そして恐らくここに現れた理由もヴラドと同

じようなものだろう。
なにせ、見た夢の少女の正体。ヴラドの考えが間違っていなければ、目の前に居るロザリーこそ、その夢の少女なのだから……

第十七話（後書き）

後書き

テイトローイまでの過程はキングクリムゾン。加筆時にざっと追加するかもしれません。
今回誤字脱字が多いかもしれません。そして次からこの世界の文化だとか、色々出てきます。
本格的に世界が広がっていく感じでしょうか？

それでは、感想や評価何時もの如くお待ちしております。

第十八話

『つまり、誓約のせいで私はロザリーの過去を夢として見たと。そう言う解釈でいいのか？』

宿屋“リーズテロ”の大食堂。その一角のテーブルでヴラドはそう口にした。

「そうなのだわ。私（わたくし）としたことが……魂レベルでの繋がりなのだから、こういう事だってあると分かっていたはずなのに。すっかり失念していたのよさ。お陰で恥ずかしいのだわ……まぁ、どうやらお兄様から聞く限りじゃ、この世界に来てからの部分までは見られていないみたいだけれども」

そう言って頬をほんのり染めてテーブルに置かれた器に口を付ける。同時に香る刺激的な匂い。地球で言えば香草の類だろうか。

ロザリーが頼んだスープ、その他料理が数皿テーブルには置かれている。話し合いとは言え、仮にも食堂。何も頼まず居座るのはどうかと言う結果である。

置かれている皿は白磁であり、この世界にも焼き物の技術が存在しているのが窺えた。

案外ヴラドが想像しているより文明のレベルは高いのかもしれない。宿屋の部屋からもそれは十分に見て取れたのだ。

「エルにはよくわからなかったけど、おねえちゃんのすんでいたばしょがすごいところだってのはわかったよ」

エルの言葉にリアンが同意するように一声鳴く。確かに地球の暮らしを見ても、未だ幼いエルでは理解できないだろう。

言葉通り、なんだか不思議で凄い場所くらいにしか思ってないかもしれない。

『だがもう平気なのだろう？』

「さっき施した術が防波堤の役割となってくれるのよさ。もう記憶の流入なんて起こらない筈なのだわ」

そう、やはりと言うか、見た夢はロザリーの人の頃の夢であった。そして話し合いの結果誓約の魔法が原因だと判明。

その後夢は全員が共有していたとも分かり、即座に対策がなされた。それが各自に刻まれたラインと平行に走る金色の細い線である。記憶の流入の原因。それは魂レベルの誓約による魂同士の繋がりだ。記憶とは肉体と魂、その両方で保存される。

それはヴラド自身憑依と言う経験を経て理解していることだ。つまり、魂の繋がりは記憶をすら共有することに他ならない。

今回起こった事はある意味事故であり、想定されてしかるべき必然であった。可能性としては、ヴラドの記憶が流出する場合もありえただろう。

ロザリーの記憶が流出したのはただの偶然である。それでも記憶を見られるのは恥ずかしいだろうし、見た者も気まずいのは変わりないだろうが。

「んぐんぐ……でも、エルはもっとおねえちゃんのむかししりたかったな」

柔らかい白パンらしきものを口一杯に頬張り、ヴラドの躾のお陰かしっかりと飲み込んでからエルが喋る。

「流石に勘弁して欲しいのだわ。この世界に来てから暫くは、正直黒歴史なのよさ……」

げんなりとした表情でロザリーがエルに答える。黒歴史。つまりは思い出したくもない過去と言う意味だ。

と言っても負の要素によるものではなく、言わば若気の至りと言うところだろうか。あるいは厨二病などと呼ばれるものに置き換えてもいいかもしれない。

『若気の至りと言うところか？　確かに夢の内容を思えば……ふむ』

ヴラドだって昔は黒歴史と呼べる内容を持つ。だからこそロザリーのあの後もなんとなく予想出来た。

もしかしたら今の珍妙な口調もその頃の名残なのかもしれない。

そう思えば勝手に笑みが口から零れ落ちる。

「お、お兄様！　何も笑わなくてもよいではないのよさ！？　妹苛めなのだわ！！」

ヴラドにとっては小さなものでも、その巨体を考慮すれば十分にロザリーの耳に届くレベルだったらしく、目敏く反応してみせる。

羞恥の為かその肌の白さもあいまって、頬の赤味具合がよく見て取れた。既に二千歳程の歳になるらしいが、どうもそうは思えない。

尤も、精神年齢は経過した年月によらないことを思えば十二分に許容範囲内である。

『そういきり立つ必要もないだろう。周りの視線を集めてしまうから落ち着け。それに料理が冷めてしまうのは勿体無い』

そう言って机の横――巨体故に椅子などは使えない――の木製の

板張りとなっている床に置かれた巨大な皿。その上に置かれた正体不明の肉の丸焼きにヴラドは齧り付く。

鋭い牙が鋭利なナイフのように肉を裂き、豪快に肉の塊がその大きな口に消えていく。周囲はしっかりと、中は血が滴るレアに焼かれ、香辛料で味付けされたそれは中々に美味だ。

肉汁が顎を伝い零れ落ちそうになるのを器用に舌で掬い取る。どうしても優雅な食べ方が出来ないのは仕方ないだろう。

「むぅ……」

おどけた口調だったとは言え、あっさり袖にされたロザリーがしぶしぶ料理に手を伸ばす。と、この世界ではナイフとフォーク、それにスプーンが一般的である為ナイフを目的の料理に向けようとし……

「あら、無いのだわ」

そう、無かった。何かで煮込まれた肉にデミグラスのようなソースを掛けた一品。それが綺麗に消えている。

「おねえちゃん？」

エルがどうしたの？　と言う顔で正面の席からロザリーを覗き込む。

「何でもないのだわ」と、いくら久しぶりのまとまな料理とは言え、一品程度に目くじらを立てる必要もないと思い、そう口にしようとしてロザリーが言いよどんだ。

見上げるエルの口元には何か茶色い液体。どうみてもソースであった……

「い、いや。なんでもないのよさ」
「……？」

少しだけぎこちない口調のロザリーにエルが疑問の声をあげるが、小さく首を傾げるだけで再び料理に挑み始める。
基本的にエルは血が主食となるが、別に普通の食事が出来ない訳ではない。だが、血液に含まれるなんらかの成分が必要なのか、一定期間摂取していないと衰弱してしまう。
ヴラドと住んでいた時は食べれても果物や肉ばかり。こうしてまともな料理を口にするのは、エルにとって始めての経験であった。

「うん！　エル、こんなにおいしいごはんはじめて！」
「ああ、分かったからそんなにはしゃぐんじゃないのだわ！　ほら、汁が飛んでいるのよさ」

そう言って甲斐甲斐しくも置かれた布で口元を拭ってやる。はたから見ても間違いなく姉と言った風情だろう。
エルも黙って拭いやすいよう口元を差し出すが、その格好がなんだかアヒルの口のようでヴラドがひっそり笑いを零す。
なまじ容姿が幼いながらも整っているせいか、そのギャップがまた笑いを誘う。

「ちょっとお兄様。笑うなんて酷いのだわ！」
『いや、すまない。微笑ましい光景だと思っただけだ。まさかこんなところに来て、こんな姿となって。それでもこんな穏やかな日を過ごせるなど、夢にも思っていなかった』
「お兄様……」

それはまぎれもないヴラドの本心。地球ではとりとめのない、そ

れこそ日常にありふれたような一シーン。
だが、この異世界に来てまでそれが叶うなど、一体誰が予想出来ようか？　樹海に居た頃は文明の存在する怪しんでいたくらいである。
そんな思いを察したのかロザリーが何と口にしていいのか戸惑う。この世界でこそヴラドの言わば先輩ではあったが、地球で過ごした時間は圧倒的にヴラドに軍配が上がる。
更に言えば。記憶の融合、魂の結合により地球への望郷の念が薄れたロザリーと違い、ヴラドは精神に僅かな変化――スライムへの憑依による精神の適応――のみであった。
それも地球への想いが薄れるような類ではない。今や地球などよりよっぽどこの世界の住人と言う意識が強いロザリーに、ヴラドに掛ける言葉は思い浮かばなかった。

「ナァー」

しんみりとした空気を感じたのか、リアンがテーブルの上で一声上げる。それを皮切りにヴラドは常の思考へと状態をシフトさせる。
内心リアンに感謝しつつ、その大きな前足でエルの頭を器用に肉球で優しく叩く。するとたちまち場の空気におろおろしていた不安げな顔が笑顔に変わる。

『さぁ、食事をさっさと終わらせよう。この後はこの街を見て回らないとならないからな』
「了解なのだわさ」
「（こくこく）」
「ニャッ！」

約一名新鮮な野菜とドレッシングを頬張り声が出ないのか、首を縦に振るだけであったが、それぞれ威勢のよい返事を返す。

そんな一行を周囲の者達はやや珍妙なものを見る目で見ていた。この世界は前述した通り、基本的に実力社会であり、力さえあればそれこそ法すら無視される場合もある。

そんな中では自然、他者は蹴落とすべき者として認識されていく。ヴラド達の見るからに仲のよい会話はこの世界の、特に一定以上の実力を持つ者からすれば非常に奇妙に見えた。

奇異の視線にエルは気づかず、リアンも同文。ロザリーとヴラドは理解しながらも無視し、その後楽しい一時を思い思いに過ごした……

第十八話（後書き）

後書き

なんだか引き伸ばしとなっている気がしますが、申し訳ない＾＾；
さて、拍手にちょっとしたモノを設置してみました。
二回押すと見れます。まぁ、大したものではないですが興味があれば押して見てください。

第十九話

ヴラド達は今テイトローイの街を見回っていた。大まかに東西南北で四つの区画が存在するテイトローイの、その一つである商業区と呼ばれる場所だ。

他にも工業区、一般区、宿泊区と分かれており、中心地はそれらの特色が交わる大広場ろなっている。

そんな中で東の区は街の商い(あきな)の中心地であり、殆どの店がその区画に集中している様は中々に圧巻であった。

『それにしても、こう改めて見るとやはり地球とは違うのだな』

街を十字で走り抜ける大通り、その商業区に走る東のメインストリートを歩いているヴラドが思わずと口にする。

右を見ても人、店、左を見ても人と店。飛び交う商人魂逞しい呼び込みの声。まるで日本でも度々ある祭りの真っ只中のような雰囲気だ。

「それはそうなのだわさ。人種だって多種多様なのだわ」

そう言われエルが好奇心に輝く瞳で周囲を見渡す。それをヴラドが歩く者にぶつからないよう身体で守ってやる。それだけ人通りの多い道なのだ。

幅は優に数十メートルもあると言うのに、人と人の幅が一メートルと無い事も多い。更に言えば、その体躯も小柄な者からヴラド以上の者まで、まさにロザリーの言うとおり多種多様。

『もっと文化水準は低いと思っていたが、所々は目を見張るものが

あるな』

ヴラド視線の先には魔法の恩恵か、少ない商品ペースを確保する為、宙に浮いた皿に果物らしきものを置いている露店商。

他にもクーラーの代わりに冷却らしき魔法で鮮度の保たれた魚介類、肉類。シートに置かれた色鮮やかな、しかし見事な意匠を凝らした服の数々、宝石らしきものを使用したアクセサリー。

見るからに怪しげな材料を売る店。明らかに魔法関係だと思われる品を扱う露店。

ヴラドが当初予想していたより随分と確立された文明のように思える。

『それにしても……』

一度立ち止まり、全員がどうしたの？　と言う表情を見せる中でヴラドは周りをもう一度見渡す。

今度は建物や技術、売り物などではなく、“歩いている”人々を観察していく。するとどうだろうか、この世界の者には有り触れた光景なのかもしれないが、すくなくともヴラドには強烈な違和感が感じられた。

『もしや純粋な“人”は存在しないのか、この世界』

瞬間立ち止まったヴラドを追い抜いていった人物に目が行く。

身長二メートル少し。屈強な体躯、頑強そうな鱗、見たままを言えば直立した蜥蜴（トカゲ）が歩いている。

エルは意味が分からず首を傾げ、リアンはそんなエルの腕の中。ただ一人、ロザリーだけがそう言えばそうだったのだわ。なんて表情を見せた。

「とりあえず脇道に入るのだわさ。ここでは通りの邪魔になるのだわ」

ロザリーの提案に従い、一行はメインストリートを繋ぐ円状の細い道の一つに入り込む。

ものの数分程度で華やかな喧騒は遠のき、静かな静寂が場を包む。周囲も寂れた店が多くなり、歩く者も極端に減ってしまった。

そんな路地の一角。丁度置かれたベンチのような椅子にロザリーはちょこんと座り込む。

エルがそれに続き、ヴラドはその前でごろりと横になる。幸い路地とは言え、石畳の通路はそう汚れが目立たっていなかった。

『先程の事だが、やはりこの世界に人は居ないのか？』

「簡潔に言えばその通りなのだわ。尤も、普通に考えれば地球の環境と進化で辿り着いたあの形が、他の星で見られる方が異常なのよさ」

『確かに……だが、それだと進化論的に人の姿に近い存在が生まれるのは奇妙ではないか？　ロザリー、君だって耳や髪の色などを除けば人と殆ど変わらない容姿だ』

ヴラドの言うとおり、人は猿から進化したからこそあのような姿を得ているに過ぎない。

それならば、まったく別の過程を辿ったであろうこの世界の者達が、人と酷似した姿を持つのはいささか都合が良すぎると言うものだ。

そしてロザリーの容姿は告げたとおり、人とほぼ変わらない。耳が少しとがっており、人にはありえない髪色などをしているくらいだろうか。

人の髪は基本的にシアン系、つまり青系統は混じらない。

ヴラドの問いはエルには難しいのか、ベンチの上で疑問符を頭上に浮かべたような、なんとも言えない表情を見せている。

「地球での私（わたくし）は、残念ながらそこまで頭が良くなかったから、なんとも言えないけど。可能性でいいのなら説明は出来るのだわ」

ロザリーの言葉にヴラドが軽く瞠目する。それは予想外の内容だった。

言わばヴラドの問いは答えを望んだ類のものではなかったのだ。あえて言えば、知的好奇心が一番に近い。

それを可能性とは言え、ロザリーは答えられると言う。頭は良くないと言うが、この世界でのロザリーはそれでも千年単位で生きている。

相応の知識は蓄えていると言うことなのだろうか。そう思考しつつ、ヴラドが続きを黙ってさとす。

「これはあくまで私の想像だけれども。この世界のシステムはかなり特殊と言えるのだわさ。そもそもが、本来無い長い時を掛けて到達する進化と言う領域を、それこそ僅かな期間で飛び越えるなんて可笑しいのだわさ」

それはヴラドも疑問に思っていたことだった。進化。それは言葉だけ聞けばなんてことないように思えるが、実際はそれこそ途方もない時間を掛けて行われる境地に他ならない。

数万、数十、数百万年。そんな信じられない時を経て得られるものを、この世界ではまるで鼻でせせら笑うように飛び越えてしまう。

ヴラドの最初の不定形たる種が、純粋な進化で今の形態になろうとすれば、それこそ数千万年以上もの時を要するかもしれない。

確かにロザリーの言うとおり、それは異常なことではあるが、今となっては疑う余地もない。異世界の中にはそんな法則なりなんなり、存在していてもおかしくないとも思える。

そんなヴラドの思いを察したのか「まっ、話しはこれからなのよさ」と、そう口にしロザリーが続きを話し出す。

「私は様々な理由から、この星には意思があることを突き止めたのだわ。その意思がそれなりに自我にも近いものであるとも。つまり、この進化と言うシステムはその意思によってもたらされたものなのではないのかと思うのよさ。そして、星となる前のその意思の肉体が人に酷似していたら？」

――ある意味果てである意思の元の肉体。それに引きずられる可能性もあるのではないかと、そう思えはしないのだわさ？

と、そう小さくロザリーは口にした。が、それは荒唐無稽に過ぎるとヴラドには思えてならない。

それはロザリーも承知しているのか、一度苦笑を浮かべる。

「他にも、進化の安定系があるいは人の姿なのかもしれないのだわ。物質に安定、エネルギーにも安定状態があるように。生物として究極的には人の形こそが安定系であり、進化の過程でそれに引きずられる。あるいは自然にそれを目指す、なんて可能性もあるのよさ」

『なるほど……』

それは先の理論よりは遥かに可能性の高いものであった。確かにものにはすべからく安定状態と言うものが存在している。

それを進化にも当て嵌め、安定状態が人であるのだと思いつくの

は普通では無理だ。
無論、それが当たっている可能性は低いかもしれないし、どうして安定状態が人なのかという疑問にだって答えなければならない。
それでも考えなければ始まらない。そしてロザリーの意見は可能性としてはそう極端に低いものではなかった。魔法がある以上、化学的根拠だけが真理ではない。
だが、どうもヴラドには前者と後者の意見が繋がっているように感じられる。それは思考の末の答えと言うよりは、進化の際の宿った知識に近いだろうか。
漠然とした感覚として、一見別に見える二つの意見が近いものであり、答えを共有しているように思えるのだ。

「お兄様……？」

ふと、ロザリーの意見に悪癖である思考の海へとダイブしていたヴラドの意識が引き戻される。

『すまない。少し考え事をしていたようだ』

俯いていた顔を上げればロザリーも訝しげな表情を元に戻す。

「まっ、どちらにせよ確かにこの世界に純粋な地球人に該当する種は存在しないのだわさ。それどころか、私のように、人と変わらないレベルの姿を持つ種もかなり少ないのだわ」

ロザリーの言うとおりであった。メインストリートを歩く間、ヴラドは様々な種族を目撃したが、人と変わらない姿を持つ者を見たのはほんの数名だろうか。
後は先の蜥蜴人間（リザードマン）のように、人を模した出来損ないのような種。

あるいは純粋にヴラドのように人とはかけ離れた姿の、何かと言うと魔獣に近い姿を持つ者ばかり。

『まぁ、好奇心から聞いたことではあったが、それなりに面白い話ではあった。今日の目的は情報収集だろう？　そろそろメインストリートに戻ろう』

そう告げるとエルがたっ！　とベンチから飛び降り、そのままヴラドの背中に飛び乗る。

「えへへ、エルおなかすいたよパパ」

首筋に抱き付き、その燃え上がる鬣（たてがみ）の不可思議な感触を味わいつつ、小さく主張する腹の虫にエルがご飯を強請る。

言われて見れば、酒場より既に数時間が経過していた。ヴラドやロザリーはともかく、食べ盛り、成長盛りのエルが腹を減らすには十分な時間だろう。

「それじゃあ、さっきの大通りにもどって、適当に何か頼むのよさ。私もこの五百年で変化した料理、興味があるのだわ！」

エルの一言で目先の行き先が決定し、ヴラド達は賑やかで華のある。喧騒のたえない大通りへと戻っていく。

そんな一行の後方十数メートル背後。ヴラド達を寂れた店の影から監視していた一人の人物が、音も立てずにそっとその場を離れていった……

第二十話

「小父さん。その串三本欲しいのだわさ。一本は出来たら特大だと嬉しいのだわ」
「オジさんはちょっと酷くないか？　見たところ、嬢ちゃんも結構な歳だろう」
「ちょっと小父さん？　仮にもレディに対して、それはないのよさ。こんなに可愛らしい娘、そうは居ないのだわ――」

テイトローイの中心部。街の区画がぶつかる巨大な円状の広場の東に位置する一角。
その中で鳥人間と称するしかないような、体長二メートル強の人物がやっている出店でロザリーは会話していた。
と言っても、ヴラドとエルには会話の内容はさっぱりである。なんせ都合のよい翻訳コンニャクなんて食べてないのだから、この世界の言語が分かる筈もない。
黙って広場の中心。人物を模しただろう巨大な像の前でごろりと腰を落ち着ける。幸い周囲は芝生となっており暖かな日和とあいまって心地が良かった。
猫のようにくぁっ！　と大きな欠伸をする。ヴラドがやるとそれも随分な迫力なのだが、知らぬは本人ばかりである。
暫くすると出店の店主から四本の串を貰い、数枚の銅貨らしきものを支払ったロザリーが、やけに大きい一本の串でバランスを取るのに悪戦苦闘しつつ向かってきた。

『それはもしや私のか？』

目の前に来たロザリーが「早く受け取ってなのよさ!?　た、タレが!」と口にするのを無視して問う。

「そうなのだわ。店主ったら、大きなの一つって言ったらこんなのを寄越したのだわさ……て、早くしてなのよさ!?」

『すまないすまない』

内心でロザリーの慌てる姿が面白くからかっていた事を仕舞い込み、一メートル程もある馬鹿げたサイズの串にこれまた負けじと巨大な口で齧り付く。

「わっわっ!?　私まで食べられるかと思ったのだわさ!」

いきなり齧り付かれビックリするロザリーを尻目に、器用に前足で串の根元を押さえつけてその肉に牙を突き立てる。

タレの香ばしい香りと味が口一杯に充満し、更に染み出た肉汁が口内を満たす。鳥のような淡白さでありながら、牛のように肉汁が滴る肉だ。

食材が何かは分からないが、この味なら地球で出しても中々の人気が得られそうだと次々と胃におさめていく。

「とと、お兄様の食べっぷりに見惚れている場合じゃないのよさ。はい、こっちはリアンとエルの分なのだわ」

そう言って差し出された通常より大きめの串と、通常サイズの串をエルとリアンに手渡す。

「おねえちゃんありがと!」

「にゃー!」

打算の含まれない、純粋な感謝の言葉にロザリーが気恥ずかしそうに頬を掻く。
黒歴史として封印したい過去は、何かと一人で居る方が多く、感謝の言葉なんて殆ど無縁であった。

「どういたしましてなのだわ。さっ、冷めない内に食べるのよさ」

ロザリーの言葉にこくりとエルが頷き、小さな口を懸命に広げ齧り付く。
一本でも十分な量になるよう、通常より大きめのサイズの為、ロザリーはともかくエルには中々に大きく感じられるだろう。
それでも一口味わうのと同時、その美味さに驚愕の表情を見せる。

「おいしい……」

エルの呆然とした呟きにロザリーも串に噛り付く。どうやら肝臓などの臓器系も刺してあるらしく、その食感、歯ごたえがまた嬉しい。
適当に匂いに釣られて選んだ店であったが、どうやら当たりを引いたらしいと内心で満足げに頷く。
暫く会話もなく、全員がそれぞれに食べ終わるまでその味を楽しんだ後、時刻も午後に差し掛かろうとしていた。
太陽は真上に差し掛かり、陽射しが容赦無く道行く者達に照りつける。雲の一片も見当たらない見事な快晴だ。
そんな青々とした空を眺めた後、ヴラドがようやくその腰を持ち上げた。それこそ猫のように背筋をグッと伸ばし、肉体の変化のせいか、気を抜けば日向ぼっことでも洒落込みそうになるのを内心叱咤する。

『さて、適度に腹も満たした。情報収集の続きと行こう』
「了解なのよさ！」
「りょうかいなのよさ！」
「ナー！」

エルがロザリーの珍妙な口調を真似ては威勢良く返事を返す。
一瞬、このままじゃ本当に口調が移りかねないのではと心配するも、それもまぁエルの判断かと思い直し歩き出した……

ヴラド達が現在の情勢に関する情報などを収集している間、ひっそりと監視していた人物が主の館へと舞い戻っていた。
まるで城かと錯覚するほどに豪奢な内装。金や黒、はたまたシルバーの輝きに溢れ、使われている材質も一級品。
屋敷自体も広く、テイトローイの中央広場から近くに門を構えている事からも、その館の持ち主が只ならぬ者であると推察出来た。
中心部は街でも権力者や富裕層が居を構える地である。

「ご報告致しますっ！！」

屋敷の謁見室と呼ばれる間。その扉から真っ直ぐに敷かれた真紅の絨毯。その上で片膝を付き、頭を垂れて一人の女性が口にする。
見た目は人と変わらず、それこそロザリー並みだろう。ただ一つ相違点を挙げるとすれば、その背中には雄々しい翼が生えている事

だろうか。
黒に近い茶。左右で己が身にすら匹敵するその翼は、どこか蝙蝠のようでありながら、それより遥かに頑強で力強い。
ヴラドが見れば、この者を恐らくは“悪魔”と称したに違いない。纏う黒い質素なドレスに反し、その見た目の秀麗さと気配は一角の人物だと彼女を知らしめている。

「ほう。お前が我の前に直々に報告に来るのは久方振りだな。話せ」
「はッ！」

頭を垂れる先。まるで玉座の間のように、数段ある段差の上の置かれた装飾華美な椅子に座した人物が、渋みのある深いバリトンの声で女性に声をかける。
それに一瞬緊張したような様子を見せ、すぐさま報告を告げるべく口を開いた。

「主が少し前に感知された封印の決壊。恐らくは間違いありません。本日テイトローイ内にて“深緑の魔神ロザリンド”と思わしき人物を発見致しました……」

そこで女性が先を言おうか言うまいか逡巡を見せる。基本的に彼女の主は簡潔で、余分なものを排した報告を好む。
ゆえに、重要度が低いとも高いとも言えない微妙な内容を話すべきか悩んでしまった。

「よい、そもそも貴様を差し向けたのも我だ。今回は子細漏らさず報告せよ」

窓硝子に張られた暗幕のせいか、座上の人物は不気味な薄闇に包

まれその姿を垣間見る事が叶わない。
それでも身動ぎし、片肘を付いて顎を乗せたのは見て取れた。その口元にはうっすらと笑みさえ浮かんでいる。

「ハッ……発見しました深緑の魔神、ロザリンドですが。どうやら仲間を得たのか、複数名で行動している模様。どの者も恐らくは魔族と思われ、ロザリンドを抜かせば炎を纏った獅子と思わしき者が一番の実力者かと。また、未だ幼い身ではありましたが、少女が一名。恐らくは主の同胞ではないかと思われます。最後に同じく幼いようですが“ライカン”が一匹。計三名を連れているようです」

そこで一度区切ると、深く深呼吸をする。主が放つ空気は重く、否応なく身が強張ってしまうのだ。
種族としての性質は主と近いものを彼女の種は持つが、生まれながらにして高い潜在能力（ポテンシャル）を有する主の種族とは比べようも無い。
そんな中でも主は齢数千の時を生きる魔族であり、その実力も威風もまさに“魔神”と呼ぶに相応しいものであった。
テイトローイを治める領主であり、野心家である彼はまさに覇道に生きる人物である。
そんな人物を主に持てることを彼女は誇らしく思うのと同時、無様を見せれば容易に己が命運が尽きるのも知っているが為に、慎重に呼気を整えてから再び話し出した。

「肝心のロザリンドですが。封印の影響か、魂術を用いたところ、かなりの弱体化を受けているようです。あの様子ならば、ギリギリ魔神としての実力を保持しているかどうかでしょう。また、次に実力の高いと思われる獅子も、精々が“騎士級（ナイト）”止まり。障害になるレベルではないかと思われます」

そこまで言い切った後、一歩下がり再び膝と頭を垂れて言葉を彼女は待つ。報告を全て聞き終わり、座上の人物が一人考え込む。

滲み出る喜悦は女性にまで届き、漏れ出る覇気がその身を強張らせる。何が彼をそこまで掻き立てるのか、普段そこまで感情を表に出さない主に彼女は疑念を抱く。

「下がって構わぬ」

いきなり掛けられた言葉に彼女は戸惑った。予想していたものと違ったからだ。

てっきり魔神に届かぬ身とは言え、仮にも准男爵級の実力を保持している己にロザリンドの身柄の拘束。

あるいは邪魔者の梅雨払い。最悪でも監視の続行を言い渡されると思っていたのだから。

「畏まりました……」

それでも口に出掛かった“何故”の言葉を呑み込み。彼女は静かに部屋を後にした。

迂闊な発言は己の首を絞めるのだと、ここ数百年で彼女は学んでいる。

「さて、ロザリンドよ。精々束の間の平和を享受するがいい……」

そう言って何時の間にか手にしていたワイングラスをグッと握り込み粉々に砕く。硝子片が散り、ワインにしてはやけに赤い液体が絨毯に飛散する。

まるでロザリーの肉体を同じように砕いてみせると言わんばかり

の意気込みが、その一撃には感じられた。
砕け散ったグラスには構わず、その裏に赤の生地を裏打ちした黒のマントを翻し、椅子の奥にある私室へと館の主は静かに消えていった。

第二十一話

『さて、収集した情報を纏めるとしよう』

ヴラドの言葉にその場の全員が頷く。進行役はヴラド、訂正役がロザリー。エルとリアンは観客扱いである。

それぞれが思い思いの体勢で話し合いに望む準備を進めていく。

自分の泊まっている部屋より持ち出した“ソファー”に寝そべるロザリー。ヴラドが横になっているのをいいことに、その腹を枕にするエル。

そんなエルの腕の中で丸くなるリアン。これからの情報共有はまさにこれからに影響を与えるかもしれないと言うのに、いささか以上に緊張感に欠ける二名と一匹。

話し合いには広い方がいいと、ヴラドの部屋で行うこととなったのだが、来た早々に始まった全員のこの態度にヴラドは密かに内心溜息を零す。

「ん？　なんだか浮かない顔なのよさ、お兄様」

「パパ？」

そんなヴラドの表情を目敏く感知したロザリーとエルが口を挿む。

『いや、何でもない。それでは集めた情報を共有するとしよう……』

内心でその鋭さを場の空気を読むのに使ってくれと思いつつ、ヴラドはテイトローイ内で集めた情報を纏めだした。

『今日一日で集めた情報で特に重要なのから話そう』

そう切り出しヴラドは話し出す。

『まず、この街テイトローイは千年程の歴史を持つ街だ。比較的浅い歴史の街と言っていい。そしてこの街は世界でも数多ある“独立都市”の一つらしい』

独立都市。それは国に属さず自治権を認められている都市を指す。実際のところ国の支配権が及んでいないだけ、と言う場合もこれを指す事がある。

そもそもが国と言う概念が薄い為、比較的この独立都市の数は多い。そして国も数は多いが、どれも小国と言ったところだ。

調べた範囲で大国と呼べるのは二国のみ。一方を“エルヴンレイン”、もう一方を“フィルデルア”と呼ぶ。それぞれ魔神でも最高位に位置する存在が治めているらしく、領土は拮抗、にらみ合いの状態である。

そしてテイトローイは二つの領土に重ならない。位置的にはエルヴンレインが北、フィルデルアが南で、今の場所が中央だと思えばいい。

それらを話すヴラドの言葉に皆が頷く。エルだけが一部理解していない様子だが、ロザリーが噛み砕いて説明すればその表情に理解の色が浮かぶ。

『そしてこの独立都市テイトローイはここ数百年で大きく成長している。理由はなんだと思う?』

「領主の交代なのだわ」

ヴラドの質問に、予め同じ場所で情報を聞いていたロザリーが答えを口にする。

『その通り。ここの領主は丁度約五百年程前に交代している。そしてそれからのテイトローイの成長は、まさしく破竹の勢いと言っていい――』

そこで一度言葉を区切ったヴラドの表情には苦いものがあった。見ればロザリーも似た表情を見せている。

一人、エルだけが理解出来ず首を傾げ、早くと先をさとす。どう見ても良い情報ではないのだが、好奇心が刺激されるらしい。

『つまりだ。領主の交代はロザリーの封印の時期と重なる。これの意味するところは……』

「私（わたくし）の監視なのだわさ」

『そう。万が一ロザリーの封印が解けたとき、逸早くその情報をつかむ為である可能性が高い。そもそも樹海に近いこの街を、封印した組織が利用しない手はないだろう。事前に考えれば分かる道理だが、どうやら相当樹海の生活で思考が飛んでいたらしい。家長として私の判断ミスだ、すまない』

ロザリーが引き継いだ言葉を肯定し、そのまま苦しげに言葉を吐き出したヴラドは心から謝罪する。

家族と言う言葉、絆を誰より大切する為に、未然に防げた筈の今の状況は酷くヴラドを苛んだ。明らかな思考力低下。今の彼を若かりし頃の彼が見れば、恐らくは見るに耐えないと落胆を示すことだろう。

「ぱ、パパのせいじゃないよ！　だって、パパはずっとエルといっしょだったんだよ。このまちだってしらなかったんだから、あたり

まえだよ！！」

「そ、そうなのよさ！　それに、それを言うなら一番考えに及ぶべき私がそれを見逃していた事がいけないのだわ。お兄様が謝るのは筋違いなのよさ！？」

エルもロザリーも、どうやらヴラドが家族と言う括りに並々ならぬ執着心があると気づいており、慌ててフォローに入る。

確かにエルの言うとおりだろう。この世界にヴラドは確固たる文明があると、半ば疑問視していたくらいだ。

しかも衝撃的なロザリーとの出会い後に知ったことも考えれば、エルの言葉通り仕方ないとも言える。

ロザリーの話も尤もに違いない。一番に今の状況を察せられたのは間違いなく彼女だ。そう言う意味では彼女にも咎があると言える。

それでもヴラドに届かない。いや、届いてはいる。二人の言葉は確かにヴラドの気持ちを和らげてくれた。

それでも己を責め苛む思いは決してなくなりはしない。なにせ、その積み上げた思考と思いは実に八十年にも及ぶのだから。

生半可な事ではその考えも価値観も変わることはないし、そもそもがヴラド自身変えようと言う気を持っていない。

『ありがとう二人とも。私は君達のような家族を持てて、きっと幸福者だろう。二人の言葉は正しい。だがそれは結局ダイスの一面からみた事象に過ぎない。事実は一つではない、そして答えも一つではない。エルの言葉も答えであり、ロザリーの言葉も答えでありまた事実だろう。だが、私が未然に今の状況を防げたのも事実であり、また、家族を危険に晒してしまったのも真実だ』

その言葉に宿る力はまるで他の言葉を阻む程に強い。そしてなま

じ言っている内容に一理あるためロザリー達は思わず口をつぐんでしまう。

そこに少なからず――エルは父に思われる事への嬉しさ――が、そして――ロザリーは折角手に入れた家族の、その源泉を壊すことへの恐怖――が含まれているだろう。

一瞬で少しの気まずい雰囲気に包まれる場だが、それをなしたのがヴラドであるのと同時、壊したのもまたヴラドだった。

『まぁ。だからと言ってうじうじしても何も始まらない。幸いここから次の街へはかなり距離がある。少なくとも増援の心配はしなくてもいいだろう。ロザリー、ここから別の街へ連絡を即座に取るのは可能か？』

「か、可能なのだわ。でもそれには高度な魂術か、それを込めた魔道具（マジックアイテム）が必要なのだわさ」

『そうか……』

先とは一転し、鋭い声を発するヴラドに思わず戸惑いつつもロザリーが答える。それを聞き、ヴラドが思案顔を見せた。

脳内ではこの先どのような手を取るべきかが思考される。生前学んだ技術に“分割思考（マルチタスク）”と呼ばれるものがあった。

才能がなかったのか、二つまでの分割が限界であったがそれでも今のような状況では非常に力強い技能である。

巧みな戦闘者は戦闘中でもそれを行い、常に先を予想して戦う。ヴラドの思考はまさにソレに通ずるものがあった。

暫く。時間にして数分程沈黙したまま瞳を伏せていたヴラドだが、おもむろに瞳を開くと口を開いた。

『前程としてまず、既に私達は捕捉されていると考えよう。最悪樹

海辺りから何かしらの目で見られていた可能性も否定出来ない。未だ接触してこないのは疑問だし、幾つか理由が挙げられるが今は無視しよう。ロザリー、魔道具の使用あるいは魂術の使用を察知出来るか？』

「可能なのだわ。ただし、今の私は全盛期とは比べるまでもないから、妨害された場合はその限りじゃないのよさ」

『なら他者から気配、あるいは行動を隠蔽する為の結界のようなものは可能か？』

「それも可能なのだわ。でも、結局は今の私以上の実力者に妨害されたりすればオシャカなのよさ」

『ふむ……』

ロザリーから得た情報を元に、先ほどまで考えていた思考を修正していく。そして更にヴラドはロザリーに質問を重ね、エルにも意見を求める。

その度に脳内で浮かぶ形は削られ研磨されていく。己の思考を多角的に分析し、そこに主観と客観の差異を補正する。

幾つもの案を束ね、そこからより妥当だと思われるものを結び、二人に質問をしては修正していく。

それは生前教官がよくおこなっていた思考理論だ。残念ながらヴラドは教官に一歩も二歩も及ばないレベルでしかこれを会得出来なかったが、少なくとも免許皆伝は貰っている。

一つの思考を主観とし、分けた思考で客観的に多角的にソレを見上げ形を整えていく。

時間にして一時間近く。ようやく形になったソレをヴラドはそれでも不安に思う。なんせ情報が足りない、作戦はどう繕っても穴が多い。それでもやらなければいけない……

『ロザリー、結界を頼む』
「了解なのよさ！」

日本語ではない、恐らくはこの世界の言語で何かを呟いた直後、部屋がなんともいえない不思議な圧迫感に包まれる。
本能的にそれが結界だとヴラドは理解し、己が拙いながらも編み上げた作戦を相手に気取られる前に話そうと、全員に話だした――
――

第二十一話（後書き）

後書き

１２／４　挿絵いったん仕舞いました。
ギャルゲ塗りで塗りなおししようと思います。

第二十二話（前書き）

第二十二話

「お兄様ッ！　十二時の方向から接近してくる気配三つなのよさ！！」

『予想以上に早いな。増援の為の魂術が使われた気配は？』

「ないのだわ」

『と言うことは私兵か……よし、出来るだけ戦闘は避けたい。人ごみに紛れつつまくぞ』

「了解！」

「りょうかい！」

短い会話の応酬後、ヴラドが全速力で路地裏からメインストリートへと躍り出る。その巨躯に似合わぬ俊敏さで石畳を踏み込み、エルがその首筋に抱きつき縦横無尽に襲い掛かる重力に必死で耐える。後ろにはロザリーがぴったりと併走し、その腕にはリアンが抱きかかえられているのが見えた。

運悪くその巨体に吹き飛ばされた小柄な魔族が罵声を口にするが、ヴラドには何て言っているのか分からない。

そもそもそんな余裕などなかった。どちらにせよ捕捉されているのなら、事態が悪化する前にこの街を出ようとヴラドは宿屋で話す。

それに際し、一日だけ時間を置いた。理由はヴラドの肉体の把握。身体能力だけではなく、その有する特殊な力まで及ぶ。

その間に何か増援を呼ぶ魂術。連絡系の術が使われていないかロザリーには注意してもらっていた。

相手から妨害されていないと仮定するのなら、その手の道具や術は使われていない。そうして得た時間で街を出る準備を進め、今日、こうして宿屋を後にしたのだが……

「お兄様！　不味いのよさ……地の利は向こうにあるのだわ。気配、段々と縮まっているわ。このままじゃ数分もしないで接触するのだわさ！」

『市街地を巻き込む腹積もりか――？　最悪住民毎攻撃してくるならそれでいい。このままっすぐ南門に向かうぞ』

予想以上に相手の行動が早かった。念のために気配遮断の簡易結界すらロザリーが用意したが、それすら通用しない。

ロザリー曰く、街そのものを網羅していれば、空白の空間が気配遮断で出来てしまう。それで感知されたのかもしれないと、そう口にしていた。

街一つ手玉に取るようなのが少なくとも相手だと言っているようなものである。正直舌打ちの一つはしたいくらいだ。

人ならざる者になり、生前ですら人を殺めた経験だってある。それでも可能なら関係ない者を巻き込むつもりはなかった。それは偽善ではなく当然。人としてなら当たり前の感情。

結局はそれこそ甘えだったのだろう。こうして相手は住民を巻き込むはずはないと言う、平和ボケしてひよったヴラドの思考を嘲笑って真っ直ぐ向かってきている。

だから切り捨てる。名も知らぬ有象無象を盾とするのを是とした。それで家族を守れるのなら、幾らでもヴラドは汚名も罵声も噛み締めて見せよう。

辿り着く先が断頭台だとしても、それまでの過程で家族が幸せならばヴラドは迷うことなくその道を進む。

「パパ……」

『大丈夫だエル。私は誰にも屈しはしない。その為に力を求めたの

だから』

絶対強者。何者にも屈しない存在。それは昔から憧れたあまりにも遠い彼方。

――そして今。抗う力が私にはある……

「相手はきっと魔神なのだわ、今のお兄様では勝てないのだわさ。私を差し出せば助かるかもしれないのよさ」

人波を縫うように駆け抜けるヴラド。その横に後ろから追いついて来たロザリーが、まるでヴラドの心を見透かすかのように息も切らせず口にする。

その表情には覚悟が見え隠れしていた。確かに、相手にロザリーを差し出せばヴラド達は見逃してくれるかもしれない。

ヴラドがその辺に居る有象無象と変わらぬ思考ならそうしただろうか。己こそが一番であると。自己中心的であればその選択肢を選んだだろうか。

どちらにせよ。ヴラドがヴラドである限り、その質疑は意味を持たない。

『馬鹿な事を言っている暇はない。私が私であり、お前がお前である限り。私は何時までも守り続けてみせる――――家族とはそう言うものだ』

今更何を言っているのかと。そうヴラドは思う。そんなこと、ロザリーと出会ってから幾度も口にしている。

そしてそれを理解出来ない筈がない。だからこそ、何故そんな事を口にしたのかが分からなかった。

「ありがとうお兄様……」

そう言ってにっこりと笑うロザリーは綺麗だ。今も四肢を動かし、広いながらも人通りの多いメインストリート。

通る人々を時に巻き込んでの全速疾走。追いつかれれば戦闘は免れない。そんな状況に不似合いな笑顔。一瞬追われる者であることすら忘れそうになるが、瞬時に首筋に一層込められたエルの力で我に帰る。

「ぱぱ……」

『大丈夫。ああ、大丈夫だとも――』

それはエルに言い聞かせているのか、それとも自分に言い聞かせているのか。

口にしたヴラド自身よく理解してはいなかった……

「お兄様……」

ロザリーの警戒した言葉がヴラドの耳朶に響いた。その原因もハッキリと認識している。

あからさまな敵意が南門の目前。ちょっとした広場の先、門の反対側の雑踏から漏れ出していた。

獣としての鋭敏な感覚がそれを感知し、ヴラド自身気づかずに毛がブワリと逆立つ。エルが同じ知性ある者から向けられる独特の敵意に戸惑い、ヴラドの首筋にギュッとしがみ付く。

『ああ分かっている。どうやらここまでらしい――』

（どうする？　ここで戦闘するのは構わない。だが、相手の実力は不明。しかも戦闘中に新たな増援が来ては目も当てられない……だが背を見せていい相手でもないだろう）

葛藤がヴラドを苛む。そもそもエルがこの状態で、ヴラド自身まともに戦えるのかも疑問。知性ある相手との戦闘は昨日一日で行った、ロザリーとの模擬戦くらいだ。

それで相手を圧倒できると思うほど、流石にヴラドは能天気でもない。

――ならどうすれば……

「お兄様。安心して下さい。こちらを舐めているのか、どうも寄越した兵の実力、私程ではないのだわ。お兄様にも一歩劣るかもしれないのよさ。これなら戦わなくても切り抜けられるのだわ。だからお兄様、ロザリーを信じて欲しいのだわさ」

真摯な瞳がヴラドの瞳と交差する。自信に溢れた声音。まるで悩むヴラドの心境を察して口にしたかのようなタイミング。

葛藤は一瞬。そもそも家族は無条件で信じるものである。少なくともヴラドはそう認識していた。

『分かった。ロザリーに任せよう』

「ふふっ、有り難うなのだわ。それじゃあ、お兄様の為にも一発大きいの行くのよさっ！」

そう言うとロザリーの肉体から新緑色の光が零れだす。高ぶった感情に呼応し、今まで抑えられていた魂力が可視化しだしたのだ。

まるで陽炎のように揺らめく膨大な力に周囲の魔族がなんだなんだとざわめきだす。最盛期の半分にすら遠く及ばないものの、それでも魔神レベルの実力を未だ秘めるロザリー。

存分に振るう。一握りだけが到達出来る領域。兄と呼んだ者の期待に応える為に、ロザリーは己の感情を高ぶらせる。

その本気による力の解放はテイトローイがそれなりに大きな街と考えても、そう何度と見られる光景ではない。

濃密な気配、重圧な存在感にヴラド達ですら驚く。封印されてなお力強い魂力の輝き。それなら最盛期ではどれだけの実力を保持していたのか、容易い想像を許してくれない。

「来たのだわ」

ギャラリーが増え、遠巻きに広場の外周を埋め始めた頃、北門の方角からソレは現れた。

黒いローブ。人型の筋肉質の肉体。背中に生えた漆黒の悪魔のような翼。このテイトローイの領主の館に居た女性と同じ種族だ。

ヴラド達の視線と現れた三人の追跡者。その両名で視線が交わる。領主から放たれた追っ手と知り、更にざわめくギャラリー。それでも手を出す者はいない。

厄介事はすべからく己で解決せよ。力こそ全てのこの世界の常識である。状況を見守ろうと静まるギャラリー。

瞬間、グッ――と。追跡者の肉体に力が篭り、踵に爆発的な力が込められたかと思うと、人間では不可能な速度でそれぞれヴラド達に肉薄してくる。

瞬く間に詰められる距離。僅か百五十メートル程度しかなかった距離は、数秒もしないで零になるだろう。

「大地よ大地。私の名は“深緑の魔神”。名に従いその力を示しなさい――『隆起（フォ・エライアス）セシ緑』」

零になるより早く、最速で紡がれた力ある言葉がロザリーの魂力を食らい、定められた事象を解き放った。

一瞬だった。言葉が終わるのと同時、地面が揺れたかと思うと石畳が裂けた。まるで奈落のようにぽっかりと口を空けた大地は三人の追跡者を飲み込む。

それで終わるかと思った瞬間、“地面が爆発した”。緑色の何かが地響きと共に裂け目から次々と飛び出し、何十メートル。いや、百メートルにも達する巨木を生み出していく。

見ればその枝葉が追跡者を拘束するように絡み付き、そのまま飛び出す巨木の中に消えていった。

『これが、魂術……』

「おねえちゃんすごい……」

「昔なら、森一つ生成してみせたものなのだわ。さっ、お兄様行きましょう。グズグズしていては相手の思うつぼなのよさ」

『ああ……そうだな。エル、しっかり掴まっていろ。少し速度を出すぞ。折角ロザリーが作ってくれた時間だ、有効活用しない手はない』

「うんっ！」

ロザリーの魂術に目を輝かせたエルが大きな声で頷き、ヴラドにぎゅっと力強くしがみ付く。それを確認し、巨体に見合った鋼のような筋肉が凄まじい推進力を生み出し、一陣の風とヴラドは化す。

その後ろから追走するロザリー。急に出現した直径百メートル四方の自然林にギャラリーは驚愕し、誰もがヴラド達が門を抜けた事に気づかなかった――――

「放った三名、追跡に失敗した模様です」
「ククッ。所詮は兵士（ポーン）。幾らでも補充の利く駒に過ぎない。次はもう少し実力の高い兵を四名選び追わせろッ！」
「ハッ！」

館の主。テトローイの領主の命に前回報告した女性が頭を垂れて謁見の間を後にする。
それを見届ける事無く立ち上がり、鋭く尖った犬歯を剥き出しにして領主は笑う。

「どこまで逃げ切れるか一興よ。ふふ、ふは、ふはははははっ！！」

暗幕に包まれた部屋の中、ヴラド達が街をまんまと抜けたにも関わらず不気味な笑い声を領主は上げ続けた……

第二十二話（後書き）

後書き

次はもうちょっと早く更新しようと思います。スランプには負けていられません。

そうそう、何かＶＲＭＭＯモノがちらちら流行りだしたようなので当方も触手伸ばしてみました。

〔電脳世界で踊れ〕と言うタイトルです。結構本格派のＶＲＭＭＯＲＰＧを目指そうと思っています。

コンセプトはオンラインゲームがやりたくなる、です。少しでも思ったら作者の勝ち（誰と戦っている）

まだ二話ですが、次からゲームに行きます。よかったらそちらも目を通してやってくれると嬉しいです。

軽いＶＲＭＭＯモノじゃないので、なろうではウケはよくないかなぁと心配ではありますが。

第二十三話

『ガァアァアッ！！』

巨大な体躯が重力を食い破るかのように躍動する。魂すら振るわせる咆哮と共に、宙に舞い上がった巨体から渾身の爪撃が繰り出され、追っ手の一人を肉塊に変えてしまう。

ブチブチと肉と筋繊維を引き裂く感触が伝わり、人であった頃の僅かな良心が悲鳴を上げた。

それも刹那のことであり、ロザリーの言葉に掻き消える。

「私達を追うにはちょっと役不足なのだわさっ！」

ヴラドがその肉体を活かし、比較的力の弱い追っ手を粉砕している間、ロザリーが頭一つ分実力が抜けた、黒いマントに身を包んだ人型の魔族を優々とあしらって見せる。

気合一声。蛇腹剣が唸りを上げその顎（あぎと）で対象を食らわんと襲い掛かった。

「……ッ」

まるで変幻自在、その特性上鞭としての側面を持ちながら、剣としての切れ味を誇っている。長槍すら越える間合いを持つこの剣は、その要求技量を考慮しなければ破格の武器と言っていい。

まるで見えない糸で操られるかのように、追跡者が無様に蛇腹剣を回避する。顔こそマスクで隠れて見えないが、その雰囲気が必死であることを証明している。

地面を削り、波打つように襲い、蛇のようにクネリその鋭い刃で命を狙う。

「それっ！　私に構ってばかり居ると――――」
「ふところがらあきだよっ！」

ロザリーが告げるより早く、暴力的なまでの筋力により生み出された純粋な脚力でエルが一瞬にしてマントの元に潜り込む。
そのまま小柄な身体を利用し、クルリと慣性を誘導し回転、一際強力な裏拳がその腹部に突き刺さった。
篭手による硬度の威力も付加され、その一撃は内側から肉体を破壊し、凄まじいダメージを相手に与える。

「――ガッ！？」

口元から唾液が飛び散り、痛みに目が飛び出さんばかりに見開かれ、ガクリと膝をつく。

「さようならなのだわ。名も知らぬ追跡者さん」

ひゅんっと風を切る音が鳴った瞬間、ごとりとマントの魔族の首が転がり落ちる。一瞬遅れ血飛沫があがり、エルが慌てて飛び退いた。

『片付いたか』

ロザリーが恐らくリーダー格と思わしき魔族を屠ってからそう時を待たず、ヴラドが合流する。辺りを見回せば数名の死体が転がっており、緑豊かな草原に赤を添えているのが見えた。
ヴラド自身もその白い体毛の何割かを赤に染め、口元と爪は特に酷い。力の消耗を抑え、炎の力を使わなかった為だ。
今はまだ相手も出し惜しみしているのか、先程のリーダー格で指

揮官級。残りは兵士級（ソルディアット）というところだろう。
十分ヴラドどころか、エルでも相手どれる階級（レゾニア）だ。空を見れば既に月が天を我が物顔で照らし、周囲は夜の帳に覆われている。
逃亡一日目だが、どうやらとりあえずの所はなんとかなりそうだと溜息をヴラドが吐き出す。

「溜息は幸せを逃すのだわ、お兄様」
『この世界にもその言葉があるのか？』
「ためいきをすると、しあわせがにげるの？」

エルがじゃあずっと溜息なんて吐かない！　と幼い決意を込めるが、それをヴラドがただの気のもちようだとさとす。
溜息を零す時は何か気持ちが負に寄っている事が多い、結果的に負の感情は嫌な思い、出来事を運びやすく、幸せが遠のくのだ。

「まっ、言葉は違うけど、この世界でも同じような諺とかはあるのだわ。それより、溜息なんてどうかしたのよさ」

どうやら溜息うんぬんは切っ掛けであったらしく、本命はそれが聞きたかったらしい。

『いや、な。どうも上手く事が進みすぎてる気がしてならない。確かに気配絶ちの結界で時間を稼ぎ、距離を離れたのは良いが、結局追いつかれてしまったのは手落ちだろう。だが、分散させているのか、一隊ずつしか追跡者がこないのは妙だ。昼間と合わせれば二組。先発隊としても少ない。本当に私達を捕縛、ないし抹殺する気があるのか……』

本当にこちらを殺す気なら、もっとマシな戦力を寄越してもいい筈なのだ。これではまるで、意図的に段階を得て追跡者の実力を上

げているような、そんな気がヴラドには思えてならない。
ほんの僅かだが、昼より先程の相手の方が実力が高かった。少なくとも、街の脱出時にロザリーが見せた魂術。あれを耐えられるレベルを追っ手にするのは常識だろう。
それがこの様なのだから、何かしら向こうにも思惑があるに違いない。不気味なことこの上ないが、逆に言えばそれはヴラド達にとっては猶予でもある。

『目的地まで後三日か』
「リィール山脈地帯。丁度北と南を別つように聳える大山脈なのだわ。このまま北に北上すれば、いずれぶち当たるのよさ。特殊な地帯で、魔道具や魂術の効きが悪いから、逃げ込むには打ってつけなのだわ。つまり……」
『残り三日を逃げおおせれば私達の勝利、と言う訳か』
こくりとロザリーが頷く。こうして話合っている間も、ヴラド達は草原を駆けている。リアンはロザリーが抱え、エルは首筋に跨っている。
時速四十キロオーバーの速度は、心地よい風をヴラド達に運んでいた。

「そうなのだわ。それに、そこで会ったことはないけど、リィール山脈は蛇竜（ナーガ）一族の住処でもあると言うのよさ。ナーガの一族は魂術に長け、長は代々予知や占いを得意とすると聞くのだわ。この先の為にも、なんとか会っておきたいのよさ」

蛇竜、じゃりゅう一族。その名の通り蛇のような半身に人型の上半身を持つ種であり、竜から派生した一族だと伝えられている。他との交わりを拒み、独自の文化と規律を重んじる種でもある。
ロザリーがそう話すが、それはつまり、出会えても門前払いされ

るのではないのかとヴラドがいぶかしむ。

「心配ないのだわ。昔、一度ナーガの幼い娘を助けた事があるのよさ。閉鎖的だからこそ、一族は身内を大事にするし、受けた恩は忘れない。内心はどうあれ、頼みの一つや二つは聞いてくれる筈なのだわさ」

『なるほど。流石長生きはしていないと言ったところか？』

「し、失礼なのだわさ！　これでも乙女なのだから、言い方ってものがあるのだわ！　抗議、抗議なのよさ！」

挙動こそ怒ってますと言った風情だが、どうも見た目も相俟って迫力に欠ける。それに口程内心では怒ってないのも、それに拍車をかけた。

時刻は既に零時を越しているが、二人が休む事はない。人間とは違い、その体力はまさに人外級、休息にしたって一日や二日でどうにかなることはないだろう。

薄暗い、外灯の一つもない、月の光だけが頼りの草原の中で、ひたすらに三人と一匹はリィール山脈を目指し続ける……

『昨日よりは手強いかッ』

ロザリーが追っ手の気配を読み取り、万全の状態で迎え撃ったのは良いが、その実力は確実に前回を上回っている。リーダー格含め、全員が指揮官級だ。

振るわれた袈裟懸けの爪も、マスクに黒のマントと代わり映えしない二人の魔族に受け止められてしまう。
ナイフと爪が交差する独特の音が響き、二度、三度と攻防が続く。

『チィッ』

ざわり、肌に悪寒が走るのと同時、その四本の四肢で地面を強く蹴飛ばす。一気に数メートル程下がったのと同時、元居た地面が灼熱の炎に包まれる。
熱風がヴラドにまで届き、ぶわりと毛を逆撫でた。炎には滅法強い肉体だが、生物としての本能が警鐘を鳴らしたのだ。
空いた距離を詰めることもなく、追跡者達が続け様に魂術を発動させる。こちらが炎に強いと知らないのだろう、放たれた特大の火球を腕の一振りで消し去り、続いて迫った無数の見えない真空の刃を、振動を察知してギリギリで回避。
最後の一人が放った氷の槍がヴラドを掠め、背中に浅い傷を作り出す。接触した部分がパキパキと音を立て凍り付いていくのを確認し、仕方なしに全身に炎を纏って氷を溶かす。

『錬度も確実に昨日を上回るか、厄介だな』

チラリとロザリーに視線を向ければ、流石と言うべきかもう間も無く決着が付きそうだった。そうすれば程なくエルとロザリーが助太刀に来るだろう。
そう判断し、無理に力を消費してごり押すよりは、時間を稼ぐことに決める。地面を蹴り出すのと同時、風の刃が側を通り抜けていく。
移動にランダム機動を混ぜ、魂術の狙いをつけ難くする。右、左、斜め、時に宙と、凄まじい勢いで揺れ動く肉体は同時に強烈な過負荷、Gを与えてくる。

人間であれば苦痛の領域のそれも、獣であり、身体能力に秀でた身でもあるヴラドには関係ない。三人で纏まる追跡者の周りをグルグルと円を描くように周りつつ、隙を見てその凶悪な爪を振るい、即座に離脱。

ヒットアンドウェイで確実に相手に被害を与えていく。高速で駆け巡る為に、相手もどこから攻撃が来るのか分かり難い。体力の消耗こそ激しい動きだが、確実に足止めと時間稼ぎには有効だ。

「お待たせなのよさ！」

「エルもいるよ！」

リーダー格の追っ手の首を刎ねるのと同時、ロザリーとエルが援護に来る。そのまま振るわれた蛇腹剣が、ヴラドと追っ手の均衡を遂に破った。

撓り、弧を描いて襲い来る刃に一人が捕まり、呆気無くその右腕を斬り飛ばし、別の一人にはエルの怪力による拳が真横から突き刺さる。

それでも撤退しようと無事な一名が前衛を勤め下がろうとするが、それをヴラドが許さない。正面から助走の勢いを得て威力の増した、鋭い爪を振り下ろす。

キィーンッ！　と、追っ手の手に持っていたナイフと爪が交差し甲高い音が鳴り響く。ギャリギャリと音を立て逸らすようにヴラドの爪を受け流すが、真横から振るわれた蛇腹剣があっと言う間にその首を刈り取ってしまう。

『恨みはないが、追って来ると言うなら容赦はしない』

そう口にし腹を庇って後退していく一人に追いすがり、そのまま無防備な背に爪を振るう。肉を断つ生生しい感触も一瞬で、あっさ

りその脊椎を粉砕し息の根を止める。
別方向に逃げ出した一人も、エルに追いつかれその金属の爪で深々と心臓を一突きされ絶命。追っ手から零れた魂を吸収し、僅かながらも体力が回復したのを確認してから二人と合流する。
そう時間をおかず、草陰に隠れていたリアンが飛び出してきて、無事に全員揃う。

『不味いな。次は恐らく騎士級（ナイト）が出張ってくるかもしれない。そうなると、基本の動きは変わらなくても、能力を出し惜しみ出来ないだろう。消耗も今までの非じゃなくなる』
「完全にこちらの動きを把握しているんじゃなくて、進行方向を予測して兵を差し向けているのか、追撃に間隔があるのが幸いなのだわ。早く山脈に入って、水浴びがしたいのよさ」

汚れは魂術でも取り除けるが、爽快感と言う意味では水浴びには遠く及ばないとロザリーが愚痴を零す。その術にしたって、魂力を消費するのには違いなく、節約するなら使わないにこした事はないのだ。
自称乙女であるロザリーからすれば、不衛生な今の状況はいささかに耐え難い状況と言えた。
ヴラドも血塗れだし、エルも武器と衣服に血が付いている。血臭が染み付き、嗅覚はそれに慣れてしまった。
エルはむしろご飯！　と言った感じで追跡者から血を補給しているが、ヴラドとロザリーは丸一日は何も食べず、そして飲んでいない。
ロザリーはともかく、構造的には獣であるヴラドにはいささかキツイ。周囲を見渡し、次からの襲撃は今まで以上になるなら、ここで体力を回復しておくのもいいだろうと結論づける。

『暫く休憩しよう。魂力も自然回復出来る範囲で使っていい。流石

に水浴びくらいはしてもバチは当たらないだろうさ』
「流石お兄様！　話が分かるのよさ！！　服も洗っちゃうから、お兄様は向こう向いててなのだわ」
『エルの分も頼む』
「了解なのだわさ」

諸手を上げて喜ぶロザリーが、にやりと笑みを浮かべわざとらしく衣服に指を掛け告げるが、ヴラドは動揺しない。
見た目美少女であるロザリーの肉体に興味はないかと言われれば、あると答えるだろうが、家族に欲情はしないものだとヴラドはその強力な精神力で煩悩を掌握していた。
クルリと背を向ければ、衣擦れの音が耳に届き、エルとロザリーの楽しげな会話が聞こえる。一見和やかな雰囲気だが、少し手前には死体が四つ並んでいるのを思えば異常だろう。
まさに、異常こそが今の日常なのだと、ヴラドは再確認した思いであった……

第二十三話（後書き）

後書き

久しぶりの更新。本当に申し訳ないです＾＾；
時間はまぁまぁあるのですが、絵の精進とかにも割いてるので思うようにいかない……

第二十四話

既に太陽が没し、世界は宵闇に閉ざされている。
星月のみが世界を柔らかく照らし出す、魔性が跋扈する時間帯の中で、複数の影が舞い踊っていた。

『骨の一欠けらすら残してはやらんぞッ！！』

獣の咆哮にも似た鋭い声があがり、同時に振るわれた腕に纏わり付いた高温の炎が追跡者を包み込む。
悲鳴をあげる時間すら許さずその身を焼き尽くし、残ったのは一山の灰。
一瞥すらくれず即座に身を翻し、苦戦を強いられているエルの傍に向かう。

「パパ！」

致命傷はないが、それでも至る所にかすり傷を負ったエルが駆けるヴラドの姿を見つけ声を張り上げる。

『エルッ！！』
「あっ…ぐぅ…ッ！？」

子供ゆえの行動が生み出した隙を追跡者は見逃さない。
ヴラドが声を出すのと同時、その握られた短剣がエルの小さな腹を深く切り裂いていく。
既にボロボロであったワンピースは大きく裂かれ、その下の白い腹から真っ赤な鮮血が噴出す。
エルの顔が驚愕と苦痛にゆがみ、その唇が小さく「ぱぱ……」と

紡ぎ出すと地面に倒れ伏した。
瞬間、常に冷静であろうとする理性が吹き飛んだ。荒々しい獣の本能が目の前にいる追跡者をぶち殺せと、金切り声をあげる!!

『キサマァアァアッ!!』

気づけば全身から炎を噴き出し、憤怒の表情を隠しもせず浮かべたヴラドが一際大きく跳躍。
ターバンや巻き布、マントで身体を隠した追跡者に覆いかぶさる。
グルルルルと獣の低いうなり声が漏れ、噛み殺そうと口を開け食らいつくが、両腕で顔を抑え込まれままならない。
鋭い爪がむき出しの前足で、抑えた肩を切り裂けば、追跡者の隠された口から痛苦の声があがった。

「……クッ!?」

傷口を押し広げるように爪を動かせば、面白いくらいに無様な声が目の前の肉人形から漏れ出す。
魂術は集中力を要するため、痛苦に苛まれた今の状態では使えないだろう。
純粋な筋力で上回るヴラドを退ける手段を、目の前の追跡者は持ち合わせていない。
エルが受けたであろう苦痛を倍に。いや、それでも許しはしないと肩から先をついに切断。
ごきりとぶつりと、嫌な音が響き、追跡者の口から絶叫が迸った。
同時、抵抗が緩んだ手を力任せに振りほどき、そのまま頭部を噛み千切る。
口内に広がる不快ではない味。滴る真っ赤な液体。絶命した肉袋……

（これは何だ？　私はこんなにも残虐な嗜好を持ち合わせていただろうか？）

まるで急激に熱せられた熱が、徐々に冷めていくように。思考が常の状態へと戻っていく。

少なくない動揺だった。エルが死んだのならまだしも、吸血鬼たる彼女がその程度の一撃でどうにかなるものでないと、少なくとも理解していた筈。

それがいざあの柔らかな腹部が銀色の凶器に裂かれた途端、脳裏には押さえきれない怒りが沸き立ち、どうしようもない残虐な思考が駆け巡った。

残虐性に驚いたのはあるが、それより感情を己で制御出来なかったという点が、どことなくヴラドを不安にさせる。

「お兄様！！」

ふと掛けられた声に振り向けば、ロザリーがリーダー格と思わしき悪魔のような翼に角を併せ持った男性魔族を片付け終わり、そのままこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「手間取ってしまったのだわ。いよいよ相手の力量もこちらに差し迫ってきたのよさ」

ロザリーの言葉に内心不安がよぎるが、それを追い払うように頭を振り、怪我の痛みに意識を失ったエルをそっと背中に乗せる。

「あら、随分と深くやられたのよさ」

どうやら気づいてなかったらしく、白い毛が塞がりきっていない傷口からあふれ出した血に染まっていく。

それを見つけたロザリーがさほど驚いた様子もなく口にした。
長い時を生きたロザリーにとって、致命傷にすら値しない傷は心配するほどのものではない。

「一応癒しの術も使えるけど、どうするのだわさ？」
『いや、大丈夫だろう。見た目ほど重傷ではない。もう傷も殆ど治癒しているからな、無駄に力を消費するのは避けたい』
「了解なのよさ。このままのペースならあと一日もせず山脈地帯に入り込めるのだわ、休憩は取りたいけど、ここは急ぐのよさ」

ロザリーの言葉に首肯する。テトローイかのら逃亡も既に二日と少し、幾度もの追っ手との交戦。
最初こそ余裕もあったが、今では能力や魂術を使わないと退けることが叶わなくなっている。
次あたり、恐らくはこちらとほぼ同等、あるいは上回る戦力がぶつかることも十分にありえた。
それを倒したとしても、次はそれを上回る敵がやってくるだろう。
勝てる見込みは高くない。
楽勝だと、なんとかなると楽観できるほどヴラドは能天気ではないつもりだ。
それなら多少無理をしてでも距離を稼ぎ、追っ手との交戦数を減らし、早めに山脈に入り込みたい。
相手が確実に追跡を諦める保証はないが、今はそれに全力を傾ける時だ。
長居は無用と、暗闇に沈んだ草原を歩き出せば離れていたリアンがそっとどこからか戻ってくる。
獣にしてはやはり知能が高いと、既にただの獣とは思ってないヴラドが感心した思いを抱く。

『痛むかもしれないが、許してくれよ』

小さく背中のエルに謝り、ロザリーがリアンを抱え込むのを見届け足腰に力を込める。

同時に四足から噴出す紅蓮の業火。まるでジェット噴射のようなそれは、純粋な脚力から得られる速度に更なる速さを与えてくれる。

戦闘中に本能的ながら覚えた使い方だが、長時間使えばそれなりに消耗するだろう。

それでもここは急ぐべきだと、こちらの位置を知らせるかもしれない危険をも承知で走り続ける。

横目にロザリーを見やれば、風の魂術で追い風を受け、ぴったりと追走してくるのが見えた。

次の追っ手がくるまでのこの時間こそ、まさに命運を分かつだろうとヴラドは感じ取っていた……

心の中でどうにかなるだろうと高をくくっていたのかもしれない。

吐き出す呼気は荒く、白い毛皮は返り血以外の赤で染まっている。

折角全快したエルも、先の戦闘で再び手傷を負い、それでも走り続けるその顔は痛みと不安で涙が浮かんでいる。

この中でもっとも実力に優れたロザリーですら、今は僅かな疲労が窺えた。

それでも足は止まらない、ヴラドですら感じ取れる強大な気配が確実に迫っている。

ここで足を止めれば確実に追いつかれるだろう。感じる圧迫感はそれこそ今のロザリーをも上回る。

相手が一人だとか、そんなのは気休めにもならない。まともな食

事を取っていない今のヴラドでは尚更だ。

「不味いのよさ……このままじゃ確実に追いつかれるのだわ……」

ロザリーの言葉を肯定するように、じわじわと、だが確実に迫り来る圧迫感は強まっていく。

「……パパ」

「な～……」

エルとリアンの不安と恐怖が混じった声に胸が締め付けられる。動物の本能からか、リアンはロザリーの腕の中で尻尾を丸めがくがくと震わせていた。

エルも気丈に耐えているが、その実手足は震え、このままではそう遠くない先倒れてしまうだろう。

ならいっそのこと先手を打って迎え撃つか？　と考えるが、ロザリーから聞いた階級一つの間に横たわる実力さを思い出す。

相手は少なくと万全のロザリーと同等かそれ以上。対してこちらは体力も魂力を消耗した状態。

人数による手数を考慮したとしても、あまりに勝算のない戦いと言うしかない。

（どうすればいい？　どうすればこの状態を乗り越えられる？）

ふと視線を感じればロザリーがヴラドを見つめている。

その視線から感じ取れる感情は複雑だ。同時にとても嫌な予感を感じた。

「お兄さ――――」

『ロザリー、エル、リアン。全員気づいてるだろうが、今私たちは

危機的状況にある』

だから何かを言う前に先に口にする。何を言おうとしたのか、ヴラドには分かってしまったのだから。

『このままじゃ追いつかれるのは確実だろう……勝てる見込みは高くない。だから私が囮になろうと思う』

そう口にした瞬間のエルとロザリー、そしてリアンの顔をなんと言葉にすればいいのか、ヴラドには到底思いつかなかった。

驚愕、不安、恐怖、絶望、諦観。様々な負の感情を混ぜ合わせたそれはヴラドの案を賛成したものではない。

それでも、どの子も非常に聡明だ。どちらにせよ、誰かが足止めに回らないといけないと、そう理解してるだろう。

「そ、それならエルがいくよ！　ほらっ、エル、がんじょうだし、きずもすぐになおるから！！」

「お、お兄様もエルも馬鹿なこと言わないのよ！？　第一、それならそもそもの原因は私にあるのだから、私が残るのが道理なのだわさ！！」

なるほど、確かにエルの頑強さはその再生能力もあって時間稼ぎには向いてるだろう。

なるほど、確かにこの追跡者の最終目標はロザリーかもしれないし、実力的にも理に適ってるだろう。

ではヴラドは二人の案を呑むのか？　どちらも正しいのだから、どちらを選んだとしても問題はない。

それこそ否だ。誰が娘を、妹を死地に送り出す兄が、父が居るというのだ。

もしかしたら道の半ば、こんな場所で果てることになるかもしれ

ない。それでも……それでも家族を犠牲とするのであれば、迷うことなくヴラドは己を犠牲にしてみせる。
誰が出ても悲しみはある。それは己とて同じだというのは十分に理解してなお、ヴラドはゆっくりと二人に背を向けた。

「パパッ！？」
「お兄様！！」

悲痛な声だった。本当に、本当に心から行かせたたくない、失いたくないと言う想いに溢れた悲鳴だった。
胸が痛む。もっと別の方法はなかったのか。バラバラに逃げるのはどうか。否、結局は同じこと。
追いつかれるのが必然であり、誰かが犠牲に生贄となるしかないのであれば、今の選択は最上。
二人にとっては違うかもしれないが、少なくともヴラドにとって最上足りえる選択はこれ以外にない。

『どちらにせよロザリーがいなければナーガの一族には会えまい。それにエル、私に娘を危険と承知で死地に送れと言うのか？　馬鹿な、出来る訳がない……なに、私だってむざむざやられたりはしないさ。こんなところで果てる程、私の夢は安くはない』
「パパ……」
「お兄様……」

納得はいかない、それでも我慢するしかない。そんな声音だった。
時間がない、もう行かねばならないだろう。迫る気配は今もどんどん大きくなっているのだから。
もしかしたら最後となるかもしれないのに、満足な言葉一つ遅れない今がヴラドは恨めしかった。

『後は頼むぞロザリーッ！！』

二人のなお、それでもと言う声を背中に流し、ヴラドは地面を駆け抜ける。

ロザリーが無理やりにエルを引っ張りリィール山脈に向かう気配を感じ取り、ほっと息をつく。

後は己が無事生き残り、合流するだけでいい。言葉にすればなんと簡単だろうか。

今や物理的にすらと口にできそうな圧迫感は、さしものヴラドですら肝が冷える思いだった。

油断すれば震える足腰に渇をいれ、力強く跳躍！　ゆらりゆらりと陽炎のように濃厚な気配を放つ人物の前に躍り出るッ！

『すまないが、ここから先は通せない。黙って引き返すか、私の糧と消えるか、好きに選ぶがいい！！』

「遺言はそれでよろしいですか？　主人の命です、その命ここで貰い受けましょう」

そう嫣然と微笑んだ人物は、テトローイ領主に報告をしていた女魔神であった……

第二十四話（後書き）

後書き

多くは語らない。すまないとだけ書かせてもらいます。
とりあえず、今からクリフォトの感想を返していきます。
駄目な作者で本当申し訳ない……

第二十五話

『ほざけ！　この地で果てるのはどちらか思い知らせてやろうッ！！』

まるで小悪党のような台詞だが、そうでもしないと気力が萎えそうであった。

殺される恐怖は少ない。だが、生物的な上位存在を敵に回すという未知の恐怖は、なんとも拭い難かった。

階級が上がるというのは、肉体的優劣に優するだけではない。

そもそも本来の進化はより上位存在への昇華であり、魂もまたそれに見合ったものへと変化する。

いや、本質的には魂が先であり、肉体はその付随品だろうか。

とにかく、そんな己よりも一段二段と存在の階級が異なる存在を前に、恐怖を感じないというのは無理なことであった。

それでも後戻りはできないと、腹部に力を込め、萎える意志を燃え盛らせる。

『ふんッ！』

気合一声。

出し惜しみはなしだ！　と、前足を振るい灼熱の炎を生み出す。

「脆弱な炎ね」

『なっ！？』

艶やかに笑った女魔神が迫る炎の波に向け、そのたおやかな白く細い腕を無造作に振り払う。

ただそれだけで、まるで巨人が薙いだかのように炎は掻き消され

てしまった。
それでも手を緩める訳にはいかない。少しでも、一秒でも多く時間を稼がなければならないのだ。

『ならば、これでどうだ！』

素早く後方に飛び退り、そのまま巨大な口を開く。同時、口内に真っ赤な紅蓮が渦巻いた。
炎の圧縮なんてことは通常は不可能だが、この世界では別だ。余裕のつもりか。数秒の溜めを経て、ヴラドが誇る一撃の中でも最高峰の一手は放たれた。
拳大であった火球は凄まじい勢いで突き進み、道中の酸素を喰らってその大きさを数メートルにまで肥大化させる。
轟々と熱波と火の粉を撒き散らし、膨大な熱量で相手を灰化しようと襲い掛かっていく。

「くすくす」

何が可笑しいのか、笑みを浮かべたまま何をするでもなく立ちすくんだままの魔神。
距離にして５０メートルもなかったせいか、僅か数秒で大火球はその身に着弾。
衝突と同時に爆裂を起こし、爆風がヴラドの毛を逆撫でていく。
指揮官級や兵士級なら十分に即死レベルだ。例え同格の騎士級だろうと、まともに食らえば致命傷を与えられるに違いない。
そんな自信と自負はしかし、晴れた土煙から現れた無傷の女魔神の姿に崩れ去った。
嫣然と浮かべた笑みに整った容姿はおろか、その腰まである艶やかな髪も、はたまた露出の多い白い肌にも傷どころか煤一つ見受けられない。

『ば、ばかな……』

驚愕だった。自身消失とか以前の問題として、流石に目の前の出来事に呆然としてしまう。

そしてそれはヴラドらしくない、致命的な隙であり、それを見逃すほど相手は優しくはなかった。

「私の階級は“男爵（バロン）級”です。なもなき騎士よ、魔神相手に騎士が勝てると驕りましたか？」

一瞬の空隙だった、それこそ秒に満たないかどうか。

その一瞬でしかし、女魔神は刹那に距離を詰め、ヴラドの横で囁くように自身の階級を告げる。

反射的に飛び退るよりなお早く、横わき腹に信じられない衝撃が発生し冗談のような速度で吹き飛ばされた。

体重にすれば優に二百キロを超える身が軽々と宙を滑空し、やがて地面に接地、ずざざざざざ、と音を立てて土と草を抉っていく。

『…かっ…はっ！？』

何が起きたのか理解できない。断片的な情報と、女魔神が突き出している片手から己がただ力任せに殴り飛ばされたと知る。

その圧倒的な、数字に置き換えればたったの二階級の差。しかし、絶望的なまでの大きな差が今の状況を物語っている。

グッと下半身に力を込めて起き上がるが、直ぐに一歩二歩とよろけてしまう。

ごふっと咳き込めば口元からはたらりと赤い雫が零れ落ちた。

（内臓にモロに入った。参ったな……たったの一撃でこの様か。イ

ンパクトの瞬間、無意識に体を後退させてなければ想像もしたくないことになってたに違いない）

正直お手上げだった。今の攻防であっさりと、ヴラドは目の前の女魔神に勝つことを諦める。

油断とかそれ以前に攻撃が通用しない。人間の頃のように隙をついたとしても、魔族なら肉体再生、あるいは治癒術の一つは会得してるだろう。

そもそも最大の一撃が通用しない時点でヴラドに勝機は既になかった。

（それでも時間は稼がなきゃならない……戦闘駄目なら会話しかない、か）

「考え事は終わったかしら？　さっきの一撃で十分て思ったけれど、案外頑丈ね」

『これでも鍛えてるんでね。そちらこそ大した一撃だ、魔神とはかくもそう強大な者なのか？』

無論、頑丈な訳ではないし、実際ダメージは軽視するには些か重いが、それを口にするほど愚かではない。

「あら、アナタ……ロザリンドと居るからそれなりに長く生きてると思ったけど、もしかして若いのかしら？」

『残念ながらその通りだ。私は生まれてそう年月を経てないからな、知識もまだまだ薄いんだ。先達のよしみで是非ご教授願いたいところだが、いかがだろうか？』

「ふふふ……あなたの狙いくらい分かってるわよ？　私の足止めがしたいのでしょう？」

『なに、どうせ死ぬのだから、知的好奇心を満たしたいと思ったま

で。その実力なら私を即座に始末し、後を追うくらい造作もないだろう？』

流石に目的を隠すには無理があったようだと歯噛みする。間抜けな相手であれば楽だったろうが、流石にそんな好都合は期待できなかったようだ。

それでも内心の悔しさを面に出さず、ヴラドは飄々と肯定も否定もせずにのたまってみせた。

「そうね、アナタを始末するなんて実に簡単だわ。でも、私なんて魔神の中じゃ最下層もいいところよ坊や？　私の主人はもとより、世界には今の坊やと私以上に差がある、そんな強大な魔神でごろごろしているのだから」

勿論、そう魔神級がぽんぽんいる訳ではないけどね、と、どうやら話しに興じる気があるらしく口にする。

坊やとはヴラドのことだろう。実際女魔神は優に数百年を生きているのだから、さもありなん。

内臓のダメージで言葉をつっかえない様に、それでもどんな心境で言葉を交わす気になったのか気になりつつも、掴んだチャンスを逃さないよう言葉を送る。

『なるほど……それでも魔神である者を配下にしているんだ、さぞテトローイの領主は強い力をもつのだろうな』

「そうね、主人は素晴らしい力の持ち主よ。なんせ“伯爵級（グラーフ）”なのだもの」

そう口にする女魔神の表情はうっとりとしている。魔神は言わば一国一城の資格を持つに等しい存在だが、同時により強大な存在にも惹かれる性質を持つ。

それは魔神に満たない者が本能的に格上の存在を恐れるのと同じで、一種の生存本能にも近しい感情だ。

弱肉強食の世界だからこそ、弱者は強者に媚び、その庇護を得ようとする。

そして得た情報はまさに千金に値した。つまり、テトローイ領主は最盛期のロザリーと同等かそれ以上の実力者だということだ。

無論、この情報が確実性に欠けるのはヴラドも承知だが、それでも現状圧倒的有利な立場にいる女魔神達が嘘を教えるメリットは少ない。

『なるほど、どうして私と言葉を交わす気になったかは知らないが、折角だ、冥途の土産に教えてはくれないか？　実は――――』

どれくらい時間が経ったのか。少なくとも話題がそろそろ尽きる程度にはヴラドと女魔神は語り合った。

基本自身を低く見せ、女魔神ないし、背後のテトローイ領主を持ち上げるように会話を続けてきた。

情報を鵜呑みにするわけではないが、それでも中々に有意義な一時であったろう。相手がこちらの生殺与奪を握っているような状況でなければ、だが。

そして会話もそろそろ潮時だろうとヴラドは感じ取っていた。向こうがどのような思惑でヴラドの案に興じたのかは不明だが、それも限界だ。

そんな空気が何時しか周囲に立ち込めていた。

「さて、冥途の土産は十分に買えたかしら？」

『十分だ、感謝しよう。だが……』

「だが？」

にやりと再び嫣然と微笑む女魔神。

むこうもヴラドが何を言うのか理解しているのだろう。

『残念ながら、むざむざ死を待つ道理はないぞッ！！』

同時、腹部に力を込める。

『おおぉおおぉおおぉおおおッ！！』

咆哮と共にありったけの力を込め炎を巻き起こす。時間にすれば実に一時間と少々だったが、多少の力を回復するには十分な休憩だ。

既に内臓へのダメージも回復し、体力もそれなりに戻っている。

これ以上引き伸ばせない会話なら仕方がない、結果的には十分な足止めにはなったのだから。

後はヴラドが無事に帰還し、エルとロザリー、リアンと無事合流するだけである。

全力で生成された炎の渦は天高く昇り、吹いた風に巻かれて竜巻と化す。

土壇場で生成された全力の一撃。手傷を負わせられるとは思っていない、僅かに足止めできれば十分！

魂力のほぼ全てを注ぎ込んだファイアホイールは轟々と荒れ狂い、ヴラドの意思のもと地面を抉り女魔神へと進みだす！

同時全速力でエル達が逃げ出した方向とは別に走り出す。同じ方

向では意味がない。
僅かに残った力でジェット噴射を巻き起こし、凄まじい速度で宵闇を駆け抜ける。
背後からは破壊音と自身の荒い息だけが聞こえてくる。一分、二分……そして五分。

（見逃された？　それともこちらよりロザリーを追うことを優先された？　違う、それなら最初からこちらを始末して先を進めばよかった筈だ……）

湧き上がる疑問と不安、なんとも言えない悪寒を感じつつも走り続ける。
やがて時間にして十五分が過ぎ去り、魂力も尽き果て、残るは自力での逃走となり一瞬気が緩んだ時だった。
トスッと、軽い音と何かを貫き貫通する音が一回、二回、三回……やがてヴラドは遅れて生じた痛みに気づく。
音の正体はどこからか飛んで来た矢であり、貫通する音は背中から腹部までを貫いた音だった。
計五本もの矢が背中を突き破り、奇妙なオブジェクトと化している。
視界が真っ赤に染まるような感覚の中、それでもギリギリ遠い場所から降り注ぐ矢を避けながら視界に霞んで見える森を目指す。

（私はこんなところで死ぬ訳にはいかないんだ……森に入れば障害物で矢を過ごせる、そうすれば休憩が取れるし、傷も癒せる。私は賭けに無事に勝利したのだ）

ドスンッ！　何か重たいものが地面に倒れこむ音がそばから聞こえた。

同時に視界が横転し、地面が重直に写りこむ。
どう言うことかと首を動かそうとしたが一向に力が入らない。
見れば夥しい量の赤が徐々に円を広げており、倒れ伏したのはヴラド自身であったと気づく。
急速に遠のく意識、既に痛覚は失われ、最後の微かに思考できた言葉は謝罪であった。

――すまない、エル……

小さな我が娘を思い、ヴラドの意識は闇へと沈んだ。

第二十五話（後書き）

後書き

暫く更新していきます。
久々の更新ながら、多くの読者から観覧していただき嬉しく思います。
ありがとうございました。
それでは感想や評価、心よりお待ちしております。

第二十六話

「よろしかったのですか？」
「なにをと聞くのは愚問であろうな。構いはしない、所詮先のハントは余興に過ぎないのだ」

そう言って、テトローイ領主が手にもったワイングラスから赤い液体をグッと呷る。

「ロザリンドの封印が解けたことなどどうでもよい。問題は私があやつを凌駕したのかという一点。今のアレではそれを証明することもできないだろう」
「では、どうしてあのような真似を？」

領主の目的がロザリンドが全快した後であると言うのなら、わざわざ命を奪いかねない追跡者を放つ理由が分からなかった。
確かに最初は格も低かったが、最後の辺りは騎士級や准男爵級まで放っていた筈なのだ。
女魔神の予想ではあの獅子の魔族で騎士級、領主の同胞の小娘はそれ以下、ロザリンドですら女魔神に今は及ばないだろう。

「なに、所詮はすべては余興。あの程度の追っ手に敗れ去るようなら、力の回復をまつまでもないと言うことだ。それに、己が狙われていると自覚した方が、より早く力を取り戻そうと行動するであろうよ」

そんなことの為に配下は死んでいったのか……などと領主も女魔神も考えはしない。
所詮雑魚が何人消えようと構わないのだから。この世界は弱肉強

食、死すれば即ち弱者。
強者こそが法であり、弱者は搾取されるのみ。ゆえに何人死のうがそれは自然の摂理に等しく、虫けらの死に心が揺れることもない。

「貴様から逃れたのだ、此度の余興は向こうの勝ちとしようではないか。何時の日かロザリンドが力を取り戻した時、その時が本当の遊戯（ゲーム）の開始であろう」

そう言って顔に走る傷をゆっくり撫で擦る。遥か昔、領主が傲慢と力に溺れていた時、自身と自尊心をロザリンドに砕かれ受けた傷。あの白皙の面に今度は己が醜い傷を与えてやるのだと、そう思って数百年。
ならばもう十年、数十年程度待つくらい苦ではない。むしろよき香辛料とすら言えた。
癒えない傷を与え、己の下に組み敷き、気丈な顔（かんばせ）を苦痛と快楽に歪ませる場面を想像し、口元が自然と綻ぶ。
ふと、未だ女魔神が部屋いるのを思い出した。

「ごくろうであった。もう下がって構わん」
「ハッ、失礼致します」

頭を下げ黙って屋敷の領主執務室を後にする。
領主はああ言ったが、実際のところロザリンド自身が女魔神を退けた訳ではない。
そもそも女魔神は領主に殺しても殺さなくてもどちらでもよいという、一見すれば奇妙な命令を受けていた。
だからこそあの獅子の魔族と一時の戯れに興じたのだから。
不思議な輩だったと思い出す。死を前にしてなお前を向く者など、この世界でそうはいない。
それも歳若い者だと言うのだから尚更だろう。ロザリンドがあの

集まりの中心だと思っていたが、実はそうではないのかもしれない。
それだけの空気が、あの獅子にはあった。己が与えた矢傷は間違いなく致命傷であったろう。生きてるとは到底思えない。

それでも……それでももし生きてたのならば、もしかしたら次会う時は遥か高みへと昇っているかもしれないなと。
らしくもないことを考え女魔神は屋敷を後にした――――

『……ここ、は』

覚醒は兆しもなく訪れた。意識が朦朧とし、視線が定まらない。
ふらりふらりと視線が泳ぎ、物体がより目のようにブレてしまう。
なぜ己がこのような状態になっているのか説明がつかず、取り合えず身体を動かそうとすれば――――

『がぁあぁッ！？』

あちらこちらから凄まじい痛みが発生し、口元からは情けない悲鳴が漏れ出した。
痛みに対する訓練は嫌というほど積んでいたが、それでも不意打ちのコレはヴラドも予想外だ。

『グゥ…ォォ…』

起き上がりかけた肉体がズズンッと、地響きを立て何か柔らかな床に沈む。
同時再び例えようもない痛苦が脳神経を刺激し、先程よりはマシだが声が漏れる。

（なんだ、これは？　まるで極度の筋肉痛のような……）

起き上がるのは諦め、どうして己がこんな事態に陥ってるのか考えるが、どうも記憶があやふやだ。
確か、ロザリーやエル達と逃走していた筈だがと記憶を揺り起こすも、それ以上は思い出せそうにない。
忘れては都合の悪いことだった気がするのだが、思い出そうとするたびに酷い頭痛がしてままならなかった。
数分か数十分か、痛みに耐え努力するも実らず、仕方なしに諦める。
肉体を末端から動かし、やや痛みが薄れてきた頃合を見計らってゆっくり立ち上がっていく。

『グオ、オ……下手な拷問より辛い、な、これは』

生まれたての小鹿のように震える足腰をささえ、なんとか四足でバランスを取る。

『これは……』

そこでようやく回りを見渡せば、柔らかいと思ったのは多くの枯葉であると気づいた。
しかも洞穴の中らしく、縦十、横八メートル程の先に岩肌が見えた。
随分大きな道だが、奥行きはそうでもないらしく、ヴラドの居る

場所が最奥であるのだが、五十メートル程先から外の景色が覗える。
自分でここに入ったのか、それとも誰か、エルかロザリーかが寝かしてくれたのかも判別がつかず、よろよろと外へ向かっていく。
歩くたび痛みが走り、特にそれは背中に集中している。まるで重症を負い、それを形だけとりあえず治癒させたかのようだ、ヴラドは内心溜息を吐いた。

『ん？』

もう直ぐ外に出るというところで、逆光でぼんやりとし確認できないが、誰かが洞穴に入ってくる。
背丈からロザリーと声を掛けようとして、その気配も、下半身の異様な広がりも、すべてが見知らぬものであると知り身体中の毛が逆立つ。

『……グルルルルル』

気づけば喉からは警戒するような声が漏れ出し、肉体は痛みすら無視して戦闘態勢をとっていた。

『止まれ！　それ以上近づくのなら容赦はしないぞッ！！』

ヴラドの日本語を理解したのかは不明だが、相手の歩みが止まる。

「――――――――？」

言葉だ。ニュアンス的には何か聞かれたようだと感じたが、耳に入った言語は見知らぬものだ。
恐らくテトローイで使われていたものだと思われるが、ヴラドには理解できない。

『私は一般的な言語を知らないのだ』

「……――――――？」

どうやら敵意はなさそうだと思い口にするが、相手もやはりというべきか、ヴラドの言葉が理解出来ないらしい。

逆立った毛を収めたのだが、どうも警戒され続けていると思っているのかおろおろとした雰囲気が伝わってくる。

さてはてどうしたものかと思った瞬間、聞きなれない、しかし何か力ある言葉が耳に届く。

「――――――――」

同時、やはり言葉は分からないものの、どうやらこちらの具合を案じているのだと。

そういった大雑把な感情を感じ取れた。恐らく何かしらの魂術だろうとあたりをつけ、痛む身体に鞭をうって先程の場所まで戻る。

犬のように身体を丸め、腕の上に頭を乗せ相手に敵意がないことを知らしめる。

その様子にこちらの意図を察したのか、逆光で見えなかった人物がゆっくりヴラドへと近づく。

やがてその容姿が明らかになるにつれ、ヴラドの内心は驚きに染まっていった。

「――――――――――？」

今度はどうやら目が覚めたことを喜んでいるらしいと、そう理解できた。

が、そんなことよりヴラドは目の前の“少女”に意識を丸ごと奪われてしまっていた。

血管が透けて見えそうな程に真白い肌。腰まで流れるウェーブ掛かった髪はロザリーと似た色であり、その毛先はクルンと巻き毛のようになっている。

少し下がった眉に、丁度良さそうな大きさの瞳は血のような紅。ぷっくりとした小ぶりな唇に、つんっと主張するこれまた愛らしい小鼻。

華奢な身体を包む衣服はなく、丁度よい大きさの胸は恥じらいもなく晒され、その先端は健気にも重力に逆らい上向きの姿勢だ。

「？」

ヴラドの視線に気づいたようだが、どうも己の格好を自覚していないのか困惑の感情しか感じない。

別に情欲と言う訳ではないが、とあるものが目に付きついついそこから下半身を凝視してしまう。

なだらかな曲線を描くボディラインを追っていくと、なぜか巨大な花びらが視線を遮る。

まるで巨大な薔薇の花にも見える白い花。そこから更に視線を下っていけば、見えるのは無数の蔦。

幾百と花の付け根から生えたそれは多くのトゲを持ち、蠢いている。どうやら少女の足らしい。

可憐な容姿に目を奪われたかと思えば、下半身は植物ではないか。

（……アル…ラウネ？）

それが少女を目にしたヴラドの観想であった。

第二十六話（後書き）

後書き

連続更新にあたり、一話の量は少なめ。
帰宅が遅くなり更新も遅くなりました。
昨日今日今朝は評価もお気に入りもそれほど増えてなかったのに、帰宅したら予想以上に増えていた。
嬉しい。素直に嬉しい。一度は日間一位にもなったことがありましたが、更新不定期もあり、評価はもう伸びないだろうと諦めていたのですが……

これも読者様のおかげです。
まことにありがとう御座います。

それでは感想評価、誤字脱字の報告などココロよりお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9228r/

ようこそ魔界（クリフォト）へ！！

2011年12月7日01時30分発行